
IS《インフィニット・ストラトス》 駆け抜ける光

きつねorとら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
インフィニット・ストラトス
IS 駆け抜ける光

【NZコード】

N8475S

【作者名】

きつね。ことら

【あらすじ】

少年は人の暖かみを知った。

世界から見捨てられていた少年が成長し、ISを動かせるまでになつた。

少年は戦う、母の為、この暖かみを伝えるために……

純粋にIS、ガンダム好きの人は嫌悪感を感じてしまうかもしれません。もし感じたならすぐに、戻されることをオススメします。

なお、作者はあまり上手く書かれてないので考慮していただけたら
と。

アンケートを実施中ですので詳しく述べ「アンケートについて」を
見てくださいませ。

プロローグ（前書き）

なんか自分で何を書いてるんだ？って状態ですwww
もう一つの小説と一緒に頑張つていこうと思っています。

みひじくおねがいします！

プロローグ

少年は不思議な能力を持つてこの世に生を受けた。しかし、両親は気持ち悪がつて少年を研究所に渡した。

研究所内の生活は残酷なものだった。少年の他にも同じ年の子がいたのだが、全員実験材料にされ、幼き命を散らす者もいた。拷問にも近いそれを耐えるのに疲れた少年は研究所から逃げた。逃げたのはいいが食料も無し、体力の限界も迎え、少年は倒れた。

「ああ、僕はここで死ぬのか……せっかく逃げたのに、みんなと同じように……」

少年は死を覚悟した。誰も助けてくれない、こんな奇怪な能力があるからこんなことになつたと、彼は自分を始めて呪つた。

「……！ 大丈夫か！？」

その声の方向へ向こうとも力が入らない。だが、声からして女性なのは分かつた。

「誰がこんな酷いことを……！ 頑張って耐えてくれ！」

女性は少年を抱き抱えると、走っていく。

「目が覚めたか？」

少年はいつの間にか寝ていたようだった。目が覚め、周りを見渡す。

「Jの女性の部屋なのか、生活に最低限の物しかなく、いたってシンプルだ。

「全く、こんな小さな子を捨てるなんて……親失格だな！」

女性は怒りをあらわにしている。少年にはなんで怒っているのか正直分からなかつた。

「あの……なんで怒ってるんですか……？」

「当たり前だ！ 君は捨てられたんだぞ！？ 君はどうも思わないのか？」

「……だつて、ぼ……僕は、普通じやないから……」

そう。Jになつたのも全部、この奇怪な能力のせい。普通に両親と暮らして、友達遊んだりしたかつた。でもそんなことは許されないんだ……。

「……何を」

「え？」

「何を馬鹿なことを言つているー 普通じやない？ だから何だ！？ だからつて人を捨てるのか？ 君はそれでいいのか！？」

少年は迷わず答える。その声は小さいが意志のこもつた声で、

「い、嫌だ……僕だつて、お父さんやお母さんと一緒に居たかつた！ でも……う、うあああああん」

少年は泣いた。今までの辛かつたことを思い出したのだろう。少年にとって世界は残酷なものだった。

泣いてると、女性が少年を抱きしめた。

「大丈夫だ。私が君の母親になるよ。私じゃ、役不足かもしねりないが、それでも……」

女性の慈愛に満ちた声とその暖かみを感じて、少年は

「お母さん……お母さん！」

少年はこの時、人の暖かみを知った。そして少年は誓つた。
もう僕は逃げない……この能力も正面から向き合つんだ。そしてお母さんに恩返しするんだ！

プロローグ（後書き）

さて、次は主人公の設定です。

主人公の設定（11月8日更新、ネタバレ注意）

名前	織斑	光輝
年齢	15歳	
性別	男	

経歴

ある能力を持つてこの世に生まれたが、ある日両親がそれを嫌つて、研究所に。そこで実験台にされ毎日、そこで出来た友達の死、両親に裏切られたこと、日々の苦痛によつて心を閉ざす。脱走を成功させ、逃げる日々が続くがついに力尽きる。

そこで織斑千冬に助けられる。始めは自分のことなど、どうでも良くなつていたが、千冬の暖かみ　人の光を知り、能力と向きあうと共に、自分の母親になつてくれた千冬に恩返し、そして人の暖かみを伝えることを決意。

だがそれでも他人への警戒は激しく、ときどき会つて話す千冬の弟、一夏と馴染むのにもかなりの時間がかかった。

千冬と過ごしていく中で、ISの開発者、篠々乃東と出会い、IS「ガンダム」を起動させる。東が言うには「こーくんの特別な脳波に反応したんだね」とのこと。

女にしか機動できないISを起動させた光輝は千冬の提案でIS学院に入学することに。

容姿と性格

黒の腰まであるロングヘアに整つた顔立ち。

身長148?の男の娘。

モデルは「処女はお姉さまに恋してる　2人のエルダー」の御門千歳をもうちょっと成長させた感じ?

(元が10歳だから成長させたほうがちょうどいいと思つ)

研究所の出来事で人にに対する警戒心が強かつたが今はかなり和らいでいる。恥ずかしがりやだが、言うときはしつかり言う子でもある。

恋愛に関しては他の人のことな抜けつこう敏感なのだが、自分のことになつたら鈍感になる。矛盾だ……。

容姿が明らかな女性なのでよく間違えられる。こればかりは仕方ない気がする。

名前の由来

「「」の暖かみを……伝えるようになる」という決意を込めて、千冬と考えた名前。

元々に名前は研究所でのストレスで忘れてしまっていた。

能力について

通常の人間に比べて、ずば抜けた直感力、洞察力を持ち空間認識能力をもつ人間として生まれた。

両親はこの能力を恐れ、光輝を捨てた。

IS「ガンダム」は光輝の脳波を感じして、光輝のISとなつた。

また、相手にプレッシャーを与え、相手を鈍らせる事もできるが光輝はコントロール出来ていない。

主人公の設定（1月8日更新、ネタバレ注意）（後書き）

IISの詳しい設定は後々書いつと 思います。

第一話～僕達以外は全員女！？（前書き）

一体、何を書いたんだろう？…と思ひぐらいいな文章です……
文才がねえよ！

第一話～僕達以外は全員女！？

「ふう……やつと着いた」

今日はIS学園の入学式だ。IS インフィニット・ストラトスは今までの兵器を超えたものなのだが、女性にしか装備できないというものだ。

そのせいで、今の世の中は『女尊男卑』。女性が優位に立つて、男性が女性に対して戦争を起しても、三日も持たないと言わされている。ISは今までの兵器を超えてる 故に意味をなさない。ISを装備した女性に男性が勝つのは不可能である。

「来たのはいいけど……」こりつて女の子しかいないんだよ。でも夏兄なつにいもここに入学してるって言つてたし、同じクラスになるといいなあ

ISは女性しか動かせないんだけど、夏兄と僕はひょんなことからISを起動させたんだ。僕のISは待機状態で、首に掛けてある白い十字架のアクセサリーになってる。

と、遠くから女性が走つて来ている。黒髪にスーツ、タイトスカートを履いていて、走りにくそつだつたがそんな素振りは全く見えない。

「すまない、遅れたか」

「つうん、大丈夫だよ。さつき来たばかりだから」

「Jの女性は織斑千冬さんおつばちゆうさん。僕に暖かみを教えてくれた人でもあり、僕の母親なんだ。血は繋がっていないけど、本当の家族のように接してくれた恩人だよ。

「セヒ、ちゅうと急いで行かないと間に合わないから、早歩きでいい
べが」

セツハツとお母さんは歩き始めて僕も後を追つ。

「セツハツばや、学園内じやセツ呼んだりここなの？」

「織斑先生だ……」

やっぱりそうか~、結構抵抗があるけど困らせたくないし……

「分かりました。織斑先生」

……違和感あり過ぎだよ……。でも我慢だ。

「光輝も高校生か。あの時からずいぶん経つたが、私は母親になれ
たか？」

「もちろんだよ！ そのおかげで僕はこうして生きているんだから
……そんなこと言わないでよ……」

「す、すまん。にしても女みたいな姿はずっと変わらないな

つーーー！ 恥ずかしいなあ！ 声に出したいけどなぜか出ない
……

「可愛い奴め。すぐに赤くなるな、相変わらず」

「うーーー……気にしていることを……

ともまあ、そんなことを話しながら僕達は会場に向かつた。

恥ずかしいなあ／＼、隣が夏兄で良かつたけど、どうして2人とも真ん中なんだよ……後ろの視線が辛い……

入学式も終わり、クラスでSHR^{ショーティーホームルーム}中。女性副担任こと山田真耶先生によつて行われている。

身長はやや低め（僕と変わらないかな）で、服のサイズが合つてないのか、だぼつとして本人が小さく見えてしまう。かけてる黒縁の眼鏡も大きめなのか、若干ずれてる。こんな先生で大丈夫なのかな……。

「織斑一夏くんっ」

「は、はいっ！？」

夏兄も同じことを考へてたのか呼ばれて、驚いている。仕方ないと思つよ。だつて僕達以外全員女子なんだもん……。

「あつ、あの、お、大声だしちやつてごめんなさい。お、怒つてる？　怒つてるかな？　『ゴメンね、ゴメンね！』でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まつて今『お』の織斑くんなんだよね。あ、二人いるけど『い』と『い』じゃ、君の方が早いんだよね。自己紹介してくれるかな？　だ、ダメかな？」

気がつくと山田先生は夏兄にぺこぺこと頭を下げていた。あんまり頭を何度も下げるので、サイズの合つてない眼鏡がずり落ちそうになつてゐる。じつ見ていると、この先生が本当に年上か疑つてしまつよ……。

夏兄は山田先生にうわすつた返事をして、勢いよく立ち上がつた。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願ひします」

さすがだよ夏兄！ ふと周りの女子の様子を見る。『もつと色々喋つてよ』的な視線と『これで終わりじゃないよね？』的な空氣は何なんだ……。こんな女子だらけの場所で紹介しゆつて言われても夏兄の反応が正しいよ。

「以上です」

がたたつ。思わずしげける女子が数名いた。夏兄、頑張ったね……この空氣の中、よく自己紹介したね。

パアンッ！ 夏兄がいきなり叩かれた！ 誰だよ！？ つてお母さん……。

「げえつ、関羽！？」

パアンッまた叩かれてる。お母さん、それぐらいにしないと夏兄が……。ああ、若干引いてる女子が数名いるよ。

「誰が三國志の英雄か、馬鹿者」

トーンの低めの声。でもその声も聞きなれている。さつきの入学式前の時とは霸気が違つし、これがお母さんの教師モードか。

「諸君、私が織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言つことはよく聞き、よく理解しろ。良ければ返事をしろ！ 良くなくとも返事をしろ！」

「はいっ！」

クラス全員の女子が返事をしたらこんなにも響くのか……軽く耳

が痛い。

「よし、次！ 織斑光輝！」

「はっはい！」

いきなり呼ばれ立ち上がる僕。うう、人前なのはやっぱり恥ずかしいなあ／＼で、でも、夏兄だつて頑張ったんだから僕だつて……！

「お、織斑光輝です。えっと、よ、よきゅ、言われるんですが、こんな容姿でも、一応、お、男なんでも、ま、まちがわにやいで下さい。よろしくお願ひします……」

うわああああ！ 噛みまくつだあああ！ よきゅつてなんだよ……はあ～。

「うして恥ずかしい血口紹介を終え、僕のエジ学園での生活が始まったんだ。

第一話～僕達以外は全員女！？（後書き）

次は、 篠とセシリ亞を出します ｗｗｗ

第一話～英國の代表候補生（前書き）

駄文ですが読んでいただければ幸いです。

第一話～英國の代表候補生

「なあ光輝、お前ＩＳの勉強したのか？」

「まあ一応。夏兄はまさかの捨てぢやつたパターンだからね。先生が怒るのも仕方ないよ」

一時間目の休み時間、僕は女子達の熱い視線を感じながら夏兄と話していた。夏兄つたら入学前に貰った必読の参考書を捨てたんだから、相変わらずおっちょこちょいというか何というか。

夏兄はお母さんの弟で、血の繋がってる家族はお母さんと夏兄の二人だけらしい。僕と同じように親に捨てられたって言つてた。でもお母さんは「これからは三人家族だな。家族は多い方がいい」って笑つてたんだ。僕はお母さんと住んでたから夏兄とは会える時間が少なかつたけど、夏兄もお母さんと同じように優しい、暖かさを持つた人なんだよ。

「ちょっと、ようじくて？」

「へ？」

「はい？」

話しかけてきた相手は、地毛の金髪が鮮やかな女子だった。白人特有の透き通ったブルーの瞳がややつり上がった状態で僕達を見ている。

わずかにロールがかかった髪はいかにも高貴な生まれですよ、と主張しているようであまり好きじやない。敵意は無いようだけど、明らか見下してゐる。

「訊いてます？　お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど……どうこう用件だ？」

夏兄が答えてくれた。この人はあんまり好きじゃないのもあるけど、初対面人と話すのは苦手なんだよ……。

すると、目の前の女子はかなりわざとらしく声をあげた。

「まあ！ なんですか、そのお返事？。わたくしに話しかけられただけでも光榮なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

IISを使える。國家の軍事力になる。だからIIS操縦者は偉い。そしてIIS操縦者は原則、女子しかいない。

だからってその力を振りかざすのは違う！ 力を持った時から誰かを傷つけることを知らない奴だな。物理的なものや、こういう精神的な攻撃もある……。

「悪いな。俺達、君が誰か知らないし」

そうだよ。自己紹介でいろいろ言つてたけど、所詮はむやみに立場だけを主張している人なんかどうでもいいよ。

でもその反応が相手にとって不可解なものだつたらしく、吊り目を細めて、人を見下す口調で喋る。

「わたくしを知らない？ このセシリ亞・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを…？」

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

いちいち感に触る子だ。

「代表候補生って、何？」

がたたつ。聞き耳を立てていたクラスの女子数名がずつこけた。
そりや そうだよね……。夏兄さすがにそれは分かろうよ。

「あ、あ、あ……」

「あなたが、本領でやつしやつしてやるのー。？」

すゞしい剣幕だった。血管マークが三つぐらについてそうな……。

「おう、知らん。光輝は知つてるか？」

夏元、さすがに知つておられる……」

オルコットさんは怒りが一周して逆に冷静になつたのか、頭が痛そうにこめかみを人差し指で押さえながら、ぶつぶつ言いだした。

「信じられない。信じられませんわ。極東の島国といつのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識」

「で代表候補生って？」

一 僕が言うよ。国家代表 IS 操縦者の、その候補生として選出され

「もう一回の『うまい』が、一つある限り、必ず来る」

結局はそう言いたいんだね。下らないよ。

「そう、わたくしは優秀ですから、あなた達のようなような初心者にも優しくしてあげますわよ。E.Sで分からないうちがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

唯一を強調してたけどさ、僕達も……

「それなら倒したぞ。光輝もだよな？」

「そ、そうだね。そんなに強くなかったよ」

一部の女子が「可愛くて強いなんて……同じクラスになつて良かつた」なんて言つてるよ。うう可愛いだなんて……

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

ピシッ。何か……氷が割れるような音が。

「あなた達も教官を倒したつて言つたのー？」

「うん、まあ。たぶん」

「そ、そうだよ。たまたまかもしれないし」

「それでもこれが」

キーンゴーンカーンゴーン。

ちょうどチャイムが鳴つてよかつた。やつとお嬢様の見下しタイムも終わつたよ。

「またあとで来ますわ！ 逃げなことねー！」

はあ～まだ続くのか……。

「はいっ。織斑くん兄を推薦しますー！」

「私は可愛い弟くんをつ！」

一時間目。クラス代表者 クラス対抗戦や生徒会の会議の出席とか、要はクラス委員長な感じ を決めようつてことになつたんだけど、どうにも僕か、夏兄になつてしまつそうだった。

「代表候補生は織斑一夏、光輝……他にはいなか？ 自薦他薦は問わないぞ」

「ちょっと待つたつ」

「そうだよ！ こんなこと」

とつさに立ち上がる夏兄と僕。そして視線の一斉射撃。僕には感じる、『この一人ならどうにかなる』という無責任な期待が……。

「織斑兄弟。席に着け、邪魔だ。他にはいなか？ いないなら無投票当選だぞ」

「納得いきませんわ！」

バンッ机をと叩き、そしてこの声は間違えない。お嬢様が降臨してきましたよ。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリ亞・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

黙つているのをいいのに言いたいと言いやがつて……

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなければならない」と自体、わたくしにとつては耐え難い苦痛で……

もういい。夏兄も同じなのか相当な怒りを感じる。

「イギリスだつて大したお国自慢じやないだろ。世界一まことに料理で何年覇者だよ」

「夏兄、すゞい！」

「あつ、あつ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「侮辱？ オルコットさんも侮辱したよね？」

僕はいつの間にか口を開いていた。

「僕は君のその感覚が嫌いだ。そつやつて力を無理やり振りかざして、他人を傷つける。その考えが一番嫌いなんだよー。」

静かに「怒つた弟くんもいいなあ」とか聞こえるけど、気にする場合じゃない。こいつだけは。

「決闘ですわつ！」

オルコットさんは一番の敵意を僕達に向けてきた。つかいちいち机を叩くのはやめなよ。

「おう。いいぜ。その方が分かりやすいしな」

「そうだね。男だからってハンデなんかいらないからな」

その言葉を言つた途端、クラスがざわめく。変なこと言つたかな？

「二人とも、本気なの？」

「男が女より強かつたのは大昔だよ？」

「T-Sが使えるかもしないけど、言い過ぎだつて」

みんな本氣で笑つてる。でも、やつてみないと分からぬでしょ？
オルコットさんも明らかに嘲笑をその顔に浮かべていた。

「じゃあ負けたら一人ともわたくしの奴隸として学園を廻りすのよ」

「ああいいぜ。やつてやるよ」

「構わないよ。負ける気はないから」

「許せないんだ。こんな考えを持つてる奴がいるから分かりあえな
い……。そうやって他人を見下して傷つけてる。それを気付かせる
だけでも。

「さて、話はまとまつたな。勝負は一週間後の月曜。放課後、第三
アリーナで行う。兄弟とオルコットはそれぞれ用意をしておくよう
に。それでは授業を始める」

お母さんがパンツと手を叩いて話を締める。僕は敵意を感じながら席に着いた。

この一週間出来ることをしてこいつ。絶対に勝たなきや！

その前に授業を受けないと、それからだね。

「ふう、なんか疲れたな」

今日の授業も終わり、放課後。山田先生から寮の鍵を貰い、部屋
で休憩中。

部屋には大きめのベッドが一つとシャワー室。ベッドはけっこつ
な高級品でなんというか、もふもふ感が違う。さすが世界のT-S学

園だね。

僕と夏兄の二人の部屋になつた。夏兄だから良かつたけど、知らない女子だったら緊張して動けないとこりだつたよ。ありがとう夏兄。

「あ～さつぱりした。待たせたな、夕飯行くか？」

「うんっ。そうしょい」

部屋をでて食堂に向かうのはよかつた。でもそこいら中に、

「なんでこいつも僕達、監視みたいなことになつるんだよ」「確かに、極端に男子との交流が少ないからテンションが上がつてるんだよ。捕まらない内にさつさと行こうぜ」

僕達はダッシュで駆け抜けた。そこに一人の女子が出てきた。

「なんだ、篠か。どうかしたか？」

彼女なら安心だ。

篠々之篠さん。しののほつき夏兄の幼馴染なんだけど、僕自身はあんまり話したことないからどんな人かは知らない。でも他の女子のように襲つてくることはなさそうだ。

黒のポーテールで、肩下まである黒い髪を結つたリボンが白なのも変わつてない。確か剣道でかなりの実力者だつたかな？

「ちょうどよかつた。二人とも一緒に食堂に行かないか？」

「いいぜ。多い方がいいしな。光輝は大丈夫か？」

「い、いいよ。僕は大丈夫……」

やつぱり緊張する。失礼なのは分かつてゐるけど、うう……

僕達は隠れている女子を避けながら食堂に向かった。

「明日から私が一人を鍛える。いいな？」

夕食中、特訓をじつするか篠さんに尋ねてみるとそれに付き合つてくれるというんだ。良かった、心強い味方だよ。

「本當か？ 助かるよ。明日から頼むぜ篠」

僕の勘違いか篠さんの顔が赤くなつた……。そうか夏兄の事が好きなのか。雰囲気で分かるよ。そう考えたら僕はいない方がいいかも

……

「僕は、止めとくよ……」

「どうしたんだよ、光輝？ そうか！ 篠が怖いのか？ 大丈夫だつて、な？ 篠……つてどうしたんだよ？」

ああ、好きな人に怖いって言われたらそりや怒るよね。夏兄が悪い。

「なんでもない！ 一夏の馬鹿！」

そう言つて篠さんは何処かに行つてしまつた。夏兄つてこういふのはすごい鈍感なんだよね。

「どうしたんだ篠の奴？ まあいいや、さつあと食べようぜ」「う、うん。あのさ夏兄？ 篠さんに後で謝つてきた方がいいよ？」「ん？ どうしたんだよ光輝も。俺なんか悪いことしたか？」

「……はあ。もうこことよ

夏兄が最後までその理由を分かることがなかつた。

その夜、僕は寮の屋上で夜空を眺めていた。入学式なのに何日もたつた感覚だよ。それほど騒がしい一日だつたつてことなのかな。

「いきなり大変なことになつたな

その声に振り返ると、お母さんがいた。学校にいた時と変わらない姿で僕の隣に来た。

「オルコットが許せなかつたのか？」

「力を振りかざして他人を見下すなんて、僕は許せないよ」「そうか……、でも恨みに取り込まれるなよ。そしたら戻つてくるのは難しいからな」

確かにそう。恨みだけの為に戦えば自分もそうなる。分かつて よ。

「大丈夫。僕はオルコットさんに分かつてほしいだけなんだ。その考え方間違つてるつて

「そうだな。でも無理はするなよ。サイコバーストはできることなら使うな。いいな？」

「分かつたよ。お母さんに心配かけたくないから

そういうとお母さんは屋上から静かに出ていった。

「さて、明日から本格的な特訓！頑張りつー！」

屋上を後にした千冬は安心していた。

成長したな二人とも。

もう一人の家族がちゃんと無事に過ごしてくれるならそれでいい。

教師として、家族として見守つていこう。

第一話～英國の代表候補生（後書き）

篇だすとか言いながらあんまりだしてないといふ www
二人の特訓は書かずには決闘当日を書きます。
一夏の戦闘はカットするかも…

第三話前編～白と可能性（前書き）

光輝の試合前のことを書きます。

第三話前編／白と可能性

翌週の月曜日の放課後。オルコットさんとの決闘の日。なんだけ
ど……

「なあ、篠？」

「なんだ一夏」

この一週間、僕と夏兄は篠さんと剣道の稽古を付けてくれた。僕自身は初めてで、どっちかというと実践3割、精神統一7割だった。夏兄と篠さんはずっと実践だったけど、それが問題で……

「結局、HSのこと教えてくれる話はどうなったんだ？」

「…………」

「目をそらすな」

そう稽古ばかりだったところのことだ。

「し、仕方がないだろ？ お前のHSもなかつたのだから」「でも、基本的なこととか、あつただろ！」

夏兄と僕には専用機があるようだ 僕は待機状態になつてゐる
夏兄専用HSは「たついてるらしく、來ていない状況なのです。
現に今も……

「お、織斑くん、織斑くん、織斑くんっ！」

第三アリーナ・Aピットに駆け足でやつてきたのは、おなじみ副担任の山田先生だ。あの、一回呼んでもらえるだけで大丈夫ですよ。

「先生、落ち着いてください。ゆっくり深呼吸してください」「はいっ。すくすくはくはく……ふう、助かりました」

何よりです。もつと落ち着かないとい、危ないですよ。てか、この先生は本当に年上なんだろうか。今度聞いてみよう。

「山田先生はお前達より年上だぞ」

ね。振り向けば、お母さんがそこにいた。読心術つてかなり難しいよ

「えっとですねっ！」
来ました！
織斑くん専用のI.S.Gが！」

さつきから『織斑くん』って言つてゐるけど、僕も織斑ですからね。血は繋がつませんけど。

「織斑兄、すぐに準備しろ。アリーナを使用できる時間は限られてるからな。ぶつつけ本番でものにしろ」

「この程度の障害、男子たるもの、乗り越えてみせろ」

実の姉と幼馴染からの容赦ないお言葉だよ。まあ仕方がないのかなあ。

「ごんづと鈍い音がして、ピット搬入口が開く。斜めに噛み合うタイプの防壁扉は重い駆動音を響かせながら向こう側を晒していく。

「これが織斑くん専用IS『白式』ですっ！」

これが夏兄のI.S.……可能性を感じる。 ガンダムに匹敵する
ほどの可能性が。

飾り気のない無の色。眩しいほどの白と夏兄が『繋がる』。

「HSのハイパーセンサーは正常に作動しているようだな。一夏、
気分は悪くないか？」

お母さんが微妙にだけど、声を震えさせている。心配なのは
分かるけど、夏兄なら大丈夫だよ。信じてあげてお母さん。

「大丈夫、千冬姉。いける」

「そうか」

夏兄のいつもの声。お母さんのほっとした声。この一人の絆がど
れほどのかが分かる。

「篝、光輝」

「な、なんだ？」

「夏兄……」

「行つてくる」

「ああ、勝つてこい」

「大丈夫だよ。夏兄なら、大丈夫だから！」

僕達の応援を聞いて、安心した夏兄は決闘へ……

一夏VSセシリアは割愛させていただきます。

「惜しかったね夏兄」

「自分のHSの特性を把握することをしないからだ」

「篠々乃の言つ通りだな。全く、大馬鹿者め

結果的に夏兄は負けてしまった。^{フォースト・シフト}一次移行が終わって、追い込んだのは良かった。切りつける前にエネルギーゼロといつ結果だ。

「大丈夫だよ夏兄。もっと頑張れば強くなれるよ」

「ありがとう光輝。次は光輝だよな？」

そうだった……。夏兄の仇を絶対に。

「よし、織斑弟、IISを展開しろ
『はいっ！』

返事をして僕は集中する。

『行くよ、ガンダム』

待つてました、言わんばかりに大量の光が僕を包んで、消える。
同時にIISのハイパーセンサーが作動する。

白と黒を基調とした機体で、左肩には『』の文字、左腕に装備
してあるシールドにはユニコーンのマークがある。一番の特徴は、
左の背中半分に装備してある、放熱板 フインファンネルだろう。

「これが光輝のIIS……すごいな

「なんというか、威厳を感じるな」

「こういうタイプのIISは始めてですねっ！」

それぞれ感想を漏らすが、お母さんは違った。一度見てるしね。

『光輝、無理はするんじゃないぞ』

『大丈夫だよ、お母さん。勝ち負けじゃないから』

プライベート・チャンネル
個人間秘匿通信で話すお母さんと僕。表情に変わりはないが、心

配してくれてるのが伝わる。ありがとう。

「負けるとしても精一杯頑張つてこい光輝。それがいいのだ」

「光輝は光輝なりに頑張れ！」

「篠さん、夏兄……ありがとうございます。それじゃ、行きます」

僕はそう言つと、フィールドへ出撃した。

第三話前編／白と可能性（後書き）

次は光輝VSセシリ亞です。

明日か、明後日には更新します！

第三話後編／ガンダムの力（前書き）

ちょっとあやふやな点もありますが……

第三話後編／ガンダムの力

「あら、逃げずに来ましたのね。さつきのお方が負けたから、怖くなつて逃げたかと思いましたわ」

オルコットさんがふふんっと鼻を鳴らす。また腰に手を当てたポーズが様になつていて。

「……逃げないよ。夏兄の仇は僕がとる！」

鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』。その外見は、特徴的なフイン・アーマーを四枚背に従え、どこか王国騎士のような気高さを感じさせる。

「その勇気に応えてチャンスをあげますわ」

腰を当てた手を俺の方に、びしっと人差し指を突き出した状態で向けてくる。オルコットさんの身長を超えるレーザーライフル『スタートライトmk?』の砲口が下に向いている。

チャンスと言われ少し動搖してしまう。争わずに済むならそれでもいい。

「ど、どんな？」

「先ほどの方はわたくしに負けましたので奴隸扱いです。しかし、このセシリ亞・オルコット。それはさすがに酷いと思いました。そこで！　もし、あなたがわたくしに勝つたら、その条件を破棄しても構わなくてよ？　それがあなたが、わたくしに土下座して謝るのもいいですわね」

……少しでも期待した僕が馬鹿だった。こんな奴に期待する僕もまだまだだな。

「そこまでして……人を見下したいかっ！ 土下座はしないけど、その条件乗った！ もし僕が負けたら、夏兄じやなくて僕を一生奴隸にしてもらつても構わないぞ！」

相手も条件をつけてきたんだ、このぐらいは戦いの礼節だよ。とオルコットさんが冷めた笑い声を放つ。

「あはははははっ、おもしろいですわね！ いいでしょう！ その条件いいですわ！」

キュインッ！ スターライトmk?から青のレーザーが放たれるが難なく避ける。同時にブルー・ティアーズから4基のビットが放たれそれがレーザーを放つ。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリ亞・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

ふん、その程度の砲撃で押してくるつもりなのかい？ こっちも使おうか。

「行つて！ フインファンネル！」

その声に反応して、装備してある放熱板の6基の内、4基が離れて、「」の字になる。 フインファンネルは ガンダムの独特的の武装だ。光輝自身の脳波で操作でき、ブルー・ティアーズに比べると少し大きいが、放たれるビームの威力、移動スピードはE.S最高峰だ。

「そんな、ブルー・ティアーズ以外にオールレンジ武装があるなんて……！」

「ほらほら～集中しないと落とされるよ～」

その驚きでブルー・ティアーズの速度が落ち、ファインファンネルで一気に4基全てを落とす。ビームライフルを使つまでもなかつたね。

「そんなん！ ブルー・ティアーズが全滅！？」

「オルゴットさん、一つ良いことを教えてあげるよ。僕がファインファンネルを操作している時でも普通に他の攻撃ができるんだよっ！」

「光輝すげえ……あつという間に全部落とした……」

「ああ。いつもの弱気な光輝とは大違いだな」

ピット内で戦いを見ていた一夏と篝は、光輝の戦いを見て驚きを隠せなかつた。あの弱気な光輝がセシリ亞を追い詰めているのだ。

「織斑先生、一夏くんといい、光輝くんといい、すじーセンスですね～。初めてなのにここまでやるなんて……」

「……そうだな」

「先生つたら照れてますね～？ 照れていますよね～？」

「バシッ！ 真耶の頭に出席簿が直撃した。威力は一夏にせつているものより数倍の威力だ。

「い、痛い……」

「私は身内のことでからかわれるのは嫌いなんだ。覚えておくよ」「

怒りまじりの一言であったが、その声はビックリ心配な雰囲気をかもちだしている。

のびのびと戦ってるな。それでいいぞ。サイコバーストだけは使うなよ……

「オルゴットさん、もうやめないかい？」

ブルー・ティアーズも全基落として、オルゴットさんは《スター・ライトmk?》と他の武装で攻めるが、僕には当たらない。だって、レーザーの弾道とか予測ができるんだ。

また、オルゴットさんの動きも予測できるし、容易にビームライフルやファインファンネルが当たるのなんのって。

「な、なんですって！？」

「もうオルゴットさんのシールドエネルギーも少ないのでしょう？」

「や、止めませんわ！ 絶対に勝つてみせます！」

オルゴットさんが凄まじい敵意を向けてきた。その敵意をまともに受けてしまった僕は反応が遅れてしまい、相手の攻撃に当たってしまった。

「どうしました！？ セイキの威勢は嘘だったのですか！？」

どうにも身体が動かない…… オルコットさんのフレッシュシャーなの
か？

オルコットさんの一斉発射を直撃してしまい、エネルギーが一氣
に減ってしまった。

「はあ、はあ、これがセシリ亞・オルコットの実力ですわ……」

これが彼女の実力か……まさかフレッシュシャーにやられるなんて、
思つてなかつたよ……。でもオルコットさんの気持ちを感じれた。
どこか悲しそうだった……。

「す、ごいね。あんまり使いたくなかったけど、使つよ」

お母さん、「めんなさい！ でもオルコットさんも全力で戦つて
るんだ。

「サイゴバースト！」

叫んだ途端、僕を緑の光が包む。これが ガンダムの本当の力！

「な、なんですか!? その光は!?!？」

「これが ガンダムの最高状態だよ。でも負担も多いから、早く決
着をつけるよ!」

「あの綺麗な光は一体なんだ……織斑先生！」

苇が慌てて千冬に尋ねる。

「あれは『サイコバースト』。光輝の意志で発動する单一仕様能力だ。発動すれば全般的な能力は著しくアップする。ただし、使えば光輝の精神は少しづつ蝕まれる。無闇に使えば、精神崩壊してしまう」

「そんなことが……」

ここにいる誰しもが口を閉ざした。単一仕様能力を発動するのに、代償がいるエサなんて聞いたことないからだ。

光輝の大馬鹿者め！ あれほど言ったのに……！ 私の甘さが光輝に使わせてしまったのか？

千冬は自分の甘さに酷く責めた。だが今は光輝に祈るしかない。

「行くよっ！」

その瞬間、光輝が消え いや、セシリ亞の頭上に高速移動しうムサーベルで切りつけるが、セシリ亞はそれを、ギリギリで避ける。

光輝は6基全てのファインファンネルを射出し、セシリ亞目掛けて、高速移動しながら追い込んでいく。

「オルゴットさん、ごめん。終わりにするよ……」

光輝は避けるのに必死なセシリ亞に接近し、ビームサーベルで切りつける。セシリ亞のエネルギーがゼロになり

『試合終了。勝者 織斑光輝』

負けたショックを感じるセシリアだが、勝利した光輝の様子がかしかつた。

光輝の目は虚ろで焦点が合っていないし、呼吸も激しいものになつていて、同時に ガンダムも光を纏う前に状態に戻る。

「勝つた……勝つたよ。夏兄……お母さん」

「あ、あなた？ 大丈夫ですかー？」

セシリアの声が聞こえてないのか、突然ISが解除され、光輝は落下していく。現在の位置は地上から、約30メートルの高さだ。そんなところから落ちれば即死である。観客から多大の悲鳴が上がる。

「光輝さんっ！」

『オルコット！ 織斑弟を回収しろ！』

「間に合って……！」

千冬の声に反応してセシリアが急加速で落下し続ける光輝を追いかける。

「光輝！」

「お願いだ！ 光輝！」

落なし、意識が遠のいていく中で家族の悲痛な叫びを聞き、光輝が意識を失つた……

第三話後編／ガンダムの力（後書き）

バトルシーンは難しい……でも書いてて楽しい！

ガンダムの性能（前書き）

HSの説明です。

ガンダムの性能

専用 IIS 名
ガンダム

待機状態

首にかける白い丁字型（サイコフレームを想像いていただければ）

世代
不明

製作者
しののたばね
篠々乃束

束が昔に作りだした古い IIS だが、その力は第三世代をも軽く超える。しかし使用者に悪影響を及ぼす兵器もあるため、女でも使用不可にしていた。しかし、光輝が千冬と共に束の元に尋ねた時、光輝がたまたま ガンダムに触れ、それ以来、光輝専用として動かすことになった。

束曰く、「サイコフレームがこーくんの特別な脳波を感じして起動したんだね」とのこと。

額にあるヴァンテナが一番の印象か。

サイコフレーム

使用者の感覚の受信、直感力、身体能力の向上を促す。まさに光輝専用の IIS だというのが分かる。感覚の受信が向上してしまって相手のプレッシャーを受けやすくなっているが、気を抜かなければあんまり影響はでないらしい。

ワントップリティ
单一仕様能力

サイコバースト

サイコフレームの機能を最大限まで上げることで ガンダムの機能を最大まで上昇させる能力である。スピード、武装の威力、防御力の各能力を上げるサイコバーストだが、扱うには「使用者の精神」を削らなければならない。使い過ぎれば精神崩壊してしまふ恐がある。

能力上昇の他に他人との意識共有が可能で、これは使用者の意志で発動出来る。光輝の目標である「暖かみを伝える」ことも出来る。発動時には、鮮やかな緑の光が ガンダムを包む。この光が意識共有を可能とする。

この状態の ガンダムは、ハイパーセンサーで追いこかるは難しく、攻撃面ではどの武装もかなりのダメージを与えることができる。

武装

ビームライフル

IS自体のエネルギーは使わず、専用のエネルギー・パックを使用する。威力自体は高くないが連射性能とエネルギーに優れ、試合中にエネルギー切れになることは無い。

ハイパー・バズーカ

背面のバックパックに装備してある。手に持つて使えるが、背面に装備したまま撃つこともできる。威力は ガンダムの武装内でトップクラスだが、弾道が他に比べて遅い。

フィンファンネル

板状の収納形態で左背面に6基装備されており、攻撃時には折れ曲がってコの字に変形する。オールレンジ攻撃のできる『ブルー・

ティアーズ』に比べると大きいが、活動時間が長く、ビームの出力も高い。また ガンダムを中心に5基のフィンファンネルを使い、

ピラミッド型のビームバリアも展開することが出来る。

これを動かすには高い空間認識能力が必要で、光輝はそんなに意識せずとも操作が可能である。

ビームサーベル

バックパック右側に装備されたサーベルがある。比較的大型で、鎧を持った形状をしており、ビーム刃の形状も曲刀状となっている。光輝の意志で形状を変更することもできる。エネルギーの無駄を省くために斬りかかる際のみにビームが出る構造になっている。

頭部バルカン砲

ミサイルを撃ち落とすなど、牽制用の武装である。威力はほとんどなく、ダメージを『えるのは難しい。

シールド

左腕に装備しており、内部にはビームキャノン1門とミサイル6基が内蔵してある。シールドの表面には一角獣が描かれており、勇敢を表す。

ビームキャノンは独自の小型ジェネレーターを装備し、エネルギー一切れを起こしてもチャージされるので、使い回しができる。

ミサイルは、ハイパー・バスター・カより威力はあるが、ホームミング力、弾道のスピードに優れる。

攻撃兼防御を果たしており、この内蔵してある武装だけでも十分戦える。

打撃攻撃

要はパンチやキックである。リーチは短く、そこまでの距離に持ち込むの困難だが威力は高い。絶対防御を貫通して、直接、殴れる。

ガンダムの性能（後書き）

ところが Wikipedia から取り寄せてる部分もあります
……

当然ながら、原作とは違う部分もありますので。

第四話～腰かせと変化（前書き）

光輝×セシリアフラグかな？　こうこうのを書くのはなかなか難しいです。

第四話～腰がさと変化

その暗闇の中に僕はいた。何も見えない、聞こえない。でも感じるんだ、何かが近付いてくるのが……。

それから逃げても逃げても追いかけてくる。力尽きて、その場に倒れる。

得体の知れない何かに飲み込まれていく……いくら抵抗してもダメみたい。

声が聞こえる……夏兄とお母さんの声が、僕を呼んでる。

その声の方に向かいたいんだ。でも動けない……離してっ！ 僕はみんなの所に行くんだ！

そんな僕の抵抗も、弱弱しくなり動けなくなる。

「なんでっ、嫌だ！ 家族と離れたくない……もう寂しいのは嫌なのに……」

そうして僕は、何かに飲み込まれ 僕がまた一つ死んだ……

「うああああっ！」

悪い夢を見て勢いよく状態をあげた。でも夢にしてはかなり鮮明なんだよなあ。といふかここはどこ？

ベットで寝ていたみたいだ。周りにはカーテンが閉めているけど、この独特の薬品の匂い……保健室っぽいな。でもなんで寝てたんだ？

「えっと……オルコットさんとの決闘に勝つて、それから……うう、

思い出せないよ」

ガチヤン

誰かが部屋に入ってきたけど、この感じは……お母さん？ でもいつもみたいに強気な感じじゃないよ。何かあつたんだろうか？ カーテンを開けた人物は、思った通り、お母さんだつた。なんでそんな悲しい顔をするの？

「……光輝、約束したよな？ サイコバーストは使わないと」

そうだった。オルコットさんも全力で戦つてたのだから、僕も全力を出そつとして使つたんだ……。

「あの、え……つと、『めん、なむ』……」

パシンッ！ 僕はお母さんに平手打ちをされた。でも、約束を破つたんだ。罪は重い……。僕は何も言えずにただ俯いていた。お母さんを見るのが怖いから……。

「一夏や篠々乃、ましてや敵だつたオルコットも心配したんだっ！ しかもオルコットが助けなかつたら、死んでたんだぞ！」

「……！」

驚きだつた。あの見下すことしかしなかつたオルコットさんが助けてくれたのだ。どうか……試合が終わつた後、意識を失つたんだ。力を手にした時から誰かを傷つけることがある。光輝、まさに今のお前のことだな。かなり衰弱して命すら危なかつたんだぞ……」

次の瞬間、僕はお母さんに抱きしめられていた。ああ、伝わつて

くる……。お母さんの悲しみが、僕はとんでもないことをしてしまつた。いろんな人を心配させて、困らせて……
僕は抱きしめられながら聞いた。

「僕は、僕は……」こんな僕でもまだ家族ですか？　こんな心配ばかりかけてばっかりの僕は……」

「当たり前だ。ずっと家族さ。私と一夏、光輝、三人で家族だ。どんなことがあってもな、血が繋がつてる繋がつてないは関係ない」

「あ……あああ！　グスッ、あり、ありが、とう」

僕は泣いた。やっぱりお母さんには敵わない。実力がどうこうじやなくて、心が強い。それは兵器を使つても敵わない。改めて、お母さんの強さを感じた。僕もそつなりたいと、心から思った。

「じゃあ、明日からまた授業再開だからな。今はゆっくり休むんだぞ？」

「うんっ。ありがとう…　お母さん！」

お母さんはカーテンを閉め、扉に向かい

「学校では織斑先生だ。まあ、さつきまでのはよじとするがな」

そう言つて部屋を出たのを感じた。

と同時に勢いよく扉がバタンッ！　と開き、一いちに迫つてくる。
い、一体なんなんだ！？

カーテンを思いつきり開けてやつて来たのは

「光輝！（せん！）」

なんと、夏兄、篠さん、そしてオルコットさんの三人だった。

「光輝！ 大丈夫なのか！？」

「そうだぞ！ 試合が終わってホッとしてたらいきなり落ちていつたんだからな！ ひやひやしたぞ！」

「…………」

ふ、二人とも、落ち着いてよ。一気に言われても困るからさ。といふかオルコットさん大丈夫なんだろうか？ 元気なもそうだけど。「そ、そうだな……。いやでも、良かつたぜ。また明日から一緒に授業が受けれるしな」

「光輝、とにかく大丈夫そうで何よりだ。調子が戻つたら、一夏の特訓に付き合つてくれ」

「もちろんだよ！ 早く取り戻して、練習していかないとね」

やつぱり友達たちといるのは楽しいな。勇気が湧いてくるからね。

「じゃあ光輝、俺達はもう行くぜ？ 今日はしつかり休んで明日からまた頑張ろうな！」

「そういうことだ。また明日な」

そう言つと、夏兄と篠さんは部屋を出ていった。問題はこの人か

……

「…………」

「…………」

話が出来ない。あんまり慣れてない人と話すのは苦手なんだよな。

「え、エリック君……」

「」の暗い空気最初に変えたのはオルコットさんだった。

「聞きましたわよ。あなたの」の単一仕様能力を。自分の精神を蝕むのに、なんで使つたのですか？」

「えつと……その、ね？」

「何が「ね？」ですかっ！ 正直に答えなさい！」

「そ、そんなに怒らないでよ……ただでさえ女子と話したことなんか、あんまりないのに。」

「えつとね、オルコットさんは自分の力を全部出してたんだよね？」

「ええ、まあそうですわね」

「それなんだよ。相手が全力なら、僕も全力で戦う。何かを通じて仲良くなりたいっていうのもあつたしね」

「オルコットさん？ 顔がわざと怖くなってるよ？ なんかオーラが見えるよ？」

「あなたはもう少し自分のことを考えになりなさい！」

「えつ？ オルコットさん？」

驚いた。まさか「」でオルコットさんに説教されるなんて思わなかつた……

「仲良くなるのはけつこうです。でもその相手がいなかつたら意味がないでしょ！？」 分かりますか？」

「そういうことか……。確かにそれはそうだ。分かりあっても、片方がいなくなれば不安になるよね。」

「『じめん……。気を付けるよ』

「分かればいいのです。仲間なのですから、心配するのほ然です
」

オルゴットさんは顔を赤くして腕を組んで頷く。変わったね。決闘前みたいに嫌な感じがしない。見下す感じじゃなくて、優しい感じがする。

おっと、これは言つておかなきや。

「やつだ。言つたの遅れたけど、助けてくれてありがとう。オルゴットさんのおかげで僕は此処にいれるから」

やつ言つとオルゴットさんの顔はますます赤くなる。ん？ 照れてるのかな？

「や、やつもこつたでしょー？ 仲間なのだから当然とー。」

やつぱり照れてるなあ。完全に丸くなつたよ。決闘前と比べるとギヤップが激しいね。少し可憐い……。

「や、そうですわ。昨日もお見舞いに来たのですが、光輝さんは誰かと話していらしたの？」

はい？ 僕は今日、田を覚ましたわけで……

「ううん。決闘が終わって初めて田が覚めたのが今日だから、誰とも話してないよ？」

オルゴットさんが人差し指を額に当てる、真剣に悩んでいる。い、

怖いこと言わないでよ……

「そうですか。気になつたものですからつー……」

「気にしな」

あれ？ 昨日もお見舞い？ 僕は一体何日寝てたんだ？

「オルコットさん、僕は何日寝てたの？」

「そうですわね……今日で四日目しょうか？」

「よ、四日もー。どうしよう、授業かなり遅れちゃうな……」

IS学園はISの授業の他に普通の五教科の授業だつてある。ISの勉強はいいけど、五教科はまざい……どうしよう、夏兄に頼もうかな、大丈夫かな？

「そ、それなら大丈夫ですわ！ わたくしがお教えしましょー！」

「本当に！？ ありがとー、オルコットさんー！」

まさかのオルコットさんからの助け船！ この厚意を無駄にはしないよ！ またオルコットさんの顔が赤くなる。この人は一体どうしたんだ？ 熱でもあるのかな？

「オルコットさん？ さつきから顔が赤いようだけど大丈夫？」

当然、オルコットさんは慌てて後ろを向いた。本当に大丈夫かな

……

「お、女の子にそ、そんなこと聞くなんて……失礼にも程がありますわ！」

始めの方が声が小さくて聞き取れなかつたけど、聞くのはやめておこう。聞いたら殺される。そんな感じがする……

「で、ではわたくしはこれで失礼しますわ。早く元氣になつてくださいね。それと」

「な、なんでしょうか？」

それと、の部分を強調氣味に言つたので、思わず敬語になつてしまつた。

「今度からはセシリアと呼んでください。よろしくですわねーーー？」

女子の名前なんて呼ばないから緊張するなあも(....「んな」とを思つ僕つて変なのかな.....? でも呼んで欲しつて言つてるんだから断るわけにもいかないよね。

「わ、分かつたから.....落ち着いてよ、せ、し.....セシリアさん?」

「それでいいですか。それでほんとうに?」

オル もとい、セシリアさんは部屋を出でていつた。なんか落ち着かなかつたよ。でも

「少しだけでも分かりあえた気がする。セシリアさんは変わつたんだね。それが一番嬉しいな」

保健室を出て教室へ向かうセシリアだが、様子がおかしい。ずっと

と顔が赤いままだ。

織斑兄弟はどうしてここまで、わたくしの中に入りうとするのかしら。特に光輝さんは……

要するに光輝のことが好きになつたのだ。だつて自分を変えてくれた人なのだから。

仲良くなるために自分を犠牲にするなんて、相当の覚悟がないと出来るものではない。しかし、光輝は真向から来たのだ。セシリ亞と分かりあう為に、自分の精神を削つて。

それだけではない。セシリ亞は光輝の強い意志を持った瞳に見惚れてしまつた。その瞳は強みと暖かい優しさを感じた。それが一番の理由か。

光輝さん、無理だけはしないでください……そして早く元気になつてください。

今は願いが届くの信じるだけだった。

第四話～履かせと変化（後書き）

今回は多めになりました。
さて、いろいろとオリジナルを考えなくてはっ！

第五話～忍び寄る影?～就任パーティー（前書き）

第五話です。

GW中の更新はこれが最後となりました。

第五話～忍び寄る影？と就任パーティー～

翌日、授業再開の許可を得た僕は、夏兄と一緒に寮から教室へ向かつた。ちなみにこここの寮は学校から歩いて約200m前後。山田先生は「寄り道はいけませんよ」とか言つてゐけど、正直ここまで近いとするのが馬鹿馬鹿しいたつらありやしない。

「それにしても昨日は大変だつたな……全く、こここの女子は極端に男子の交流を求める過ぎなんだよ」

「そうだね。あれは一種のトラウマになりかねないよ」

昨日、夏兄がまた来ててくれて話し相手になつてくれたんだ。一人なのは寂しいからさ嬉しかつたよ。でもクラスの女子ほぼ全員が狭い保健室に入つてくるんだから……怖かつたよ。押しつぶされて死ぬかと思つた……。

これは前からだけど僕達が一緒に歩いていると必ず聞こえる言葉がこれだ。ほら、現に今も。

「光輝くんが男なんて信じられないなあ。完全に女の子じゃない」「やつぱり、兄弟で付き合つてるつてのもありよね」

「はあ、はあ、光輝きゅんつ。お持ち帰りしたいなあ」

「一？光がいいかな、それとも光？一がいいかな？」

うわ～、一部の人人が僕達を見る目が危ない方向にいつてゐるよ。夏兄は兄みたいな存在だけさ、そこまでの関係じやないから！で、も夏兄となら……つて！

「僕は何を考へてるんだあああ！」

「うおう！ どうした光輝！？」

はっ！ 僕は何を言つてるんだ……。しかも夏兄の前で……、あう、恥ずかしい。

その声は学校全体に聞こえたらしく、騒ぎに発展しかねたとか。気をつけます……

「つてことで一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。一繫がりでいいですね！」

朝のSHRにて。夏兄がまさかのクラス代表就任。山田先生が嬉々と喋り、クラスの女子も大いに盛り上がりしている。そして肝心の夏兄といふと、暗い。よほど嫌だつたんだんだね。でも僕も嫌だからね。

「頑張つて夏兄！ 何か力になれるなら手伝つからつ！」

「おおう！ 助かるぜ光輝！ サンキュー！」

「あつ、弟さんは副代表ですから。それにしても兄弟で代表ですかあ。なかなかありませんねっ」

……え？ ちょっと待つて！

「山田先生！ なんでお、僕が副代表に！？」

「わたくしを始めとするクラスのみんなが賛成したからですわ！」

この声は間違いない。振り向けばセシリ亞さんが腰に手を当て、立っている。一体どうなつてゐるんだよ！？

「一夏さんはわたくしに負けました。ですがあえてクラス代表にな

つて貰うこと》で、クラスの力になつて頂くと共に実力を付けていた
だきたいと思つたからです。光輝さんはその実力で一夏さんのサポ
ートをしてもらいたいと思い、推薦しました。お分かりかしら?」

なんか無理やりな気が……び、びひじょう。

「いやあ、セシリアも分かつてるよねー」

「そうだよね! せつかく工Uを動かせる男子が同じクラスになつ
た以上持ち上げないとねー」

「私達は貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。織
斑兄弟はすばらしいわね」

商売になつてるよ……。てか僕達は売られるの!?

「仕方ねえ。光輝、やつてやうひじゃないか

「えつ? 本当に言つてるの?」

心の整理が早いなあ。相変わらず堂々としてカッコいいんだから。
そこはお母さんと似てるなあ。

「夏兄がやるなら僕も頑張つてみるよ……」

目立つのは嫌いだけど、一人なら大丈夫。恥ずかしがり屋なのを
直すチャンスかもしれないし。とにかく頑張つてみよう。

「なら決まりだな。クラス代表「織斑一夏」副代表を「織斑光輝」
とする。異存はないな?」

お母さんの声に、はーいと、クラス全員の女子が返事をする。し
かし、軽く頭に響く……。女子はいろんな意味で恐ろしい。まあ決

まつたら仕方がない。頑張りつー。

「夏兄は真っ直ぐ突っ込み過ぎなんだよ。上手く相手の攻撃を避けながら接近しないと」

その日の放課後、僕と夏兄は第三アリーナで特訓をしていた。今は終わって、アリーナの中の更衣室で着替え中。

白式の単一仕様能力『零落白夜』は相手のシールドエネルギーを切り裂いて絶対防御を発動させたり、相手のエネルギー兵器の無力化とかできる。でもそれを発動している間は、自分のシールドエネルギーが減り続けるから使い勝手が悪い。でもダメージは半端じゃない。

「そうだよなあ。武器が雪片式型以外にも、遠距離の武器が装備できればいいんだけど」

「白式は、^{イコライザ}後付装備ができないんだよね……」

一般的のISは後付装備で武器を装備を変えたりできるんだけど、白式はそれができない。^{バスロット}拡張領域を全部使っているからだ。ちなみに僕のISの ガンダムも装備を変えることができない。まあ、種類が豊富だし今は困っていないけどね。

「^{イグニッシュン・ブースト}瞬間加速もいいけど、一回使ったらそれ以降は見破られる可能性だつてあるよね。篠さんのところで剣術をまた鍛え直して、動体視力を養うのもありだと思つよ」

相手の一瞬の隙を見極めて接近する。元々夏兄は剣道やってて、接近だつたら僕も負けそうになる（でも剣筋がゆっくりに見えるから回避は容易）。篠さんに鍛えてもらつたら昔の感も取り戻せるし、動体視力も鍛えれるからE-Sの戦闘では有利になるんじゃないかな？

「そりだな。明日、篠に稽古をつけてもらえるか聞いてみるよ。いろいろアドバイスありがとな光輝」

夏兄が僕の頭を撫でてくれる。暖かい手だね、姉弟そろつてだなんて反則だよ……。

「ほ、僕にできることがあつたら、なんでも言つてね。夏兄には昔、いろいろわがまま言つてたし……」

「え？ ああ、気にすんなよ。今はいつもやつて仲良くなじやないか。光輝は自慢の家族だぜ」「あ、ありがとう夏兄」

やつぱり夏兄は夏兄だよ。分け隔てない優しさ、そして自分の信念を貫く、これらが夏兄の強さだと僕は思つ。夏兄のおかげで僕もちょっとずつ自信はついてるよ。まだまだ、だけどね。でも変わろうときつかけをつくってくれたのは、お母さんと夏兄のおかげ。いつかちゃんと、お礼をしないと。

「よし、寮に戻らうぜ光輝！」
「うん！」

夏兄の元気な声に僕も元気いっぱいに返事をして、更衣室を後にしてた。

「ふうん。ここがそうなんだ……」

光輝と一夏が更衣室で着替えていた時刻。I.S学園の正面ゲート前に、小柄な体に不釣り合いなボストンバックを持った少女が立っていた。

四月の暖かい風になびく髪は、ツインテールにしてある。肩にかかるない、ギリギリくらいの髪は、金の留め金がよく似合つ艶やかな黒色をしていた。

「えーと、受付ってどこだっけ?」

上着のポケットから一切れの紙を取り出す。くしゃくしゃになつた紙は、少女の大雑把な性格と活発さをよく表していた。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからどこにあるのよ」

愚痴を言いながらも少女 フアン・コンイ 凰鈴音の足は動いている。とにかく実践、そういう少女だ。

歩きながら、とある男子の事を思い出す。

元気かな、アイツ。

彼はこの『女尊男卑』といつ今の中でも、自分の意志を強く持っている。とにかく元気で、暗いところを見たことないくらいだ。

「でね……ああこいつときせ……」

ふと、声が聞こえる。その方向に視線をやると、女子がアリーナから出てくるようだった。

ちよつといいや。場所を聞こつと。

「なるほど……なかなか難しいなあ」

アリーナに小走りで向かう鈴音は不意を突かれ、身体はびくんと震えて足と止める。

男の声　それも知つてこる声によく似ている。おそらくは同一人物。

あたしだつて分かるかな、分かるよね？　一年ちょっと会わなかつただけだし。

鼓動が緊張と予期せぬ再開でペースが上がる。

「いち

「夏兄、ちよつとぞつやつていいつよ。一ひとつだ」

「おう！　いやー光輝の説明は分かりやすいよ。それに比べ籌ときたら……」

すたすたと歩いて行く一人の女子と男子。

誰なのよ、あの女の子？　なんで親しそうなの？

先ほどまでの鼓動の高鳴りは嘘のように消え、ひどく冷たい感情と苛立ちになる。

それから無事に総合事務室は見つかった。アリーナの後ろにあるのが、本校舎だからだ。灯りがついていたので分かった。

「手続きは以上です。I.S学園へよつゝれ。凰鈴音さん」

「あの、織斑一夏つて何組ですか？」

鈴音は不機嫌ですとばかりな声で聞いた。それでも愛想よく答えてくれる事務員はよくできている。

「ああ、尊の子？ 一組よ。凰さんは一組だからお隣ね。確かクラス代表になつたんだすつて。織斑先生の弟さんなだけはあるわね」

尊好きは女性の性。その体現な事務員を冷ややかに見ながら、鈴音は質問を続ける。

「一組の代表つて決まつてますか？」

「ええ。決まつてるわ」

「名前、分かりますか？」

「分かるけど、どうするの？」

鈴音のおかしな態度に気付いたのか事務員が戸惑つ。

「お願ひしょつと思つて。代表をあたしに譲つてつて

その笑顔には、血管マークがついていた。

「というわけでー、織斑くんクラス代表決定おめでとうー。」

夏兄は大変だね、とか思いつつ、クラスのみんなとは少し離れた場所で、オレンジジュースを飲みながら夏兄を見守つていった。

今は夕食後の自由時間。場所は寮の食堂、一組のみんなが全員集

まつて盛り上がっている。

壁を見ると、目立つように『織斑兄弟クラス代表、副代表就任パーティー』と書いた紙がかけてある。就任って……そんな大袈裟なものじゃないでしょ。

「光輝さん？ そんなに一夏さんが恋しいですか？」

「えっ！？ そ、そういうのじやなくて、なんか落ち着かないって……」

そうからかつてきたのは隣に座っているセシリアさんだ。あの決闘が終わってからよく話してくれるんだよね。自分から女子に話すのは慣れてないし、助かっています。

「は～い、そこのお一人さん？ 新聞部のインタビューに答えるつもりになります～」

オーと一緒にが盛り上がる。そんなに盛り上がるところなの？

「私は一年の^{まゆずみかおる}薰子。よろしくね。新聞部副部長やつてまーす。これ名刺ね」

差し出された名刺を受取つて見る。けつこう本格的な名刺で……。なかなかですね。

「では早速、織斑光輝くんつ！ 副代表になつた感想を！」

ボイスレコーダーをずっと僕に向け、好奇心丸出しの顔で見てくる。

「いきなり言われても……」

感想つて言つても困るな。そんな期待丸出しの表情で見ても、期待に応えるような感想は言えませんよ！」

「えっと、代表を補佐できるように頑張ります」「え～。もつといい「メントすりゅうだいよ～。僕を止める」とはできやしない！　とか」

「えええええ！？　そ、そんなの言えやしないよ……恥ずかしいじゃないですか！」

「女子と間違えないでね？」

「う～ん、可愛いんだけどさ。なんかこう迫力がないと言つか……。まあ適当にねつ造しとくね」

「ひひひ。それは新聞部としてどうなんですか！？」　ひひひって間違った情報が伝わっていくのか……恐ろしいよ。

「セシリ亞ちゃんも「メントすりゅうだい」

「いいですわよ。なぜわたくしが　」

「長そうだからねつ造しとくね。光輝くんに惚れたってことにしてうー！」

「な、な、ななつ……！？」

「きなり顔が赤くなつたセシリ亞さん。そりやねつ造されたつて聞いて怒つてるんだね。分かります。つてことで援護を。

「何を馬鹿なことを言つてんですか」

「え、そつかなー」

「そ、そうですわー。なんで馬鹿にされなきやならないのですか！？」

なんで僕は怒られてるの？ 言い方がおかしかったかな？

「まあ、とじあえず一人とも並んでね。注目の専用機持ちなんだからさ、写真撮りたいのよ」

「えつ！？」

意外そうなセシリ亞さんの声。取材と言えば写真だよね。でも写るのは好きじゃないなあ。どうしよう……

「あの僕は結構ですから一夏くんとセシリ亞さんで撮つてもうりえませんか？」

「えへ、ノリが悪いなあ。いいじゃない」

先輩の説得を断る僕だったが、

「光輝さんっ！ 一緒に写りましょー！」

セシリ亞さん！ 声が大きいし、顔が近いよ！ なんでそんなに顔が赤いのか？ やっぱりセシリ亞さんも恥ずかしいから？ でもそれなら断ると思つし、分からないなあ。

僕は渋々了解して写真を撮るようになつた。

「撮つた写真は当然、いただきますわよね？」

「そりゃもちろん」

「でしたら今すぐ着替えて

「時間がかかるからダメ。わざと並んで

先輩は強引に僕とセシリ亞さんの手を引いて、握手まで持つていく。女子握手なんて初めてだから緊張しちゃうなあ。

ふと、セシリ亞さんを見ると、いつかをじぶんじぶん見てる。どうかしたのかな？

「どうかしたの？」

「な、なんでもありませんわ！」

変なセシリ亞さん。緊張かな？

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は～？」

「なんですかそれ！　とりあえず2？」

「ふ～、74・375でした～」

「こ～は普通2でしょ！？」この先輩はよく分からないなあ。パシャッヒシャッターが切られる。やっぱり慣れないよ。

「はー！　ありがとうございました。じゃあまたね」

やうひつと今度は夏兄の方へ行かれた。せわしない先輩でした。

「やつた！　光輝さんとシーショット！」

セシリ亞さんがガツツポーズしながら小声で何か言ってる。なんか嬉しいことでもあつたみたい。よく分からぬけど、良かつたね。このパーティーは遅くまで開催して、疲れた僕は部屋のベッドで爆睡しました。

第五話～忍び寄る影？と就任パーティー（後書き）

なにかアドバイスなどがあればよろしくお願ひします！

第六話～転人生（前書き）

小説を書くのはなかなか難しいけど楽しい WWW

第六話 転入生

織斑くんと織斑ちゃん聞いた？ 転入生のこと？」

パーティーの翌日。僕と夏兄は席に着くなりクラスメイトに話しかけられた。結構打ち解けてきたし、女子にも少しずつ慣れてきたよ。

しかし夏兄には「織斑くん」、僕には「織斑ちゃん」。一人のクラスマイトが言つには「だつて男の娘でしょ？」といまいち分からないことを言つてきたのだ。確かに僕は男だよ？ なのになんで「ちゃん」付けになるんだよ！？

「転入生？ 今の時期に？」

「微妙な時期に転入していくるんだね」

まだ4月の今日。そんな時期に入学じゃなくて転入。しかもIIS学園は転入には厳しい条件だつたはずなんだよ。試験はもちろんだけど、国の推薦がないと無理なはず。

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだつてさ」

それなら納得。つて代表候補生といえば……

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら？」

一組の代表候補生、セシリア・オルコットさん。僕からしたら対したことないけど、他と比べたらそれなりの実力はある。それは認めます。

「IJのクラスに来るわけではないのだろ？。騒ぐほどでもない」

自分の席にいた篠さんがいつの間にか夏兄の傍にいた。確かに篠さんとの言つ通り、騒ぐほどでもない気がする。たすが篠さん。

「どんな奴なんだろ？」

「む……気になるのか？」

「ん？ ああ、少しば」

「ふん……」

夏兄は相変わらず鈍感だなあ。好きな人に他の女子が気になるつて言われたら、嫌になるよね。

「それよりも夏兄。来月にはクラス対抗戦があるんだからさ、女子を気にしてる暇なんてないはずだよ？」

「光輝の言つ通りだな」

「まあ、やれるだけやってみるか」

夏兄へどんだけ意識が低いんだよ。このクラス対抗戦で一位のクラスは学食デザート半年フリーパスが貰えるんだ！ 学食のデザートは結構美味しいんだよ。でも僕も副代表だから各クラスの副代表と戦わないといけないんだけど、みんな量産IJS「打鉄うちがね」だし、なんとかなる。

「専用機持ちは一組と四組だけだから、余裕だよ」

後は夏兄がやる気を出してくれればいいんだけど。

「 その情報、古いよ」

教室の入り口からそんな声が聞こえた。一体誰ですか？

「一組の代表も専用機持ちになつたの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組み、片膝をたて、ツインテールが目立つ女子。だから誰ですか！？」

「お前、鈴か？」^{りん}

そう言つたのは以外にも夏兄だつた。夏兄の古い知り合いかな？にしても夏兄は女子友達が多いよね。篠さん、頑張つて！」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。^{ファン・リンイン}今日は宣戦布告に来たわけ」

まさかこの子が転入生？ うーん。なんか迫力がないなあ。

「何格好つけてんだよ？ すげえ似合わないぞ」

「んなつ！ なんてこと言つのよ、アンタは！」

会話からすると二人は結構な仲のよう……。篠さん、落ち着いて！ 殺氣をだしちゃダメだつて！

ふと、鳳さんは僕の方へ向き睨みつけてきた。うう、気の強い女子は苦手だよ……

「あんた、なんでズボン穿いてるの？」

「へ？」

思わず変な声が出てしまつた。一体何を聞いてるんだ？ だって制服だから。

「女の子の制服つてスカートよね?」

……はあー。やつこりーとか。

「僕は……男だから……」

「へ?」

今度は凰さんが変な声を出した。こんなに女子に勘違いられる僕
つて一体……。

「鈴、光輝は男子だぞ? でも初見なら間違えるよな」

そんな……!? 夏兄まで……

「夏兄のばかあ!」

僕は立ちあがって夏兄のお腹に一発殴つてやつた。

「ぐおー……どうしたんだよ……光輝?」

「夏兄は間違えないって信じてたのにー!」

その様子を啞然とした感じで見ていた凰さんは、やつて來たお母
さんに出席簿で頭を叩かれ、しぶしぶ自分の教室に戻つていった。
夏兄はなんで僕が怒つてるか理解してくれて謝つてくれた。僕こ
そ怒り過ぎたよ。篠さんは「よくやつた光輝」とか言つてました。
よくはないでしょ……。

「へえ、じゃあ鳳さんは夏兄の幼馴染なんだ」

鳳の食堂にて。セシリアさん、僕、鳳さん、夏兄、篠さん、の順で座つてそれぞれ食べている。

鳳さんは夏兄が小五の時に転校してきた人で、中一の時に中国に戻つたといつ。僕はずつとお母さんといったから小学校に行ってなかつたけど、時々夏兄に会つてはいろいろ話したなあ。その時に鳳さんのことを話したつて夏兄は言つてるけど思い出せない……。

篠さんは小三のころに何回か会つてゐる。小四の最後らへんに転校してしまつたのは残念だつた。三人で遊べなくなると思うと、それを聞いた時は思いつきり泣いたのをはつきり覚えてるよ。でもこいつやつてまた再会したからいいけどね。

「鈴、こつちが篠。ほら、前に話したろ？ 小学校からの、幼馴染で、俺の通つてた剣術道場の娘」

「ふうん、そうなんだ」

鳳さんはまじまじと篠さんを見る。篠さんも負けじと鳳さんを見返す。

「初めてまして、これからよろしくね」

「ああ。ひかりさん」

ダメだ……この二人を会わせてはいけなかつた。どうやら鳳さんも夏兄のことが好きそうだ。要するに篠さんにライバル出現！？ つてことだね。がんばれ夏兄。

「ンンンッ！ わたくしの存在を忘れては困りますわ。中國代表候補生、鳳鈴音さん？」

「……誰？」

「なつ！？ わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ！？ まさかご存じないの？」

「うん。あたし他の国に興味ないし」

「な、な、なつ……！？」

セシリアさんの顔が怒りで真っ赤に染まつていぐ。感情の起伏が激しいひとだなあ、とか言つたら怒られそつだから言わないでおこう。

「い、い、言つておきますけど、わたくし、あなたのような方に負けませんわ！」

「そ。戦つたらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

一見、ただの自信過剰に思えるが凰さんは違う。口の自信に溢れてるし、嫌味でもなさそうだ。どうなんだろつか？

「で一夏。その女子っぽい男子はいつたい誰なのよ？」
「ああ、光輝ね。俺の弟なんだ」

そう言つても「うん」と嬉しそう。こんな僕でも夏兄とは兄弟なんです。

「へえ。……光輝よね？ あんた、ホントに男子なの？」

なつ！？ 教室で言つたでしょ！

「男子だよ！ そんないい、僕は女子に見えますかー！？」

「うん。絶対女子じゃん」

「うう……酷い……」

どうしたら信じて貰えるんだろ……

「落ちつけよ光輝。つたく鈴も光輝を苛めるのは止めてくれ

「……分かったわよ。悪かったわね」

凰さんは顔を赤くしながらも謝つてくれた。夏兄に言われたから
つて感じだよね、どう見ても…

「でも私も初めて光輝を見た時は女子かと思ったぞ」

「篠々乃さんの言つ通りですわ。光輝さん、本当に男子ですか？」

くうう……二人とも言いたいこと言いやがつて……絶対に仕返し
してやるからな！

第六話～転入生（後書き）

光輝がおかしくなつてますが気にしないで欲しいと思いますwww

第七話～強わひせ？（前編）

ふう、何を書いてるんだろうwww

少しさは文才が欲しい……

第七話～強むとは？

翌日、クラス対抗戦日程表についての知らせが掲示板にあった。一回戦目の相手は二組、凰さんのクラスだ。しかも二組のクラス代表は凰さんだつた。

僕や篠さん、セシリアさんの特訓のおかげで夏兄の実力もついてきたけど、相手は代表候補生。実力は分からないが上なのは確かはず。デザートのもとい、クラスの命運がかかってるんだから頑張っていかないと！

つてことでその日の放課後、僕、夏兄、篠さん、セシリアさんで第三アリーナに来ていた。

「夏兄、今日はとことん回避の練習にしよう」

「回避だけか？ 接近戦の練習とかはいいのか？」

「確かに必要だけど、避けるのも大切だよ。今日は零落白夜」は使わなくていいからね」

燃費の悪い白式は通常は回避に徹する。一回命中してしまうだけで白式の稼働時間は減ってしまう。今までには回避しながらの接近を練習してたけど、今日は徹底的に避けてね。

「でどうするんだよ？」

「夏兄にはフインファンネルとブルーティアーズのオールレンジ攻撃を避けもらひつよ。つてことでセシリアさん、お願ひしてもいいかな？」

「は、はい！ だ、大丈夫ですわ！」

いきなり慌てるセシリアさん。僕は何か悪いことでもしたのかな

？ 「ううん、分からない。とにかく続けよう。

「篠さんは打鉄つかがねで待機してくれるかな？」

「む……分かつた」

「納得がいかないって顔してるけど、ちやんと参加してもいいから
ね。

「で名人準備してね。篠さんとセシリアをさよのと話が……」

みんなHSも展開せらる。HSにいるのは四機だけど、それぞれの個性が出ている。

「用意はいいね、みんな？」

「おう！ いつでも大丈夫だぜ！」

「大丈夫ですか」

「ああ。じつちも大丈夫だ」

ならむすそく始めようか。

「どんどん避けてね夏兄！ フインファンネル！」

「一夏さん、特訓だからって容赦はしませんわよ！」

ガンダムの六基のフインファンネル、ブルーティアーズの四基のビット（このビットがブルーティアーズっていうんだってさ。なんかややこしいよね……）を展開させ夏兄に向かわせ攻撃する。四方八方からの攻撃を行えるのは今のところ、フインファンネルとビット（武装のブルーティアーズはビットと呼ぼう。紛らわしいね）だけなんだって。セシリ亞さんのビットはなかなかい動きだね。今回は操作だけだから集中もしやすいからかな。

夏兄もなかなかいい動きになってきたなあ。全身を使って避けてるよ。さすがに頭上と後ろは避け切れてないけどね。

「夏兄～、そろそろ行くからね～」

夏兄に個人間秘匿通信プライベート・チャネルで話す。そして女子二人組に合図を出す。簞さんガオールレンジ攻撃を避け続ける夏兄に向かう。

「一夏！ 覚悟しろ！」

その声にビックリしたのか、夏兄は接近していた簞さんの近接ブレードの攻撃を反応しきれず直撃してしまい、壁に吹っ飛ぶ。ちょっと中断しようか。

「二人ともちよつと中断～。夏兄、大丈夫？」

「一旦、中断して僕達は夏兄の方へ向かった。ISを起動してるから壁に思いつきり当たつたってどうってことはないと思ひけど……それとも簞さんの攻撃が重かつたかな？」

「大丈夫だけどさ、なんていきなり簞が突っ込んでくるんだよ！？」
「そういう特訓だからだよ。一つの攻撃に集中して回避に徹するのもいいけど、周りを見ないとさ。いつ相手が向かってくるか分からぬいよ？」

「それを始めから言つてくれよ……」

「それじゃ特訓にならないでしょ？」

「あんなビームの雨を完全に避けるのは無理があるぞー！」

まあ、確かにそうかも。見切れることは出来ても回避は難しいか。

「でも動きが……良くなつてますわね」

セシリアさんの息遣いが激しい。ビットの操作に集中し過ぎてダメージが来てるのか。動きがワインファンネルにも劣らない動きだつたし、ここまで集中したのは初めてだつたっぽいね。

「セシリアさんは寮に戻つてて。操作に集中し過ぎて負担がかかってるんだよ。あんまり無理されても困るしさ」

「……大丈夫ですわここのくらいなひひ……！」

バシコンシ！

「なつ！？ 光輝さん、一体何を！？」

僕はビームライフルをセシリアさんに向けて放つた。案の定、セシリアさんは避けることも出来ずに直撃。

「いつものセシリアさんなりこのくらい避けれた。でも避けられなかつた。しかも僕がライフルを構えたのすら分かつてなかつた。それほど負担がでてるんだよ。今日は休もう、ね？」

セシリアさんの顔がどんどん赤くなつていぐ。熱でもあるんじや？ 早く部屋に行かせよつか。

「わ、わかりましたわ……その、こ、光輝さん、部屋に連れてつてもらえ、ませんか？」

にしても息が荒いよ。ちょっと恥ずかしいけど、そんなこと言つてる場合じゃない！

「わかつたよ。」めん、夏兄に篠さん。セシリ亞さん連れていいくから特訓やつて」

「おひ、わかつたぜ」

「氣をつけてな……」

僕とセシリ亞さんはアリーナを後にした。夏兄と篠さんの方を見ると、篠さんの顔がほんのり赤くなってる。頑張れ、篠さん！

や、やりましたわ！　光輝さんと一入り！　しかも光輝さんのベッドだなんて！

寮の光輝と一夏の部屋にて。本来ならセシリ亞自身の部屋まで送るべきなんだろうが、光輝の心配性なものあり、ここで看病することに。光輝自身、自分の部屋の方が看病しやすいこと。集中し過ぎて負担が重なり、体調不良なのは確かだ。だが中身はどうですか？　と言われたとしたら病人とは思えない程のテンションの高さだ。

「ビットの操作に集中し過ぎてちょっととした体調不良だなんて。無理だけはしないでねセシリ亞さん」

「は、はい……でもそれを言つなら光輝さんもですわ……！」

自分の精神を蝕むといつのにサイコバーストを使った光輝は無謀としか考えれなかつた。だがあの時の光輝の瞳に惹かれた。

信念を貫くという瞳。例え、自分の身に何があつても果たすとう強い意志が。

「あ～、それを言われたら返す言葉がないよ。でも仕方のないことなのかもしない」

「なぜですか……？」

「僕は人の暖かみを伝えたい。それにこんな考えを教えてくれたある一人に恩返ししたいから」

やつぱり光輝さんは強いですわ。心が強いです。でも……

「一人で背負い過ぎやしませんか？」

自分一人が犠牲になつて伝えればいい。本当にそれでいいかセシリ亞は主張する。

「僕がある人と決めたことだからね。あんまり友達とか巻き込みたくないんだ」

「わたくしは構いません！」

セシリ亞は光輝のおかげで変わることが出来た。その恩返しがしたい。そんな想いがセシリ亞によぎる。光輝が好きなものもあるけど。

「わたくしは……光輝さんのように強くなりたいですから……」「セシリ亞さん……ありがとう」

光輝はそう言つてセシリ亞の手を握つて言つた。男子とは思えない程の可愛らしい笑顔になり、それを見たセシリ亞は緊張が極度に増し、満足な顔を見せ氣絶した。

「えっ！？ セシリ亞さん！ ど、どうしたの！？」

こちなりベッドに倒れたセシリアにビックリして光輝は慌ててしまつ。

その後、一夏が部屋に帰つてくるまでセシリアは起きなかつたといつ。

寝る前に光輝は思つ。

僕のように強くになりたい……か。僕は弱いよ。お母さんや夏兄、セシリアさんや篠さんのような友達がいるから僕は僕であるんだよ。

「感謝するのは僕だよ。ありがとう、セシリアさん」

誰にも聞こえない小さな声で光輝は言い、眠りについた。

第七話～強むとは？（後書き）

そろそろ一巻が終わりますかな。頑張って書いていきまやー！

第八話前編／赤き乱入者（前書き）

光輝のニユータイプについてですが、E.Sの世界にニユータイプは存在しないだろうというご指摘がございました。ですので、光輝は「そういう能力があるだけでニユータイプではない」ということにしたいと思います。

また ガンダムについてのご指摘もありましたが、 ガンダムについては後々の物語で誕生の秘密を書くので、ご了承ください。

またこの作品を見て嫌悪感を感じた方、申し訳ありません。

第八話前編／赤き乱入者

五月になり数日。今日がクラス対抗戦だ。場所は第一アリーナのピット。

夏兄も特訓のおかげでだいぶ伸びてきた。だけど一回戦目は一組つまり凰さん、油断は禁物なのです。

「夏兄、絶対に勝つてきてね！」

「まかせろ光輝！ 絶対勝つてくれるぜー！」

オープンチャネルで夏兄と話し、白を纏った夏兄は戦場に飛び立つた。あの調子なら大丈夫そうだね。

「せっかく私達が特訓にしたんだ。一夏ならやつてくれよう。心配しなくとも大丈夫さ」

「そうですね。これで負けてしまっては情けないですわね」

そんなこと言つても心配なんだねセシリ亞さん。手が震えてるよ？ でも心配なのはみんな同じか。

「夏兄、諦めたらダメだよ」

ピットから試合を見ていた僕らは驚きを隠せなかつた。

凰さんのIIS「甲龍」^{ショノロン}は肩アーマーに衝撃砲を装備していた。

衝撃砲は、空間自体に圧力をかけて砲身を生成したのち、余剰で生じる衝撃自体を砲弾化して打ち出す、というもの。やつかいのは砲弾はもちろん、砲身も見えないんだ。しかも全方位に攻撃

つまり、ファインファンネルやビットのようなオールレンジ攻撃が可能なという、なかなかの武装です。

それでも夏兄は上手く回避できてる。ハイパーセンサーの恩恵があつて、やつと反応できる感じだけね。

「一夏さん、少しずつ押されてますわね……。このままでは

確かにセシリ亞さんの言う通りだ。徐々に夏兄が追い込まれてるのが分かる。衝撃砲を握り潜って接近するのは難しい。『零落白天』状態で攻撃が命中すればなんとかなりそうだけど、どうするか……。

ふと、簞さんの方を見る。夏兄のことが心配で身体が小刻みに震えている。

「簞さん、夏兄なら大丈夫だよ。こんな状況でも夏兄の田は諦めない。だから大丈夫」

そう、夏兄はどんな劣勢でも諦めたりしないんだ。今この状況でもチャンスを伺つてするのが分かる。たぶん、イグニッショングースト瞬間加速で接近して一気に決着をつける気なんだと思つ。

「ああ……そうだな。ありがとう光輝」

「いえいえ、僕達も最後まで夏兄を応援し……っ！」

何かがアリーナに近付いてくる！ 正確にはわからないけど、このままだと夏兄達が危ない！

僕はすぐにISを起動させ、アリーナに向かおうとするが簞さんとセシリ亞さんに止められた。

「光輝！ ISなんか起動させてどこに行く気だ！？」

「そうですねよ！ いくら一夏さんが押されてるからといって試合に割り込むのはダメですわッ！」

「行かなきや二人が危ないんだよ！だから行かせてッ」

「篠々乃、オルコット、行かせてやれ」

そう言つたのはお母さんだった。さつきから山田先生と一緒にピットにはいたけど、話さなかつたな。

「早く行け。こんなことをしている間にも、お前の感じる奴が向かって来ているのだろう？」

「うん……。絶対に一人を助けるよー！」

そう言つて僕は、ピットを後にしアリーナへ向かつた。夏兄が瞬間加速で接近していの最中だった。

ズドオオオオンッ！！！

僕がアリーナに着いたと同時に大きな衝撃と轟音がアリーナに響いた。どうやらアリーナの遮断シールドを突破してきたようだ。それは同時に『何か』の攻撃力を測ることが出来る。しかし、その『何か』はアリーナの中央の砂煙で見えない。

アリーナ中央に所属不明機を感知。白式と甲龍がロックされています。

アリーナの遮断シールドはTISと同じ原理でできている。ということはそれを貫通する程の攻撃力を持つた『何か』がやつてきたということだ。

早く二人を助けないと……！

「夏兄、凰さん早く逃げて！ 今来た奴は危険だ！」

僕はオープン・チャネルで二人に呼び掛ける。つてこんな時に喧嘩しないでよっ！

「二、光輝？ なんで此処にいるんだ！？」

「てか危険ってどういうことよ！？」

「話は後で話すから、二人ともピットに戻つて！」

試合をしていた二人のシールドエネルギーはかなり減っているはず。もし戦つてゼロにでもなつたら命の保証はない。

突然、砂煙から一人に向かつて熱源が連續で放たれる。二人は避けるが、あの熱源は……

「セシリアのISよりも出力が上だ。シールドを貫通させるだけはあるつてことか……」

夏兄の言つ通り。今放たれた熱源 ビーム兵器はセシリアさんの武装より出力が高い。

「夏兄、すぐにそつちに行くから！ 待つて！」

二の方へ向うがビームがそれを遮る。こう体験してみると正確な射撃だ！ ギリギリで避けながらも一人の元へ辿りつけた。

「大丈夫か光輝！？」

「うん、それよりも今は……」

ビームを連射してくれたおかげで砂煙が消え、相手の姿を見ることが出来た。

まず目につくのは全身装甲であること。^{フルスキン}しかも真っ赤に染まつて

いる。左腕には不明機と同じ高さのシールドが装備してあるが、その中央付近と左右の腰から伸びている短いスカートには奇妙な紋章が描かれている。全体的に重そうな雰囲気だ。

突然、ISのハイパーセンサーが反応する。

MSN 04 サザビーと断定。見た目によらず、機動性、運動性は高い。どの武装も火力が高く、特に腹部拡散メガ粒子砲はジェネレーターから直接エネルギーを供給しており、危険度は最大です。

「ん!?」この不明機のことなんだろうけど、こんな番号は聞いたことないよ。夏兄達のハイパーセンサーは反応したのだろうか?

「二人とも、あの機体について何か情報が出てきた?」

「何も分かんねえぜ……。一体なんだってんだ!」

「あたしも分からないわ。アンタはどうなのよ?」

「あれはサザビーっていうらしいんだ。機動性も運動性も高いし、火力も高いって出ただけど……」

ガンダムのハイパーセンサーだけが解析したってことだけど、一体どうなってるんだよ……。というかさつきからサザビーから感じるこの感覚はなんだろう。人の意志? なのかもしれないけど、感じたこともない深い負の感覚。今分かるのはこの機体は危険だってことだ!

「お前、何者だよ」

「…………」

夏兄の声にも反応しない。当然と言えば当然かな。サザビーは動こうともせず、ずっとこちらを向いている。

「一人とも……早くアリーナから脱出して。あれの相手は僕一人でする」

「な、何言つてんのよアンタ！ 三人でやれば……」

「鈴、光輝にまかせよう。あそこまで怒つてる光輝をみたのは久しぶりだ」

「つ！ 分かつたわよ……。でも遮断シールドがレベル4になつてるし、全ての扉はロック中。これじゃ、脱出なんて出来ないわよ？」

凰さんの言う通りだ。このままでは一人が危ないし、どうしよう。

警告！ サザビーに完全ロックされました。

ISのハイパーセンサーがサザビーのロックを伝えてくれた。ちょうどいいや、これなら何とかなりそうだね。

「二人とも！ 僕だけをロックしてきたから、邪魔にならないようにしてくれる？」

「分かつたぜ光輝。負けるなよ光輝！」

「うん……。ありがと夏兄」

負けないよ。絶対に負けない。今度こそ約束を守つてみせる！
僕はビームサーベルを抜き、サザビーへ接近する。サザビーも反応して接近してくる。

黄色とピンクの光の剣が交錯し、互いに押し合つ。

「負けるもんかああ！……」

死闘は始まつたばかりだ。

第八話前編／赤き乱入者（後書き）

作者の能力ではこの文章が限界です。
でもこんな駄文でも閲覧してくださる方には感謝しています。
どうかこれからもよろしくお願いします！

第八話後編／疑問と声（前書き）

バトルシーンは書くのが難しいです・・・。どうしてもうまく書けません。

第八話後編／疑問と声

「三人とも聞こえますか！？　返事してください！」

アリーナに残っている三人を呼び戻そうとオープン・チャネルで話す真耶だが、返事はない。ピット内の通信機器が壊れたかそれとも……。外の様子も見れなくなつた以上、最悪の事態にもなつてゐるかもしれないのだ。

「落ち着け山田先生。三人なら大丈夫だらつ。甘いコーヒーでも飲め。糖分が足りないからライライラするんだ」

「えつと……織斑先生？ それ塩なんですけど……」

「……なんで塩があるんだ」

そう言いながら白い粉を容器に戻す。千冬もなんだかんだで家族の事が心配で慌てているのだ。まあ、当然だと思うが。

「さ、まあ……？ でも大きく『塩』って書いてますけど……」

「…………」

「やつぱつ！」家族のことが心配なんですねつー？ だからそんなスを

「……山田先生、コーヒーをどうぞ」

重い沈黙の中、調子に乗つてゐる真耶に千冬の容赦ない罰を受ける。

「でもそれって、塩が入つてるやつじや……」「どうぞ」

抵抗を試みるが失敗に終わった。真耶は涙目になりながら送られてきたコーヒーを飲む。

「熱いから一気に飲むといい」

悪魔が降臨した。

「先生！ わたくしにEHSの使用許可を！ いつでも出撃できますわ！」

「もうしたいが、遮断シールドレベル4。扉は全てロックされていまする」

「まさかあのEHSの仕業ですのー？」

「やうだらうな。今のところ、救援に行くのは無理だ

落ち着いた口調で話す千冬だがその手は苛立ちを抑えることが出来ずに画面を叩いている。

「でしたら！ 緊急事態として政府に助勢を！」

「やつている。今も、三年の精銳がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除した後、ただちに部隊を突入させる」

そう続ける千冬は益々募る苛立ちを少しづつ表していく。それを危険信号と見たセシリ亞は頭を押さえながらベンチに座った。

あのEHSは束の言つていた『赤い彗星』なのか？ まさかガンダムに魅かれて来たというのか？ だとすれば光輝は……

昔、束に言われたことを思い出す。聞いた時は信じれなかつたがでも今まさに起こっているのだ。

苛立ちと不安に駆られる千冬はただ家族の安全を祈るばかりだつ

た。

「つ、強い！ 一体何者なんだよ！」

未だサザビーにダメージを『えられない僕は苛立ちを感じ始めていた。

接近したまま追い詰めればよかつたんだけど、ビームサーべルの押し合い時に腹部拡散メガ粒子砲を放つてくるんだから離れないといけなかつた。

直撃は免れたけど、右足を少しかすつたよ。でも驚くのは、かすつただけで絶対防御が発動してしまったことだ。もし直撃を受けてたら……僕は生きてただろうか。

「ファンネル！」

突然そんな声が頭に響いてきた。同時にサザビーのバックパックから何かが射出された。

かなり小さいけどビットやフィンファンネルと同系の武装か。円筒形から+の形にスラスター・カバーが展開され、6基が二つに向かつてくる。

「それなら僕だって……行つて！ フィンファンネル！」

僕も6基全てのフィンファンネルを射出した。赤と白のファンネルが移動音を出しながら銃撃戦を行う。操作中、頭に映像が流れ込んでくる。

仮面の人々、僕達と同じくらいの人々、ロボットに乗つて戦つている。周りは黒一色で時折キラキラしたものが写つている。

「なんだ……これつ。頭にどんどん流れ込んでくるつ！」

二人はロボットに乗って戦っている。同じ年の人人が止めを刺そうとした時、緑の大きいとんがり帽子のようなロボットが割り込んできて、仮面の人を助けた。青年にとつて相手の二人は敵なんだと思う。でも青年は緑のロボットを撃墜したのに泣いている。仮面の人も同様に。そこで映像は途切れた。

「今のは一体？　つー」

集中が相手に戻った途端、急接近したサザビーに思いつきり蹴られ勢いよく壁にぶつかつた。

映像に見惚れて反応が遅れちゃつた。にしてもあれは何だつたんだろうか？　サザビーと何かしらの関係があるのだろうか……。

そんなことを考えている内にサザビーがビームサーベルを持つて接近してくる。避けたいんだけど、身体が動かない。なんで動かないんだよ！　このままじゃやられてしまるのに……！　僕は死を覚悟して目を瞑つた。

「みんな、『ごめんなさい』。僕は先に逝きます……」

ガキイイイン！――

何かが交錯した音に気付いて僕は目を開ける。なんと夏兄がサザビーと押し合っていた。

「光輝！　大丈夫か！？」

「なんとかね……夏兄こそもうエネルギーが！」

「なんとかなるさ――三人でこいつを倒すぞ――」

「で、でも……」

「いいから言いつとを聞く！ アンタの方がボロボロよー！」

横から衝撃砲を撃ちながら援護する凰さん。それに気付いたサザビーは一旦距離を取り、待機している。

「光輝、一気に接近してあいつを倒す方法を思いついたんだけど、やつてみないか？」

「そんなことが出来るの？」

「ああ！ やつてみる価値はあると想ひつい？」

ただ向かっていくだけじゃこっちが不利になる。作戦があるならそっちを試してみよう。

「分かった。夏兄の作戦でこいつー！」

「なるほど……それならいけるかも」

「へえ、アンタにしたら考えたじやない」

僕と凰さんは夏兄の作戦を聞いて納得した。成功するかは運だけ決まればいける。

サザビーは襲ってくる気配はない。どうせこっちの様子を伺っているようだけど、すぐ助かります。

サザビーのファンネルは6基とも落とすことが出来たけど僕もファンネルを全部落とされてしまったから上手い援護が出来ないけど、やれるだけ頑張る！

「いぐぞつー！」

夏兄の声に僕達は作戦を実行する。同時にサザビーも反応してライフルを撃つてくる。僕達は一度、散開する。サザビーは僕を集中攻撃してくる。予想通りだ。

僕はサザビーの攻撃を全力で回避して、ライフルとビームキャノンで少しづつ攻撃して注意をこちらに向ける。

「 オオオッ！！

夏兄が衝撃砲のエネルギーで更に速くなつた瞬間加速でサザビーに接近する。その速度は

サザビーは後ろから接近する夏兄に反応しきれず、零落白夜によつてライフルを持っている右腕を切られる。

瞬間加速の原理を上手く活かしたね夏兄。

瞬間加速はその過程で慣性エネルギーが発生する。それを使って爆発的に加速する。

このエネルギーは外部からのエネルギーでもいいのだ。速度は使用するエネルギーに比例する。最大出力の衝撃砲を外部エネルギーとして夏兄は一気に加速したんだ。結果、サザビーにダメージを負わせることが出来た。そして僕の番

「これでッ！」

「うおおおおっ！！

サザビーが戸惑つている間に僕も瞬間加速をして接近する。そして何回もサザビーを殴り続ける。

殴る度に凄まじい音がするが気にする暇はない！ そして回し蹴りを食らわしてサザビーは壁にぶつ飛んだ。僕はその軌跡を追い、

止めを刺す。

「これで 終わりだよ！」

サザビーの方に向かいながら、宙返りをしてバックパックに装備してある ハイパー・バズーカを発射する。なすけて『背面バズ』！ なんてね！

「ふう、なんとか終わつたのかな？」

砂煙に隠れてサザビーの様子が見れないけど、かなりのダメージは与えたはずだ。これ以上の戦闘は望ましくないし、三人ともシリードエネルギーがほとんど残っていないしね。

「やつと終わつたみたいね。一時はどうなるかと思ったけど、なんとかなつたわ」

「そうだな。光輝、鈴、早く帰ろうぜー」

「そうだね！ 帰ろう……」

「まだだ……まだ終わらんよ……」

この響く声はまさか！？

砂煙から音が聞こえて僕達はその方を見た。なんとサザビーが動いているのだ。

装甲全体には僕が殴りまくったおかげでボコボコになつており、各部からは紫電を放つている。今にも壊れそうな感じだが、それでもゆっくり歩いて近づいてくる。

立ち止り、最後の足掻きといわんばかりに拡散メガ粒子砲をチャージしている。なら一か八かだ！

「一人は離れて！」

僕はそう言うとザザビーに向かつて瞬間加速をする。この接近する途中で発射されたら直撃は免れないだろう。

こんなボロボロならこの攻撃を避けたら勝手に停止しそうな感じもあると思う。でも僕はそう感じることが出来なかつた。

今のザザビーを動かしているのは絶望だと思う。対峙した時から感じるフレッシャーは凄まじいものだったけど、絶望もすごいものだ。何に対してかは分からぬけど、それを断ちきるなら直接僕が停止させる！ その絶望を断ちきる！

僕はビームサーベルを抜刀し突き刺そうとするが、同時にメガ粒子砲も発射され周りが光に包まれる。

「守る為に戦うのはいいが、戦いに引きずり込まれるなよ」

そんな声が聞こえたのが最後で、僕は気絶した。

第八話後編）疑問と声（後書き）

終わり方が重なっているけど、気にしないwwwwさて、原作一巻はここで終わって次からは二巻です。

第九話～決意と転校生！？（前書き）

途中から一巻に入ります。
それとタイトル変更いたしました。前のタイトルだと勘違いされま
すので……。

第九話～決意と転校生！～

「よくサザビーを倒したね。でも無理し過ぎだよ」

暖かい緑の光に包まれながら僕はその声のする方へ向いた。しかし、誰もいない……。

「やつぱり君は僕より良い才能を持つてる。それを生かすも殺すも君自身だけどね」

「才能？ というか、あなたは誰ですか？」

僕は声に質問した。いきなり才能とか言われても困りますよ……。

「今は言えない。でもいつか必ず僕から聞つよ。さあ、もう田代覚めよ。君を待ってる人たちがいるからさ」

喋っている内に徐々に声が遠ざかっていく。最後にいひ言い残した。

「僕は君の秘めたる可能性が開花することを祈つていろよ」

謎の声はそういうと完全に消えた。同時に僕も現実に引き戻されていいく……。

「うーん、よく寝たなあ」

身体を伸ばしながら起き上がる。いつも寮の僕と夏兄の部屋みたいだ。

保健室じゃないってことは怪我はなし？ でもけつこいつギリギリだつたけど、どうにかなるもんだね。

立ちあがつて外を見る。日はすっかり暮れて真っ暗な夜。それを知つた途端、急にお腹が鳴つてしまつた。

「あ～お腹すいたな～。今何時だら」

時計を見ると7時15分だ。まだ食堂は開いてるし、まずは食べよつ。それからいろいろ考えよつかな。

「お～光輝、目が覚めたのか」

振り向くとドアの前に夏兄がいた。両手にはお盆にのせた定食が置いてある。

「ほり、まだ何も食べてないだろ？ 疲労だからこそ食べないと身体に悪いしな」

「あ、ありがと夏兄。つて疲労がなんだつて？」

夏兄の話はこうだ。

あの光に包まれた後、ザザビーは完全に停止して崩れたらしい。でもその残骸からはISのコアは発見できなかつたという。理由は分からぬがコアがなのは大変なことだ。

ISにはそれ専用のコアがいる。そのコアを作つたのが、篠々乃^{しのの}た 束さん 篠さん^{はね}の実の姉だ。

ISのコアは束さんしか作れない。現在は束さんがコアの製造を止めてしまつた為に世界で、467個のコアがある。これによつて

ISの絶対数は467機になつてしまつ。各国では新しいISを作り度に存外のISを解体、初期化しなければならない。

ちなみにISの産みの親、束さんは現在逃亡中である。ISを開発したことから政府の監視下にあつたが行方をくらましている。コアの製造方法は束さんしか知らないので、各国から追われる身になつている。

と話が逸れたから戻そう。現在のISでコア無しで起動するものはない。しかもザザビーは無人だつたはず。無人のISも今の世界には開発されていない。

「なんで光輝はあるIS サザビーだつけるか？ なんで無人だつて分かつたんだよ？」

「うーん、何か違和感があつたんだよね。よく分からんんだけどさ。」「めんね……」

「謝りなくていいくつ。いやーでも光輝が倒れた時はひやひやしたぞ」

ザザビーが停止した後、僕も倒れたらしい。何か致命傷でも受けたのかつて思つてたらしいけど、どうも寝てたらしい……。外見は傷の一つもなくて中も異常なし。結果は極度の疲労による睡眠だつてさ。しかし、今日の内に目が覚めて良かつたよ。また五日間も寝てたら授業に追いつかない……。

「無事で良かつたぜ。そうそう、千冬姉が光輝のこと呼んでたぜ？ 大丈夫なら来てくれつて言つてたぞ」

お母さんが？ 一体何だろうか。

「食べ終わつてから行つてみるよ。ありがとう、夏兄」

「気にはすんなよ。家族なんだからわ」

「来たか。入つてもいいぞ」
「し、失礼します……」

光輝は千冬の部屋に入る。学校内だからかその姿は緊張しているように見える。

「そんなに緊張しなくていいさ。家族として話したい。いいな？」
「え、うん。それなら気が楽だよ」

光輝はそう言われ氣を樂にする。一人きりで話すことは慣れているのだが、この日はなぜか空気が重い。だが光輝はあえて気にしないようにする。

「光輝、どんな苦難も乗り越える勇気はあるか？」
「い、いきなりどうしたの？ 何かあったの？」
「……どうかと聞いてるんだ」

千冬が一方的に話を無視する。光輝からしてみれば珍しいだろう。今までちゃんと話を聞いてくれていた母が一方的なのだ。光輝は戸惑いながらも答える。

「もちろんだよ。僕は出来ることを頑張る」
「……それでこそ光輝だ。今日のあの工Uのことだが、あれは ガンダムに魅かれて現れた工Uだ」

「いきなり何を言つてるんだ？ 千冬がそんな冗談を言う人ではな

いのは分かつてゐるが、光輝は混乱している。

「いきなりそんなこと言われても分からぬよな。まあ束の言つていたことだから嘘ではないとは思うが……」

束は光輝に ガンダムを与えた張本人だ。それとも ガンダム自体が光輝に反応したと言つべきか。ともかく束は光輝の人生を変えたといつても過言ではない。

「光輝が ガンダムを受け取った口に束が言つていたんだ。いつか必ず ガンダムに魅かれて『赤い彗星』が来ると」

「今日現れたISがその『赤い彗星』なんだね。でもハイパーセンサーの情報だとサザビーツてISだつたけど？」

「そうなのか？　じゃあ赤い彗星＝サザビーツことになるのか…」

「でもさ、もう倒したんだから大丈夫でしょ？」

千冬はゆつくり首を横に振る。

「サザビーのコアが無かつたんだ。考えられるのはコアが自分の意志で装甲から抜け出したとしか考えられない」

光輝は驚きを隠せなかつた。まさかコア自身が意志を持つて逃げたとでも言つのか。

「コアは自己進化していく。それを考えたら不思議ではないだろ？」「？」

確かにコアは自己進化することが確証されてゐる。しかしコア自身が意志を持つといふのはまだ例がない。

「もしさまたあれが来るとしたら……大変なことになるよ」

サザビーの性能は光輝が一番分かっている。圧倒的な火力と見た目からは想像できない機動力。あれは今までのISの常識を超えるだろう。もしパワーアップしてまた現れたとしたら、今度はただじゃ済まないのは確定だ。

「一夏から奴のことを聞いただけでもかなりの性能なのは分かる。ISの常識を覆しているだろうな」

「……でもやるしかないんだね。サザビーは ガンダムが狙いなら、僕自身が決着をつけないといけない日がいつか来るなら、僕も絶対に強くなつてやる！ みんなも守る！」

「それでこそ、光輝だ」

千冬は微笑みながら光輝の頭を撫でた。最初はびっくりした光輝だが素直に受け止めた。千冬や一夏、人から感じる心の暖かみがあるからこそ光輝は強くなる。力だけがすべてではないのだから。

翌日の朝、僕は普段通りに通学することが出来た。

別に体調不良ってわけでもないけど辛いことが一つ。昨日は寝れませんでした……。

どうも僕が気絶（？）してから、7時間超は経っていたんだよ。そのせいで昨日の夜は寝ることが出来なかつた。寝たのがいつも起きる時間の30分前。これは辛いよ、うん……。

「今日から本格的な実践訓練を始める。訓練機ではあるが」

エリ前のお母さんの話なんだけれど、開けておねがいひでないんだ。
うう、寝て樂になりたいよ……。

そんなクラス中のざわつきに僕は目が覚める。それほどこのクラスの女子の声は大きいつことか。で一体何の話？

スの女子の声は大きいつてことか。
で、一体何の話？

か何かなの？
最近被るなあ。

「失礼します」

- 1 -

その二人を見てざわめきがなくなると共に、僕は目を疑つた。いや、ぼくだけじやないだろう。

第九話～決意と転校生！？（後書き）

次からは本格的な一巻です。小説とアニメを取り入れようかなと思っています。

第十話～いんな一日（前書き）

更新遅くなりました。仕事の忙しさが増してきて大変な日々が続いております……。でも出来るだけ頑張りますのでお願いします。

第十話～いんな一日

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願ひします」

転校生の一人、デュノアくんはにこやかな顔でそう告げ、一礼する。

それにあつけを取られたのは僕を含めたクラス全員だった。

「お、男……？」

誰かがそう呟いた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方が居ると聞いて本国より転校を

「

人懐っこそうな顔。礼儀正しい立ち振る舞いと中性的に整つた顔立ち。髪は濃い金で、それを首の後ろで丁寧に束ねている。身体はスマートで制服がよく似合っている。

貴公子のような印象で、嫌味のない笑顔が眩しい。

でも何かしらの違和感を感じるのは気のせい？ 何か隠しているような、ないような……。

「きやあああああああ

っ！」

耳が、耳がああ！ クラスの中心から発せられた声は衝撃波に変わった。それ程、恐ろしいものなんだよ。

「三人目の男子ー！」

「しかも守つてあげたくなる系の…」

「地球上に生まれて良かつた~~~~~！」

「うああ……耳が痛い！　！」この女子は男子に飢え過ぎだよー。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

その一言でクラスが鎮まつた……お母さんすゞ」によ。でもめんどくさうな言い方だったなあ。こうこう反応が嫌なのかな。

「まだ自己紹介は終わってませんからねー！」

もう一人も異様な容姿なはず。まあ僕から見たらどううつてことはないけど。

輝くような銀髪。それは白にも近く、腰近くまで降りしている。綺麗だけど、整えてるわけでもなく、ただ伸ばしてるので感じなんか？　そして左目に眼帯。医療用とかじゃなくて、軍隊で使いそうな黒い眼帯。右目は赤色だけど、でも冷たさしか感じない。髪といい、眼帯といい、冷徹な彼女によく似合ってるよ。

『ドイツの冷氷』。彼女はそう呼ばれていた。

「…………」

な、何か喋るつよ。せめて名前をだけでもいいから。重い空気は嫌いだよ……。

「……挨拶をしき、ラウラ」

「はい、教室」

お母さんには素直だな。みんなビックリしてるよ。異国の敬礼

を向かられたお母さんはまた違つ意味でめんどくさい顔をする。

「リリではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、リリではお前も一般生徒だ。私の事は織斑先生と呼べ
「了解しました」

そう答えるラウラは、ぴっと伸ばした手を身体の真横につけ、足をかかとで合わせて背筋を伸ばしている。懐かしいな。ドイツの一 年間はけつこう長かったね。

ある事情でお母さんは一年ほど、ドイツで軍隊教官として働いていたことがある。僕も付いて行つたよ。でその時にラウラに出会つたのか。あれが13歳の時だから一年たつて、ドイツから日本に帰つて来た時に東さんに会つて ガンダムと出合つたんだよね。いや～懐かしい。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「…………」

クラスメイト達の沈黙。無口なのは相変わらずだけど、もうちょっと何か言えばいい……んじゃない?

「あ、あの、以上……ですか?」

「以上だ」

空気に耐えれなくなつた山田先生が精一杯の笑顔で訊くけど、返ってきたのは無慈悲な答えだけだつた。うわ～、これは気まずい…

そんなことを考えているとラウラが夏兄に激しい敵意を向けていることに気付いた。

「！ 貴様が 」

ラウラが夏兄の席に歩いている。まさか……！
すぐさま僕は立ち上がり

パンツ

「……お前は

ラウラが夏兄に平手打ちする前に立ち上がり、手首を掴んで阻止。
いきなり暴力なんてダメだつて！

「いきなり人を殴るなんて酷いよ

「ふん、お前！」ときに言われる筋合にはない。離せ

激し過ぎる敵意を向けてくるけど、ここで逃げるわけにはいかない。

「離さないよ。そしたらまた殴ろうとするんでしょ？ 家族を守るのは当然だから」

「…………私は認めない。お前達一人があの人の…………！」

ラウラは無理やり僕の手を放し、席に向かっていく。ふう、何とかなった。

こうして二人の転校生を迎えることになった。

「くう、負けるなんて……」

3人目の男子、デュノアくんが転校してきたことで女子の勢いも増してきた。やはり男子に飢えているこのHIS学園、男子にとつてはある意味危険だ。

そんな中、部屋割も変える必要があるらしい、じゃんけんの結果、夏兄とデュノアくんの相部屋。そして僕が一人部屋、といつ結果になつた。今じや一人寂しく部屋で暇をもてあそんでるよ。

「開けておくれ～」

どんどん、と扉を叩く音と声が聞こえる。大人数の女子が乱入しないように部屋の鍵は常に閉めるようにしている。まあ今回は一人だけっぽいね。

「その声は……のほとけ布仏さん？」

「そのとおり！　てことで開けておくれ～」

どんな理屈だよ。まあこの人なら大丈夫かな。
扉を開けるとそこには

「やー、おりむー？。一緒に夕食しようよ～」

寮にいるときは常にダボダボのパジャマを着ている、のほとけ布仏本音さん。自分のサイズより2つぐらにはでかいナイトキャップがズリ落ちては、余っている手で直そうとする。

「うん、いいよ。てかその愛称は決定なの？　普通に織斑でいいん
だけど」

「決定なのだよ。普通じゃおもしろくないしね～」

ちなみに夏兄は『おりむー？』。この人の考へることによく分

からない。センスがないに等しいと思つ。

「まあいいや。行くなら夏兄達も誘つてこいりつよ」

「えへ、一人きりでいいよー」

布仏さんは僕の腕を無理やり掴み　けつこう力が強いぞ！　振りほどけないよ……　そのまま食堂に連れ去られました。

「疲れた……食べる時ぐらいゆっくりしたいのに」

食堂で夕食を取ったわけだけど、僕と布仏さんの周りに女子が集まり過ぎて潰されそうになつた。一年はもううん一、三年の先輩たちもいたわけで……けつこうな人だつた。

「はああ、考えただけで疲れる。忘れよー……」

「んこん

なつ！？　またノックが！　一体誰だよ……。

「光輝、いるか？」

その声の主は筈さんだつた。この人なら大丈夫……大丈夫なはずだ。

扉を開け、筈さんを迎える。筈さんならまだ気が楽かな。

「珍しいね、筈さんが相談なんて。僕で力になれるならいいけど」「いや、光輝にしか言えないことだからな……」

「やうなの？ で相談つて何？」

「う、うむ。実はな」

篠さんの相談を聞いたけど、これはまた大胆な……。でも篠さんと言えば篠さんらしいのかな？ でもどうなることやら……。今日はいろいろなことがあつたけど、最後の追い打ちと言つてもいい程度よ。

第十話～いんな一日（後書き）

見て分かるように作者は表現の仕方が不器用です WWW
何かアドバイスがあれば……お願いします……！

第十一話 もう一人のガンダム（前書き）

今回は皆様が考えて下さったオリキャラの一人目を出します。
こんな感じで大丈夫だろ？

第十一話 もう一人のガンダム

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を理解してないからだよ」

「そ、そうなのか？一応、分かつてゐつもりだつたんだが……」

シャルルくんが転校してきて丘田たつた土曜日。シャルルくんとすぐに仲良くなることが出来た。性格や見た目とは裏腹にIHSの腕は中々だったよ。

量産機である『ラファール・リヴィアイヴ』をシャルルくん専用にした『ラファール・リヴィアイヴ・カスタム?』がシャルルくんのIHSだ。

通常のリヴィアイヴとは違い、背中に背負つた一対の推進翼は中央部分から二つの翼に分かれ、より機動性と加速性が高くなっている。アーマー部分もシェイプアップされていて、大きなリアスカートがついている。そこにも小型の推進翼があつて、姿勢制御に使われているようだ。

他にも違いはあるが、最大の違いは武装の多さだろう。基本装備をいくつか外して、拡張領域を倍にしてある。故に武装を増やすことができ、カスタム?は一十もの装備があるという。

オルコットさんや凰さんにとって普通のIHSの武装数はだいたい五つぐらい。多くて八つぐらいです。ガンダムでも七つぐらいだよ。そう考えたら一十つですごいよね。

「ふん。私がちゃんとアドバイスしてるだろ?が

「あんなにわかりやすく教えてあげたのに、なによ

「わたくしの理路整然とした説明の何が不満だといつのかしづ」

シャルルくんは教えるのも上手い。この三人が教えるよりいいだろ

うね。実際に遠距離武装を使わせてみるのも一つの方法か。思いつかなかつたなあ。

「、この敵意はまた……」

「ねえ、ちょっとアレ……」

「ウソつ、ドイツの第三世代機だ」

「まだ本国でのトライアル段階つて聞いたけど……」

敵意を感じたと同時にアリーナ内がざわつきはじめている。その方向に振り向くと

「…………」

もう一人の転校生　　ドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィッヒさんがいた。

誰とも話そうともしないし、常に一人であるつとする。まさに『ドイツの冷氷』と呼ばれるだけはある。まさに孤高の女子つてね。

「織斑光輝、私と戦え」

HSのオープン・チャネルで声が届いてきた。この声は間違いなくボーデヴィッヒなんだね。いや、久しぶりの会話ですか。

「嫌だと言つたら?」

「ならば 戦わざるを得ないよつこにしてやるー」

ボーデヴィッヒさんは漆黒のHSを戦闘状態にシフトする。刹那、左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴いたと思つたら

ギュオオオオ！

いきなりボーデヴィッシュさん目掛けて極太のビームが放たれた。それを難なく避けるが、かなりの熱量なのがビームに近かつた一部のISのアーマーが溶けかけている。

「いきなりゴメンね。光輝くんに用があるんだよ」

オープン・チャネルで話しかけるのはビームを放った人物だろうけど、誰なの？

ビームが放たれた方向から一機のISが近寄つてくる。
どこかしら ガンダムに似ているのは気のせいだろうか？ 額のVアンテナなんか似てるぞ、うん。右手には大きめのライフル砲門が2門あるのか。珍しいな に背中にはかなり大きいバックパックが……。

MSN-010、ZZガンダムと断定。火力はサザビーと同等かそれ以上。その代わり機動性、運動性は従来のISに比べると少し低くなっている。額に装備されたハイメガキヤノンは広範囲、至近距離ではあるがその熱量は凄まじく、回避しても絶対防御を超えて装甲が溶けかけてしまうことがあります。しかし、チャージに時間がかかる為、連射は不可能です。

さつきの極太ビームのことか。確かにボーデヴィッシュさんのISの一部が溶けかけてる。なんて威力だよ！ だけど驚くのはそこだけじゃない。

「君のISもガンダムって言つんだ。ううん、ガンダムって何を意味するんだろう？」

「ガンドムの少女はこちらを向いて質問する。確かにガンドムってどんな意味なんだろ?」

「何しに来たのよ? ハリス」「だから光輝くんに用があるの。つてことでちょっと着いてきてくれないかな、光輝くん?」

凰さんがいう少女　　エリスさんはどうも僕に用があるらしい。でもその前に……。

「貴様……！」

ボーデヴィッヒさんがお怒りだよ。それに気が付いたのかエリスさんはボーデヴィッヒさんの方へ向く。

「何のつもりだ」

「何のつもりって、私は光輝くんに用があるってさっきから言ってるじゃない。てなわけでちょっと来て」

エリスさんは僕の手を掴んでアリーナから出ようとする。全員あつけを取られたのか追つてくる人は誰も居なかつた。僕は一体どうなるのさ!?

「一体、用つてなんなの?」

あれからすぐに着替えて、エリスさんの部屋に連れ込まれていた。男女で一人きりなんて……うう。

「ん～ちょっと話がしたいんだよ」

アメジストの瞳に肩まで伸びているオレンジの髪で羽根の髪止めをしている。優しそうな感じで初対面でも嫌な感じはしない。

「その前に自己紹介が遅れたね。私はエリス・リムスカヤって言います。一応、四組の専用機持つちの一人つてことになってるのかな？ よろしくね！ あと呼び方は「エリス」か「リム」でお願いします」

邪氣の全くない笑顔で自己紹介を終えるエリスさん（いつも方が呼びやすいな）。専用機つていつのはΖΖガンダムのことかな。

「えっと、織斑光輝……です。こんな容姿だけど男だから……よ、よろしく」

突然エリスさんが近付いてくる。え！？ 何なんだよ！

「ふ～ん、噂通りの男の娘だね。顔も赤くなっちゃって、可愛いよ」

噂通りって……可愛いだなんて……僕つて一体……。

落胆しているとエリスさんが苦笑いしながらもつと顔を近づける。

「そう落ち込むことないよ。光輝くんは光輝くんでしょう？ 容姿が

どういひうじやなくして」

「え？ う、うん。ありがとう」

そんなこと言われたのは夏兄以来だよ。嬉しいな。
エリスさんは離れて僕に質問をした。

「さつそくなんだけど、光輝くんの ガンダムってどこで手に入れたの？」

「そりなんだ。篠々乃博士が関係しているなんて」

「僕もよく分からんんだよ。どうやって開発したのかはね。でもエリスさんのΖΖガンダムも凄いよね。自然発生なんてさ」

あの質問をした後、お互いのIISについて話し合っていた。エリスさんのΖΖガンダムはザザビーが乱入してきた次の日にいつの間にか持っていたものなんだってさ。

「私も驚いたよ。でも違和感はなかつたんだよね。まるで始めから持つていたような感じだったの」

「うーん、謎だねえ。そういうえばなんで僕のIISが ガンダムだって分かつたの？」

「さつきアリーナで反応したのもあつたけど、鈴に教えてもらつたからね。『織斑光輝つてのも確か ガンダムつて名前だつたわね。一体ガンダムつて何よ』って」

へえー、凰さんか。エリスさんて顔が広いんだね。でも分かるかな。この明るくて人懐っこい性格だし、一緒にいて楽しいよ。

「でエリスさんはΖΖガンダムで模擬戦とかしたことあるの？」

「一回だけクラスの友達としたけど、制御が難しくて途中で止めたの。性能はかなり高いんだけど制御が難しいんだよね。だから今は調整中なんだよ。IISのOSを自分なりに調整してやつと今日まともに操作できるようになったんだよ。でもまだ一つ問題がある」

「問題つて？」

「ハイメガキヤノンの出力調整だよ。普通に打つたら避けても装甲が溶けるからや、やすがにやばいなって……あれでも一応リミッタ一はしてるんだけど」

「つてことは、まだ出力が上がるつてこと!? 避けただけで溶けるのに、あれ以上の威力つてどうなるんだ!?

「でもあれつてシールドエネルギーをかなり持つていかれそうだね……。いつそのこと使うの止めたり?」

「そうだよね。でもあの武器もZZの一部なんだからや、使わないダメだよ。ござつて時にだけになるけどね」

H里斯さんはこいつの笑顔で囁く。ZZガンダムを大切にしてるんだね。

不意にH里斯さんが時計を見る。どうかしたのだろうか?

「そろそろルームメイトの子が戻つてくるから今田はこのくらいかな」

「え、そう……なんだ。じゃあ帰らうかな」

「騒ぎになつていいのなら今田一田部屋に居てもいいよ?」

「はい! ? 何を言つて……!」

「い、いいいい、いや! 大丈夫だよ!」

「冗談だよ。いや~反応が可愛いね。また話そうね。今度はエス以外のことも……ね?」

H里斯さんの笑顔つて可愛いなあ。さつきまでからかわれてたのに、どうでもよくなつてくれるよ。

「うん、またね。手伝えることがあつたらなんでもするからー。」

そう言つて僕はエリスさんの部屋を後にした。しかし、ガンダム
つて一体どんな意味なんだろ? つ? 知つてそうな束さんにでも訊け
たらいいな。

第十一話／もう一人のガンダム（後書き）

十河さまの考えて下さいましたオリキャラです。
ZZガンダムについてはこちらの方で性能などはまた書けりつと思
います。ご協力ありがとうございました。

しかし、こんな感じいいか本当に不安です……。
もつと上手く表現が書けるようにしないと。

第十一話～止められなかつた衝動（前書き）

れて更新しました。
展開をどうするか迷います……。

第十一話 止められなかつた衝動

月曜日の朝、こんな噂が流れていた。

「学年別トーナメントの優勝者は織斑一夏と交際ができる」って噂だね。当の本人は知らないみたいだけど……。

今月の月末　つまり6月の終わりに学年別のトーナメントが開かれるんだ。お偉いさまとかが来て三年はスカウトがかかってるし、二年は一年間の成果を測るものかな。一年はあまり関係ないけど、もし優勝したらいろいろなところからスカウトが来るだろ? うね。僕はあまりそういうのは好きじやない。

で、こんな噂が流れているのは篠さんが原因に違いない。

「篠さん、ちょっと話が……」

「う、うむ……」

僕は教室にいた篠さんを呼んで、屋上へ移動した。屋上なら人気も少ないしね。

屋上に着くと、篠さんは大きなため息をついた。まあ仕方ないよね……。まさかあんな噂が流れてるんだから。

「告白の時の声が大き過ぎたんだよ。全部ではないけど、告白の一部が聞こえた生徒が早とちりして、こんな噂が流れたんだと思つ」

「そのようだな……はあ~」

分かつてる人は分かつてていると思つけど、この前の篠さんの相談はこのことです。時は遡つてシャルルくんが転校した夜の事になるのかな。

「う、うむ実はな、一夏に告白したのだ……」

……？ 篠さんは何て言つた？ 「一夏に告白したのだ」って？

「ほ、本当に！？ 夏兄の反応は！？」

「ま、待て！ 話を最後まで訊いてくれ……正確には今度の学年別トーナメントで私が優勝したら付き合つてもいい、と言つたんだ」

篠さんはリンゴみたいに顔が赤くなっている。なるほどね、篠さんらしきつぢやらしいのかな。

「言えただけでも凄いよ。さすが篠さん！」

「だ、だが一夏が気持ちに気付いてくれるかどうかが心配なんだ……」

……

あ～確かに。夏兄は恋愛には疎いからね。篠さんが心配するのも分かります。

「でもその気持ちをぶつけただけでも大きな一步だと思つよ。付き合つ付き合わないじゃなくてね」

「ありがとう、光輝。だが少し声が大きかつたかもしれないのだ。もし誰かにでも聞かれたりしたら……」

「これはあれなのか？ 一人だけの秘密の関係を望んでいるのか？」

十代乙女は純情ですなあ。

「その時はその時で対処するしかないよね。大丈夫と信じよつ！」

回想終わり。

「でも篠さんのが優勝したらなんの問題もないよ。頑張らなきゃー。」

「」でチャイムが鳴る。授業に遅れたらお母さんに頭を叩かれる！ それだけはなんとか避けよう！

「光輝、ありがとう… さて急」うか…」

「うん… わすがに叩かれたくないしね」

良かった。いつもの凛とした篠さんに戻ってくれた。それで「」も篠さん！ 応援してくるから頑張つてね！

「はー。」の距離だけはどうにもならないよな……」「仕方ないよ。本来は女子しかいないんだからわ」

授業終了後、僕と夏兄はトイレを田指して中距離走をしていた。もともと女子高なこの「」学園は男子トイレがほとんどない。まあ教員が使うぐらいで設置数は少ないのです。

もちろん、帰りも教室まで中距離走。けつ」疲れるんだよ……。

体力不足なのかな？

「なぜこんなとこで教師などと…。」

「やれやれ……」

「」の声はボーゲヴィッシュさんともゆさん？ 曲がり角の先から一

人の声が聞こえる。夏兄も気になつたのか僕達は一人の話を隠れて聞くことにした。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」「このような極東の地で何の役目があるといつのですか！」

ボーデヴィイッヒさんが声を荒げるなんて珍しい。お母さんの今の仕事についての不満とかをぶつけてるようだった。

「お願いです、教官。我がドイツで再び」指導を。ここではあなたの能力の半分も生かせれません」

「ほう……」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありますん」

「なぜだ？」

「意識が低く、危険感に疎く、EISをファッショニカにかと勘違
いしてゐる。そのような程度の低いものたちに教官が時間が割かれる
など」

「そこまでにておけよ、小娘」

「う……」

お母さんの怒り一色の声色。ボーデヴィイッヒさんもその霸氣にす
くんでしまつたようだ。ここまで霸氣を感じたのは久しぶりだ。正
直、今のお母さんは怖い……。

「少し見ない間に偉くなつたな。十五歳でもう選ばれた人間氣取り
とは、恐れ入る」

「わ、私は……」

今、ボーデヴィイッヒさんが感じてるのは恐怖でしかない。圧倒的

な力の差とかけがえのない　自分の恩人に嫌われるといつ恐怖に

……。

「さて授業が始まるな。教室に戻れよ」

「…………」

ぱつと声色を戻したお母さんが急かして、ボーテヴィッシュさんは黙つたままその場を後にした。つて僕達もそろそろ……。

「そこ」の兄弟。盗み聞きか？　以上性癖は感心しないぞ」「な、なんでそうなるんだよ！　千冬ね（おかあさ）」「

ぱしーん！　ぱしーん！

「学校では織斑先生だ。全く……」

「は、はい……」「

僕達は出席簿で頭を叩かれた。しかも良い音だ。けど……痛いよ。

「さつさと行け。授業に遅れても知らんぞ。織斑弟ならまだいも織斑、今のまじじゃトーナメント初戦敗退だぞ。勤勉さを忘れるな」「わかつてゐつて……」「

「そうか。ならいい」

ニヤリと見せる笑みは今だけは家族として見ていくようだった。

そしてお母さんは僕達に背を向けこの場を後にした。

「自分の思いや信念を貫くのは難しい。だがそれで人は変わっていく」

そんな声が聞こえた気がしたが、僕にしか聞こえてなさそうだった。一体何だろうか？ でも優しい感じがしていた。

「計算上では完璧なはずだから安心してよっ」

「でももし間違つてたら大変なことになるよ？ 前みたいに装甲が溶けるのはよろしくないしさ」

「大丈夫！ 大丈夫！ なんとかなる！」

時は変わつて今日の放課後。エリスさんの頼みでアリーナに向かっている僕達。ΖΖガンダムのハイメガキャノンの調整が完璧（計算上は）になつたらしく、その相手をして欲しいと頼まれたのである。正直……不安で堪らない。本当に大丈夫かな……。

そしてアリーナに着き、異変に気付く。どうも騒がしい。一日前にも騒がしかつたけど今度は何なんだよ。

「鈴つ！」

一足先に観客席に着いたエリスさんがそう叫んだ。続けて僕も観客席からフィールドを見る。

セシリアさんと凰さんのISがボロボロだ。しかもその状態でボーデヴィッシュさんのIS状態が一人を殴り続けていた。

「おおおおおつ！」

別の場所から聞こえたのは夏兄の声だつた。零落白夜を発動させ、フィールドを囲んでいるシールドを消滅させ戦いに介入する。

「エリスさん！ ハイメガキヤノンを打つて！ シールドを壊せる

ぐらいの出力で！」

「わ、分かつた！」

エリスさんはすぐにΖΖガンダムを起動させ、ハイメガキャノンを放つ。それがどのくらいの出力か分からなければ、見事にシールドを消滅させることができた。

「ありがとうエリスさん！ 行ってくる！」

「ちよ、ちょっと待って、光輝くん！」

僕は抑えきれない怒りを放ちながらフィールド内へ駆けていった。

「やめろおおー！」

ボーデヴィッシュさんと動きを止められている夏兄の間にビームライフルを連射させ、間に入る。

「夏兄は下がつてて。この人と話したいから」「光輝……分かつた」

夏兄は素直に下がってくれた。シャルルくんも夏兄のところに行き、セシリ亞さんと凰さんの様子を見る。

「今度はお前が邪魔をするのか。で何の用だ？」

「何の用だじやない！ セシリ亞さんと凰さんをあそこまでする必要ないだろ！？ あれじやあ、命が危なくなる！」

「ふん、そんな覚悟だから命がどうこういうのだ。エサを起動せざる以上、命を捨てる覚悟は常に持つておくものだ」「

「平氣で痛めつける奴に覺悟がどういひ言えるか。絶対に許さない！」

友達を 仲間をここまでボロボロにしてましてや、命さえ危なかつたんだ！ 絶対に潰してやる！

僕は怒りに身を任せてボーデヴィイッヒさんに接近する。相手も応戦するために接近してくる。ボロボロにしてやるつー。

「止めるー 憎しみの為だけの戦いは死人に引き込まれるぞー！」

また聞こえた謎の声も無視して僕はビームサーベルで切りつけ

ガギンッ！

激しく響く金属音に僕とボーデヴィイッヒさんの武器が止められた。

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる

「お、お母さん！？」

そこにいたのは予想外の人物だつた。170?ぐらいあるISS用近接ブレードを一つ持つお母さんだつた。ISSの補佐なしで軽々と扱っているなんて……凄過ぎる。

「模擬戦をするのは構わん。が、シールドが消滅する事態にまでなるなら別だ。この戦いの決着はトーナメントでするんだな」

「教官がそうおっしゃるなら」

「なんで……！」

仕方なく僕はISSを解除させた。ボーデヴィイッヒさんも同じく解除させ、光の粒子が飛び散る。

「織斑もテコノアもいいな？」

一人は「はい」と返事をすると、お母さんはアリーナ内の全生徒に向かって言った。

「学年別トーナメントまでの私闘を一斉禁ずる！ 解散！」

お母さんが強く叩いた手はまるで銃声のよけだつた。

「織斑弟、私の部屋にすぐに来い」

やつてお母さんはアリーナを後にした。

第十一話へ止められなかつた衝動（後書き）

ここでお願いがあります。

どうかアドバイスをください……！

作者は文筆向上を目指しています。なにより皆様の意見は何よりの力になるからであります。
どうかお願いします！

第十三話～意味とパートナー（前書き）

やつと更新です。
それではどうぞ。

第十三話／意味とパートナー

「怒りに我を忘れてラウラに挑むか。お前のことだ、オルコットと凰がボロボロなのを見て冷静さを失つたんだろう？」

「……」

アリーナの事件が終わつて織斑先生　お母さんの部屋に呼ばれた僕は一対一で部屋にいる。自分のやつたことに後悔はしていないよ。許せなかつたから。

「光輝、これを持て」

そう言われて手渡されたのは日本刀だつた。以外にも重く、僕の力では片手で持つのは難しかつた。でもなんていきなり日本刀を？

「それが人を傷つけることに対する重みだ。お前ならこんなことしなくとも分かつていてると思つたんだが……」

お母さんはそれ以上なにも言わなかつた。日本刀の刃の部分に僕の顔が「写る」が、その表情は歪んで見えた。

あのまま、ボー・デヴィットヒさんと戦つてたら僕は唯の 戰闘狂になつてしまつたのかもしけない。相手を瀕死に追い込むのが楽しみになつて、何も感じなくなつてしまつところだつたのかもしけない……。

考へているとお母さんは僕の持つていた日本刀を取り上げる。

「ゆつくり考へるんだな。そつそつ、今度のトーナメントは一人組での参加が必須となるのだが、お前はリムスカヤと組め」

いきなり話題が変わったのは気にしなかった。気にしたら負けなんだ、きっとそうだ！……話を戻しましょう。

二人組が必須か。しかも「」指名ですか。

「なんでもまたエリスさんと？」

「別に大した意味じゃないわ。あいつの工房も『ガンダム』だろ？
それ繋がりだな」

「それなら夏兄か、シャルルくんが良かつたな…………」

「あの二人はもうパートナー同士だぞ？」

ま、まじか……！　まさかもつそこまで決まってるなんて。

「という予想だ」

「な、なんだ。それなら　」

「でもリムスカヤと組んでもらひ。少なくともリムスカヤはお前と組みたいようだがな」

エリスさんが？　うーん、どうしようかな……。お母さんを見ると心なしか笑ってるようにも見える。

「悩むくらいなら本人と話してみるんだな。せつかくお前と組みたいと言つてるんだ、話ぐらい聞いてみたらどうだ？」

「は、はい。そうしてみます。では……」

そう言つて僕は部屋を後にしようとすると

「おつと、気をつけろよ？　一年の女子は今頃お前を探すのに必死なはずだからな」

「だ、大丈夫ですよ」

「とは言つたものの、さてどうじよつか……」

部屋を後にして保健室を目指している僕に多大な障害に阻まれていた……！

今度のトーナメントが一人組なのが条件なのは話しました。障害であるこの女子達はどうやら僕を探して見つけてパートナーにするというのを盗み聞きしました。

お母さんの部屋を出て、感じたのは女子の異様なプレッシャーだった。欲望に取り込まれているというか……とりあえず、捕まつたら終わつてしまつ気がしたのは言つまでもない。

障害さえなければすぐに保健室に行けるのに……、注意しながら遠回りして30分！　この角を過ぎれば保健室だけど……。角に隠れながら様子を見る。

「保健室の前で女子が五人待ち伏せか。さてどうじよつか……」

早くしないと、ここも危ない。くつ、何かいい手はないか！？

「お前達、何をしてる？」

「お、織斑先生！？」

なんと別の場所から現れたのはお母さんだった。お見舞いかな？

「一体何の騒ぎだ？　つむぐくて敵わんぞ」

「そ、それはですね……ええと……」

五人の一人が説明しようとするが、お母さんの霸気にやられてるらしく言葉が続かない。

「つたぐ、なんでもないならさつと寮に戻れ。邪魔だ」

言葉にちょっと棘が入ってるなあ。イライラしてるのが分かります……。

「「「「「し、失礼しました…」」」」

五人は逃げるようにその場から立ち去った……。ですがお母さんだ、凄い……。

しかし、五人が居なくなつてもお母さんは保健室に入ろうとしない。どうかしたのだろうか？

「光輝、さつさと行け」

そう言つてお母さんは何処かへ行つてしまつた。まさか助けてくれたのか！？ ありがとうお母さん！ 助かりました！

ダッシュで保健室に向かう。ここまで来れば大丈夫！

「あー、おりむー？だー」

その声の方向 後ろを向くと、仏布さんを含めた内のクラス全員がそこにはいた……。

「さあさあ！ 私と……！」

「光輝きゅん！ 私と組んで！」

「私とやるつよー！」

なんか危ないこと言つてる人がいるー だが保健室まで一直線なんだ！ 全力疾走ならいける……！

僕は全力で保健室を目指した。入ってしまえばこっちのものだよ。ドアノブに手をかけ、保健室内に入る。はあ……はあ、息切れが激しいよ。でもこれで大丈夫だ！ 安心からか一気に疲れが出た僕は扉の前でへたり込んだ。

「また騒がしくなってるみたいだけど……って光輝くんっ！？ どうしたの？」

「クラス相手に、頑張つてました……はあ、はあ、はあ」

「Jリーチの様子に気付いたのか、夏兄、シャルルくん、ベットで起き上がっているセシリアさんと凰さん。そしてパートナーになりたいと言っている本人 ハ里斯さんがそこには居た。

「ドカンッ！！！」

「観念だよ～おりむー～」

「光輝きゅん～ここ開けてえ」

「なんで逃げるのよ！ 私とやるのは嫌なのー？」

もたれかかつてた保健室の扉がへこんだ……。その衝撃で僕は數メートル飛ばされてしまった。これがクラスの女子が団結した力だつていうのか……！

怖くなつた僕は咄嗟にベットの下に隠れた。

「夏兄～助けてよ～」

「わ、分かった。なんとかしてみるぜ……！」

そう言つて夏兄は扉の前に立つ。今もなお扉に衝撃が加えられている。

「みんな、ここは保健室なんだから静かにしろよな！ それに光輝は窓から逃げたぜ」

扉越しに声をかける夏兄。それを聞いて納得したのか衝撃は止まり、移動していく足音が聞こえる。た、助かったあ～。

「やつぱり夏兄は凄いなあ。一言でみんなを止めるんだもん」

「正直、自信なかつたけどやつてみるもんだな。つてもう出てきても大丈夫だろ」

「そ、そうだね。ふう助かつた～」

ベットの下から出た僕は改めて「」との収束したことに安堵を感じた。

そしてベットにいる怪我人の一人に声をかける。

「一人とも今度のトーナメントは大丈夫なの？」

あれほどの損傷なら修理にかなり時間がかかるはず。トーナメントに間に合えばいいけど……。

「さつき山田先生が来て、二人の損傷レベルがここまでいつてたから今後を考えて今回のトーナメントは出場禁止なんだよ」

そう言つたのはシャルルくんだ。そんなことって……。余計なことを聞いてしまつたな。

「『めん』一人とも。何も知らずに聞いて」

「私たちなら大丈夫ですわ！」の雪辱は必ず晴らしてみせますから～」

「次は負けないわよ！」

悔したと復讐を感じる。でも復讐なんてやつたら……。

「またいつか挑むのはいいと思うよ。でも、復讐に取りつかれちゃダメだよ。周りが見えなくなってしまつから」

一気に空気が重くなる。これは誰いでもおかしいと、けないことだから。

「分かりました。肝に命じておきますわ」

「おお、あの二人が真剣に話を聞いてくれたよ。セシリ亞さんなんとか心なしか顔が赤いし、どうかしたのだろうか？」

「俺は
— それはそうと光輝、今度のトーナメントは誰と組むんだ?
シャルルと組むことになつたんだけど」

ツ！
お母さんは預言者なのか！？ 本当に組んでたよこの一人
でも僕はもう決めてるから大丈夫さ。

「そのことなんだけどね、エリスさんと組もつかと思つてゐるんだよ」「わ、わたし！？」
「うん。なぜか知らないけど、織斑先生に直接頼んだんでしょ？組むのは良いんだけど理由が知りたいと言つかる」

エリスって大胆ねえ、と凰さん。そして顔を赤くさせるエリスさんと憤慨しているセシリ亞さん。三人の違う表情を見ると面白いと思う自分がいます。

「はあ～光輝。そういうのは聞かないのが優しさつともんだよ?」「え? そうなの? うーん、シャルルくんがそういうなら……」

突然シャルルくんに注意されてしまった。よく意味が分からぬけど、聞かない方がいいなら止めておこう。無理やり聞いて相手を傷つけたくないし。

「Hリスさん、今度のトーナメント僕と組んでくれますか? 嫌ならそう言つてもうつても構わないから」

「私が頼みたいくらいなのに……。是非、私と組んでください!」

最初の方はよく聞こえなかつたけど、僕と組んでくれるようだ。パートナーが見つかって良かつたよ。

「じゃあ優勝田指して頑張ろうか! でもその前にハイメガキヤノンの調整を完璧にしなくちゃね」

「あはは、そ、そうだね。まずはそこからだね」

しかし、Hリスして今度のトーナメントのパートナーはHリスさんに決まった。

しかし、さつきからセシリ亞さんがこちらをすくこ形相で睨みつけている。

「織斑兄弟はなぜこいつも鈍感な方々なんでしょう?……」

それってどうこいつ意味だよセシリ亞さん!?

第十三話～意味とパートナー（後書き）

うーん、光輝×エリスでしょうかね。
まああと一人ぐらいは立てますか。

第十四話～一人を結ぶ羽（前書き）

遅れました、十四話目です。それではどうぞ。

第十四話／一人を結ぶ羽

時は進み、トーナメント一週間前の放課後。僕とエリスさんは第三アリーナで模擬戦の準備をしていた。ハイメガキヤノンの調整も完璧になり、アリーナのシールドエネルギーを消滅させるのを100%とすると、今は30%程度。装甲を溶かすのが60%の出力でした。絶対防御を発生させるかどうかの瀬戸際だ。それでもダメージは大きいけどね。まあ溶かすよりかはいいでしょう……。

今このアリーナにいるのはISを纏った僕達だけだ。ハイメガキヤノンの調子が狂つた時のことを考えて他の生徒は怖がって入っこないらしい。確かにハイメガキヤノンの威力を知ってる人からしたらそうなるのかな。

「エリスさん、準備はいい？」
「大丈夫だよ。いつでもどうぞ！」

そう言って僕達は身構える。いつも明るいイメージのエリスさんだけど戦闘時にはかなりの気迫を感じる。その静かな環境を先に破つたのはエリスさんだった。

バックパックに2つ装備してある21連装ミサイルランチャーを発射してきた。僕はそれを素早く回避しつつ頭部バルカン砲でミサイルを破壊する。このミサイルはホーミング力が高いから避けるのが辛い。こうしてバルカンで破壊できるけど何個かは壊せずに当たってしまう。ホーミング力の高さもあるけど、大部分は反応はできるけど身体が追いつかないというのは本音です……。

更にエリスさんはもう片方のミサイルランチャーを発射し、2連

装ビームライフルまで撃つてくる。エリスさんの射撃精度はそこそこだ。でも今はビームライフルではさんでミサイルの命中を狙つているのが見え見えだ。なら……。

「行つて、ファインファンネル！」

5基のファインファンネルは反応して僕を中心にピラミッド型のビームバリアを形成する。これならビームライフルはもちろん、ミサイルも防ぐことが出来る。制限はだいたい1分ぐらいなのでミサイルの猛攻には耐えれるはず。

エリスさんは接近戦にするのか背中に装備してあるハイパービームサーベルを抜き、こちらに接近してくる。ΖΖガンダムのビームサーベルはガンダムのものより出力が上なのだ。でも接近ならこつちに部がある。ΖΖガンダムのは少し大きめなので大振りになってしまふが、ガンダムは比べて小さく、適切な場面でビームの刃も出るので小回りがよく効くのだ。まあエリスさんは接近より射撃が向いているのもあるかな。

僕はビームバリアを解除してサーベルを抜き、エリスさんを待つ。これはエリスさんの太刀筋を見極めると共に大きな隙を見つけて、カウンターを放つという作戦だ。篠さんや夏兄のように見極めてもカウンターが難しい人もいる。相手によつては危険な行為とも言える。

そんなことを考えている内にエリスさんが僕に切りかかる。僕はそれをギリギリの距離で避ける。エリスさんは手を休めることもなぐどんどん切りかかってくるが僕はそれを避け続ける。

だんだんイライラしてきたのかエリスさんの太刀筋が荒いものに

なってきた。そろそろ見えてくるかな……。

「あたれええ！」

気合の入った切りつけだけど、今まで大きな隙だ！ 僕はその攻撃を避け、姿勢を低くしてサーベルを切り上げる。案の定、エリスさんはそれを避けることが出来ずにシールドエネルギーで守られるがダメージを負う。距離を置くと思ったが、エリスさんはサーベルを持った僕の手を掴む。

「ゼロ距離なら当たるはず……！」

「まさか……ちょっと待つた！ この距離でハイメガキヤノンは止めて！ さすがにエスが持たない！」

「止めないよ。私だつて光輝くんに勝ちたいんだもん！」

「負けを認めるから止めて！ どっちにせよゼロ距離のハイメガキヤノンを受けたらエネルギーが0になるのはわかっていることだしさ！」

エリスさんは考え込む。なにやら小声で喋っているが何を言つてるかは分からぬ。一体僕はどうなるんだ……。

「やっぱり私の負けでいいよ。模擬戦でここまでする私が馬鹿だつたんだ。」めんね

そう言つてエリスさんは手を放すと同時にエスを解除する。いきなりどうしたんだよ？ 僕は何か酷いことでも言つてしまつたのか？

「いや、そこまで気にしなくていいから！ だから元気出して！」

「うん……。あのね、今から私の部屋に来てくれないかな？」

「別にいいけど、相方の人は大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。今日は遅くなるって言ってたから」

何をするのかよく分からぬけど、僕にも非があるしエリスさんが元気になってくれるなら行こう。

「分かった。模擬戦はここまでにしようか。他の人も待ってるし、ΖΖガンダムの調子もバツチシだしね。さて着替えますか」

そう言つて僕達はアリーナを後にした。この後悪夢があることも知らずに……。

「う~ん。光輝くんて才能あるね~」

「……」

「本当に男性なのが信じれませんわ」

場所は変わつてエリスさんの部屋にて。なぜかセシリ亞さんもいるがこの際どうでもいいよ。この一人が元気なつてくれるなら僕は嬉しい。でも……。

「だからって女子の制服を着る僕って一体……」

「だからそんなに悲観しなくていいって。すつぐく似合つてるよー。」

「そうだよねセシリ亞ア?」

「そうですわね。でも少し嫉妬します。男性なのに女性の私達より綺麗なんて……！」

「それはそうかもね~。もしかして本当は女とか……！」

僕にじりじりと向かつてくる遠距離が得意なお一人様。いやいや

！ 僕はちゃんとした男だよ！

後ずさりしているとベットに躓き、倒れてしまった。地味にかか
とが痛い……。そんなこと考えてたら一人がすぐ田の前に！ 万事
休すのかー？ 誰か助けてくれー！

「よしー！」のままの恰好で「飯食べに行こつか！ いいよねセシリア？」

「もちろんですわ！ 今日は可愛い光輝さんをしつかり拝みましょー！」

「ちょっと待つて……」のままの恰好はさすがにダメだつて！ 絶対いろいろと勘違いされちゃうよー！」

ああ……お願いだからそれはやめてくれー！ 一人から異様なプレッシャーを感じるし、後ろに不気味なオーラが見えるぞ！ これが女子の本当の姿なのかー？

抵抗も空しく、僕は一人の女子にこの姿のまま食堂へと連れ去られたのだった。悲惨だったことは言つまでもない。そして一度とい出したくもないし、その話をするのも嫌だ！

あの女装事件が終わって食堂から部屋に帰ってきた僕はシャワーを浴びてベットでのんびりしていた もとい、のびていた。

「つ、疲れた……もう嫌だ」

あの惨劇は夢に出できそうで怖い。まあ終わったことは気にしないよつに……。うん、大丈夫なはず！

血口暗示をしているとノック音が聞こえてきた。この感じは……。わたくしの事件の首謀者の一人である、H里斯・リムスカヤさんその人だ。今度は一体何だ！？

僕はドアの前まで移動して立ち止り、「何？」と尋ねる。警戒しなければ何をされるか分かったもんじゃないよ。

「あのわ、渡したいものがあるんだけどいいかな？」

「……今度は変なことしないって約束できますか？　あの惨撃を繰り返さないと約束でありますか？」

「だ、大丈夫だよ。わたくしの反省します……。セシリ亞も私も調子に乗り過ぎたから。本謝罪めん」

真剣な口調で謝罪するH里斯さん。警戒する必要はないみたいだね。僕はドアを開けてH里斯さんを中に入れる。

「お詫びの呪つて詠じやないけど、これしてほしになつて思つてさ」

そう言つて制服のポケットから取り出したのは羽の髪止めだった。H里斯さんが前髪にしているものと回じものらしい。

「へえ～、H里斯さんとおそれこの髪止めか。ちよつと恥ずかしいけど早速止めようかな」

「ほんとにー？　ありがと光輝くわ。えつとも、私が止めていいかな？」

僕自身、どうに止めていいか分からぬH里斯さんにおまかせします。まかせにしよう。

「うん、H里斯さんにおまかせします」

「じゃあ田を瞑つて。すぐに終わるかい

そう言われ僕は田を瞑る。しかし、エリスさんと同じ髪止めか。恥ずかしいけど嬉しいな。

「はい。開けていいよ。私は左に付けてるから光輝くんは右に付けてみたけどどうかな？ 私は凄く似合つてる思うよ」

差し出された手鏡で自分の前髪を見る。うん、違和感もないし前が見えやすくなった気がする。

「ありがとうエリスさん。さすがに寝るときは外すけど明日から付けていくね

「そう言つてもらえると嬉しいよ。じゃあ私はそろそろ帰ります。また明日！」

嬉しそうなエリスさんを見送りながら僕はこの髪止めに夢中になっていた。

第十四話～一人を結ぶ羽（後書き）

お願いがあるのですが、どなたか光輝とエリスの絵を書いていただけないでしょうか？ 作者は絵を書く時間がありませんというか、小説を書くのが精一杯なのです。

無理にとは言いません。どなたでもいいのでお願ひします。

第十五話～闇あるるヒルに光あつ（前書き）

やつと更新できたwww
でせびる。

第十五話／闇あると「ひに光あり

さて月曜日の今日から一週間は例の学年別トーナメント一色に変わります。第一回戦が始まる前の今でも全生徒が雑務や会場の整理、来賓の誘導をしていました。

それから解放された人達はすぐに各アリーナの更衣室へ走る。僕達、男子三人組はこのだだつ広い更衣室をさんにん占めなのだ。今頃ここ以外の更衣室は人が多くて困っているんだろうな。エリスさん、大丈夫だろうか……。

「しかし、すごいなこりや……」

夏兄がそう思うのも当然かな。各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、そんな人たちが諸々来ているのだから。まあ僕はこんな人たちはみんな嫌いだけどね。

「スカウトやらなんやらで来ている人がほとんどなんだろうね。まあ僕達には関係のないことだよ」

「ふーん、『苦労なこつた』

「今の一夏はボーデヴィッヒさんしか見えてないんだね」

シャルルくんの言う通りだ。今の夏兄にはセシリアさんと凰さんのトーナメント出場禁止の元であるボーデヴィッヒさんとの対戦しか考えていない。一年生は実力試しなのだけど、それも出来ないとなると代表候補生である一人の立場も悪くなる。

「自分の力を試せもしないってのは、正直辛いだろ」

夏兄は例の事件を思い出したのか自然と左手を握りしめている。し

かしシャルルくんの差し出す手がそれをほぐす。まるで何かを底うようだ。

「感情的にならないでね。彼女はおそらく光輝に並ぶ実力を持つているよ」

「悔しいけどシャルルくんの言つ通りかな。ボーデヴィッヒさんの実力は高い。でも決定的に欠けているものがあるから、そこを付けば大丈夫だよ」

「お、おう。しかし光輝、チームでもないのに特訓に付き合わせちまつてごめんな。こつちは万全だけど、そつちは大丈夫か?」

そう、ラスト一週間は僕とエリスさんはこの二人と一緒に特訓していた。敵同士とかは関係ないさ。僕達も良い特訓になつたしね。模擬戦なんか何回したのだろうか？一日、3回ぐらいしてたのかな。全部勝つたけど、この一人のチームワークは抜群で僕達もなかなか苦労したよ。

「大丈夫だよ。お礼を言いたいのはこつちなんだよ。ありがとう夏兄、シャルルくん！」

「こつちこそありがとな！　お互い頑張りうぜ光輝！」

僕と夏兄は拳をかちあわせた。こつこつのはなんかいいよねつ。こう情熱的なものを感じるよ。

「シャルルくんもやうつ」

「えつ、僕も？」

シャルルくんは戸惑いながらも拳をかちあわせてくれた。そんなにビックリしなくてもいいじゃん……。

「さて僕はそろそろエリスさんと合流するから行くね。お互い頑張
うう！」

「うん、模擬戦のようにはいかないからね！」

「今度こそ勝つてみせるぞ！ またフィールドでな

夏兄とシャルルくんの宣戦布告を聞きながら僕は更衣室を後にし

た。こっちだつて負ける気はないからね！

と、更衣室をでて羽の髪止めに触れる。

「友達から貰つた大切なもの。これを付けてたらなぜか勇気が出で
くるのは気のせいかもしれないけど、安心感があるよ……」

僕は貰つた本人に感謝しながら道を進んでいく。ありがとうエリ
スさん……！

僕とエリスさんはあの後合流し、アリーナの観客席で試合を見て
いる。しかも一回戦目から……。

「まさか夏兄、シャルルくん達の相手がボーデヴィッヒさんと篝さ
んペアだなんて、なんて偶然だよ……」

「確かにそうだね。でもあの一人のコンビネーションはすごいよね。
それに比べてあの二人は……」

たぶんボーデヴィッヒさんと篝さんは抽選で決まつてしまつたの
だろうけど、元々協調性のかけらもないボーデヴィッヒさんと組ん
だのは厳しい部分があると思う。そんなことを考えている内に篝さ
んがシャルルくんにやられてしまつていた。

「さすがに量産機と専用機じゃ性能の差があるからしかたないよね。四人中三人が専用機なだけですごいのに」

確かにエリスさんの言つ通りだ。篝さんとシャルルくんはISの性能差が大き過ぎる。更にシャルルくんの得意技『ラピッド・スイッチ』で篝さんを圧倒できるはず。

ラファール・リヴァイブ・カスタム?は武装数が多いとはいえ、瞬時に武器の切り替えなんて簡単にできるもんじやない。でもシャルルくんは持ち前の器用さでそれを可能としている。あれには僕達も苦戦したよ。

「これで一対一、ボーデヴィッヒさんが不利になつたけど油断は禁物かな。一人とも、気をつけて……！」

「ここから聞こえるわけがないのだけど、そう言わずにいれなかつた。なにか嫌な予感がしてならないんだ。

「あ、あれって……」
「……っ！」

私の隣で試合を見ていた光輝くんも驚いている。一夏くんとシャルルのコンビネーションでラウラを倒して決着が着いたと思ったら、突然ラウラのISから激しい電撃が流れてISが変形していった。さつきまでの装甲はドロドロに溶けて、漆黒の闇がラウラの全身を飲み込んでいった。

そして現れたのは、黒い全身装甲のISだった。ボディラインはラ

ウラのままであって、最小限のアーマーが腕と脚につけられている。頭部はフルフェイスのアーマーに覆われ、目の個所には装甲の下にあるラインアイ・センサーが赤い光を漏らしている。

「行かなきや、助けに行かなきや！」

光輝くんはそう言つて走つて何処かに行つてしまつ。

「ちよつと、待つてよ光輝くん！ まさか一夏くん達のところへ…」

「そうだよ。助けにいかないと夏兄達が危ないんだよ

やつぱりそつか。光輝くんらしいや。

「私も行くよ。パートナーとして自分自身の意志でさ。大切な人たちが危ない目にあつてるのに何もしないのは嫌だもんね！」

「エリスさん……！ ありがとう！ それじゃあ、行こう！」

光輝くんの掛け声で私達はHSを起動させる。こんなときにも光輝くんはおそらくの髪止めをしてくれている。ありがとね、光輝くんつ！

あれ？ 光輝くんの身体から緑の光が出ていたようないような……？ 気のせいかな？

「どけよ、篠！ 邪魔するならお前も」「つ！ いい加減にしろ！」

バシーン！と頬を引っ叩く音がフィールド内に響く。一夏の身体は飛び出そうとしていた姿勢からか横向きに転ぶ。頭に血が上つていた一夏だが込み上げてくる怒りを鎮めた。

「二人とも！ 大丈夫！？」

「なつ！ 光輝にエリス！？ どうしてここに！？」

篝と一夏、シャルルの後ろからエラを装備した光輝とエリスが現れる。意外な人物の登場に一人は驚きを隠せない。いや、光輝がくるのは多少の予想が出来たか。

「夏兄、あれってまさかとは思つけど、お母さんのデータを使ってる！？」

「そうだぜ。あれは千冬姉のデータだ。千冬姉のものだ。千冬姉だけのものなんだよ。それを……くそつ！」

黒いエラはフィールドの中央から微動だにしない。自分を攻撃してくれるものだけを反撃するようだ。ラウラの意志ではなく、訳の分からない力に振り回されている。

「わけのわからねえ力に振り回されてるラウラも気にいらねえ。ラウラとエラ、両方を一発ぶん殴つてやらねえと気がすまねえ」

「だが白式のエネルギーもないのにどうやって戦う気だ？ それに先生方がもうじき駆けつけてケリが着く。お前がやらなくとも自体の収集は着く。違うか？」

確かに篝の意見は正しい。だが

「確かに篝さんは正しいよ。でも自分の意志で行動することに意味があると思う。だから、ここは夏兄に、ね？ 夏兄もそうしたいん

だよね？」

「光輝……その通りだよ。篠、これは『俺がやりたいからやる』んだ」

二人の兄弟に圧倒されたのか、篠は押し黙るが問題はまだある。

「だがエネルギーはどうするんだ!? もう！」

「僕のリヴァイプならエネルギーを移すことが出来るよ」

「本當か!? だったら頼む！ 今すぐに！」

「ただし！ 約束して。絶対に負けないって」

シャルルがびしっと一夏に指を指して言つ。その言葉は強い意志の籠つた言葉だった。

「もちろんだ！ 必ず勝つてくれるぞ」

「約束だからね。さっそく始めるよ。エネルギー流出を許可。よし、一夏、白式のモードを一極限定にして。それで零落白夜は使えるはずだから」

「おう、わかった」

リヴァイブから伸びたケーブルは籠手状態の白式に繋がれ、エネルギーが流れ込んでくるのが分かる。それは一夏が初めてEISを起動した感覚だった。

「完了。リヴァイブのエネルギーは全部渡したよ」

「言葉通り、シャルルの身体からリヴァイブが光の粒子となつて消える。

それに合わせて白式は一夏の右腕部分と雪片式型だけを構築した。

同時に零落白夜も発動させ、蒼白の刃が発現する。

「これだけで充分だ。」の零落白夜で一撃で仕留める…

「夏兄……！」

「」「光輝くんっ！？　ISが……」

突然、光輝のISから緑の光が溢れ出していた。光輝がサイコバーストを発動しているわけでもない。ISの意志か、それともここにいる人間の意志が集中し過ぎてているのか原因は分からぬ。

「光輝、大丈夫なのかよ！？」

「うん、なぜか恐怖は感じないよ。むしろ暖かくて安心するんだ。それにこの感じは…」

光輝が言いかけたところで、光が一夏の握る雪片一型に纏わりつく。蒼白の刃が緑の鮮やかな色に輝く。

「綺麗だな。まるで虹の架け橋みたいな感じだ」

光輝と一夏を繋ぐ光は箒の言つ通りまるで虹の架け橋のような美しさを連想させる。

「早く彼女を助けだすんだ。闇の中で一人でいるのは一番辛いんだからね」

「……！？　今のは？」

専用機持ち全員に聞こえたであろう謎の声。光輝が時々聞こえる声そのものだ。

「あなたは一体誰！？　それに助けるって！？」

「そのままの意味だよ。一夏君、あのISAから彼女を助けるんだ」「え？ は、はい！ みんな絶対勝つてくるから待つてくれ」

そう言ひて一夏は漆黒のISAへ近づく。

「行くぜ白式」

一筋の光を細かく、鋭く、尖らせる。その集中が最大にまで達した時、零落白夜のエネルギー刃は強大なエネルギーを、ただ解放するだけではなくなった。それは日本刀の形に集約した。

「ありがとな白式。じゃあ行くぜ……！」

第十五話～闇あるといひに光あり（後書き）

次ぐらいで一巻は終わりかな？

作者は頭の発想が悪いので、なかなかこの小説もおもしろくないものだと思いますが、読んでいただけたらとても嬉しいです。

第十六話～N女の決心と怒り～（前書き）

なんかいろいろ違つた気がするけど見逃してくれません？

第十六話／乙女の決心と怒り／

私はラウラ・ボーデヴィッヒは漆黒の闇の中にいた。強さを求めるあまり、自分が分からなくなってしまった。そもそも強さとはなんだ？　相手を圧倒できる力か？

考えていると、突然声が聞こえてきた。聞いたこともない男の声だ。その声の方向を向ければそこは鮮やかな緑の光でその部分だけを照らしていた。

「いろいろあるけど、強さっていつのは人を信じることだと思つてる」「信じることですか？」

「そうだよ。ただ相手を妬んだり恨んだりするんじゃなくて、相手を受け入れることが大切なんだよ」

「私には……その資格があるのでしょうか？」

私は織斑教官に憧れていた。凜々しく、堂々とし、自らを信じる姿に焦がれた。しかしそんな教官を壊す人間がいた。それが織斑兄弟だ。

教官が一人の話をするた度に、教官は優しく笑み、気恥ずかしそうな表情になる。それは私が憧れる教官ではなくなってしまいそうで怖かつた。

当時、教官と居た光輝にもかなり酷いことをしてしまった。だが今考えてみると恨みで光輝を傷つけたのではなく、あいつに嫉妬をしてしまっていたからか。あの親子のよつたな優しい雰囲気にも。

ただの嫉妬で人を傷つけた私にそんな資格が本當にあるのだろうか？

「あるさ。自分の過ちに気が付いてそこからまたやり直せばいい。君は一人じゃない。いつも隣には誰かが居るんだから」

「はい……！」

いきなり光が私を包んでいく。だが怖くない。暖かい、ただそれだけなんだ。

「この光は一体……？」

「人の心の光だよ。そして光輝君の暖かみもある」

「光輝……の？」

「そうだよ。あの子はこの暖かみを伝えるのが目標なんだ。まあ今回は僕が勝手にやつたがこうして君に伝えることが出来た。光輝君にお礼を言つておきなよ？」

「分かりました……！　あの最後にお名前を教えて頂けませんか？」

この光みたいに、光輝みたいに暖かみを伝えたい。その前にこの光の声の名前だけでも知つておきたい。

「名前……ね。また今度に教えるよ。また会えるから
「そう……ですか……」

名前が聞けないのは残念だが、でもこれを機に私は変われる気がする。この光が、教えてくれたから。

「さて、そろそろ目覚めようか。君を待つてる人たちが居るからね」

そうして私の意識は現実に戻されていく。この暖かみは決して忘

れない……！」

「う～ん、緊張するなあ……」

トーナメントでの事件は夏兄のおかげで解決することができた。あの漆黒エリのからボーデヴィッシュさんを助けることが出来たのだ。それと同時に光は消えて ガンダムも強制的に解除されたのだ。理由は分からぬけれど、結果オーライだよ。肝心のトーナメントは今日は中止。明日からどうなるか分からぬけど一回戦だけでもしたいよね。

そして今、ボーデヴィッシュさんのお見舞いに保健室の前まで来ているのだけど、お母さんとボーデヴィッシュさんがなにやら重い話をしているらしく入りにくる。ああ、どうしよう……。

「さつきからセレニで盗み聞きしている奴、せつたと入ってこい」

ひうっ！？ 突然呼ばれて身体が強張つてしまつ。

勇気を振り絞つて入ればお母さんと来訪者に驚いているボーデヴィッシュさんがいた。ボーデヴィッシュさんは治療のためか左目の眼帯を外していて、左右で違う瞳で僕を見つめてくる。

「じゃあ私は仕事があるから戻るぞ。織斑弟も今日は早く休めよ

お母さんはさつまて保健室を出ていった。今、保健室にいるのは僕とボーデヴィッシュさんの一人だけ。なんというか、氣まずいよ。

「身体の調子はどうなの？」

ずっと黙っているわけにもいかず、調子を聞いてみた。なにかしらの病氣にでもなつていたらと思つと心配だつたからね。

「筋肉疲労と全身打撲だからしばらくは動けそうにない。さつき起き上がるのにも全身が痛かつたしな」

「そつなんだ……でも良かつた、命に關わるとかだったら嫌だから

「そこからまた沈黙タイムへ。ああこの間がすぐ長く氣まずいよ。どうしよう……何か話題はないものか。

「光輝、いろいろすまなかつたな……」

「ん？ 何のこと？」

沈黙を破つたのはボーデヴィッヒさんだった。彼女から話しかけるのは珍しいけど一体なんだろうか？

「ドイツにいた時は寝込みを襲つて殺しそうになつたりしただろ？」
この学園内だつて挑発もしたし、友も傷つけた。すまなかつた

俯いてしまうボーデヴィッヒさん。あく確かにそういうことが何回かあつたな。まあ他にもいろいろあつた気がするけどほとんど覚えてないや。

「別にいいよ。もう過去の話だし、それに今この学園にいる間だけでも仲良くしたいから。ダメ……かな？ 嫌なら嫌つて言つてもいいからね」

ボーデヴィッヒさんはキヨトンとした表情で僕を見つめてくる。

そんなに見つめられると恥ずかしいな……。僕は思わず顔を背けてしまった。

「嫌じゃない。あの光に触れて、お前のことを見完全に信頼出来たぞ
「光？　ああ、緑の光の事ね。サイコバーストを発動したわけでも
ないのに、いきなり溢れ出すからビックリしたよ」

「それは光が勝手に出たと言つてたぞ」

「うん？　言つてたぞ？」

「もしかしてあの光と話したの？」

「ああ。あの光自体に意志があるようだが一体誰なんだ？」
「僕にもさっぱり……でも暖かくて好きだよ」

確かにあの光には意志があつた。じゃあそれは一体何者なんだろうか？　ガンダムと何か関係があるのかな？　うう、分からぬことだけで頭が痛くなるよ……。

「光輝、すまないがもつと近くまで来てくれないか？」

「え？　う、うん。分かったよ」

突然そう言わされて僕はボーデヴィッシュさんの真横まで来て屈んだ。こう見てみるとボーデヴィッシュさんの瞳が明るくなってる気がする。良いことだ！

「田を熙つてくれ」

ボーデヴィッシュさんのお願いに僕は素直に従つた。一体何をするんだろう。心臓がドクドクいってるよー。ああ、緊張するなあ。

「ラウラ～、元氣～？」

「Jの声はエリスさんか。やけにテンションが高いのは気のせいかな？」

「つむぐー。」

田を瞑つてるから周りが見える訳じゃないけど、歯に柔らかい感触が……。

「さ～て、元氣か……なつ！？ 一人で何やつてんの！？ J、このなんどこで……！」

まさか、感触といいエリスさんの反応といいやつぱつ……。

「ふはっ、私は嫁とキスしていただけだが、なにか問題があるか？」

「「よ、嫁！？」」

いきなりなんてことを言うんだこの人は！？ 僕は咄嗟に離れようとしたが目の前にはエリスさんが鬼の形相で僕を睨みつけている。ひ、ひいいい！

「光輝くん？ これははどういうことなのかな？」

「いや、僕だつていきなりだつたんだよ！ しかもボー・デヴィッヒさん！ 嫁つてどういう意味なの！？」

「日本では気にいった相手を『嫁にする』といつのを聞いてな、それでお前は今から私の嫁だ」

「まさか……そんな間違ったことを教えたのはクラリッサさん？」

「そうだ。あいつが教えてくれたんだ。それと私のことはラウラと

呼べ

ああやつぱり……。の人だったか~。まあラウラをさつて呼ぶのはこいけどまさか嫁ときたか……。

「光輝くん？ 覚悟はいい？ 最期に自分の嫁を拝めて良かつた？」

H里斯さんはいつの間にかハイメガキヤノンの部分だけ装着しておりチャージ中のようだつた。まさかここで発射する気じゃ！？

「待つて！ 僕はそんな気はないんだ！ 全部無理やりなんだよ！ 信じてH里斯さん！」

「……じゃあちよつと外に行こうか？ ジャあねラウラ、また来る

「」

僕はH里斯さんに腕を掴まれ無理やり引っ張られる。自分で歩けるからせめて立たせて！

僕はそれからハイメガキヤノンで死ぬ寸前まで追いつめられて、やつと許して貰えました。

「光輝くんて無理やられるのがいいんだ。よし、覚えておこう。」

そんな不吉なことを言つてました……。正直これからどうなるか凄く怖いです。

第十六話～二女の決心と怒り～（後書き）

なにか批判でも良いので感想とかお願いします。作者の力になりますんで！

第十七話～可能性を信じる者～（前書き）

今回からはあの人がでます！　みんなさんが予想しているあの人があ……

第十七話～可能性を信じる者～

トーナメントが終わって数日　あることはシャルルくんがシャルロットさんだったと分かった日から　今日の朝のSHRで臨海学校の知らせがあった。

三日間の日程の内、初日はずっと自由なのだ。臨海学校と一泊二夜だから海は当然であつて……。女子のテンションが上がりっぱなしなのですよ。

あんまり泳ぐのが好きじゃないし買わないよつこしてたんだけど、エリスさんに相談したら

「寝言は寝て言おつね。今度一緒に買ひに行こう。そつじょりー」とまあこんな感じで週末に水着を買ひに行くことになってしまったのです……。まあ水着になつて海を眺めるべつこじようか。

「ではSHRを終わる。今日もしつかり勉学に励めよ。それと織斑弟、畳に私の部屋に来い」

そう言つてお母さんは教室を出でいく。どうしたのだろうか？
呼ぶくらいだから大切な話だと思うけど。

「実はな今度の臨海学校に東が来るらしい　とこつか来る。その時に　ガンダムについて話すらしい」

時は飛んであ母さんの部屋にて。まさか今度の臨海学校に来るのは、大丈夫なのだろうか？ 世界的な指名手配にされてるのによくもまあ来る気になるよ……。でも、

「そりなんだ。これでやつと ガンダムの事が分かるのか」

「だが会話の最後で「もしかしたら私が来る前に分かるかもね~」とか言っていたが、どう思つ？」

「どう思つって、まさかー」

僕のその反応が分かつたのかお母さんは首を縦に小さく振る。

「そうだ。もしかしたら ガンダム 光輝のいう人の心の光と会話が出来るかもしれないってことだろ?」

「あの光と会話が……」

「まあどちらにせよ臨界学校の時点で分かるのは明白だが光と話せるかは分からん。だがこれで光輝の疑問も解決できるわけだ。良かつたな」

お母さんはそう言いながら頭を撫でてくれた。久しぶりだからちょっと恥ずかしいな…… でも嬉しいや。

「うん！ もしあの光と話せることが出来たら、僕は変われそうな気がするんだ」

お母さんがギュッと抱きしめてくれた。突然の出来事で混乱するけど、すぐに落ち着くことができた。ああ、お母さんの暖かみはあの光のように癒されるよ。

「そりか。でも遠くには行かないでくれ。大切な家族だからな」

「うん……。大丈夫だよ。僕は離れないから安心してね」

僕は夏兄に詫びをし、いつかちやんとした形でお札をしなきゃね。

「じゃあ明日の朝、迎えにいくからちやんと準備してねー。おやすみなさいー」

金曜日の夜　あの話から二日程過ぎ　食堂から帰ってきた僕とHコスさんは明日の時間などを打ち合わせして途中で別れた。

「わー、今日は早めに寝ようかな。ん~」

僕の部屋の扉にもたれかかってこる。誰かと思えば僕を嫁と呼ぶワカラさんだった。

あの事件の後、いろいろ和解して今では普通に話すようになった。でも嫁と呼ぶのは止めてほしいこと言つてこののにこれだけは止めてくれないのが辛かつたりするのです。

「やつと来たか。遅いぞ、一体どこで油をうつていたのだ?」

「食堂に行つてたの。で、なにか用でもあるの?」

「嫁が寂しがらないうつむかわせ話を相手に来たのだぞ? そんな態度はないだろ?」

「なんでそんな上から田縁なの?……。まあ少しだけならいいことよ。どうだ?」「うん」

僕は扉を開けてラ・カーリさんを中心に入るように促す。

「あまり珍しこものもなし、つまらないこと思ひナビ。なんか飲み

物がいる？」

「そうだな……「一ヒーを貰おつか」

ポットに水を入れ湯を沸かす。それまで時間があるけど……。

「ちょうど光輝君もラウラさんもいるし、ちょうどだけ話に付きました
つてくれるかな？」

何処となく聞こえる謎の声。突然の事態に困惑してしまった。

「一体どこの声が……？」

「どうやらお前のヒトからのやつだな。それにその声はあの光……
か」

「ウソの言葉にビックリする僕だが首に架けている待機状態
のガンダムを見ると、わずかに光っている。その光に見惚れてい
ると光に声をかけられた。

「ビックリさせて悪かったね。でもこれからはちゃんと君達とも話
せるよ」

「じゃあ……早速なんですが貴方は何者なんですか？」

「ああ、自己紹介は必要だよな。僕はアムロ・レイ。この ガンダ
ムの搭乗者だったものだ」

僕とラウラさんはアムロさんから驚愕の話をされ、ただ聞く「ヒ
しかできなかつた。

アムロさんはこの世界の人間ではない、元の世界ではMSと呼ば

れる1~8m級のロボットを操る人だった。宇宙への進出も果たしていて、その点ではISを上回つてゐる。その中でいろいろな戦争一年戦争、グリップス戦役、第一次、第二次ネオジオン抗争が行われていたことも知つた。

アムロさんは第一次ネオジオン抗争時に大気圏内に入った、アクシズと呼ばれる小惑星基地を ガンダムで押し返そうとしたところで意識が無くなり氣付いたら束さんの隠れ家に来ていたと言う。人間の姿ではなく IS「ガンダム」として。その理由はアムロさんもよく分からないらしいが、まさか人がISになるなんて……。

またガンダムというのは一年戦争時に開発されアムロさんが初めて搭乗したMSらしい。コストを度外視して作られただけに当時の性能としてはトップクラスなんだとか。その後もガンダムタイプが開発され、種類はたくさんあるらしい。特徴としては額のVアンテナとか。

「なんか凄過ぎて頭が理解しきれてない……」

「確かに。だが全部真実だ。アムロ殿が嘘をつくような人ではないのはお前も分かるだろう?」

「う、うん。それにしてもそっちの世界は争いが絶えないんですね……」
「ああ。だが僕は人の可能性を信じている。この世界はISのせいで女尊男卑になってしまつてゐるが、それでも人の心の光が世界を包むと信じて……」

アムロさんは僕と同じように人の心の光 人の暖かみを伝えようとしている。世界は違えど人の心の光が大切なのは同じなんだ。

「そういえばアムロさんはなんで今日から話せるようになったんで

す？」

「それは、光輝君。君という人を知りたかつたからさ」

「僕という人間を？」

「そうさ。君が僕 ガンダムを持ったその時から君を見ていた。けど君はやっぱり才能がある。人を思いやる強い心を持つた才能を。君がきつかけを作ったからセシリ亞さんだって変われだし、君の人を助けたいという心が一夏君達を助けた。そしてそこにいるラウラさんだつて君が変われるきつかけを作ったからこうしてここにいるのだから。そうだよね、ラウラさん？」

「はい！あの闇の中、貴方や光輝の暖かみがあつたからこそ私はこうやって自分を確立していくことができていると思っています」

ラウラさんは真剣な表情で言った。前の彼女とは違ひ真剣さの中にも暖かさを感じる。

「僕は人に変わつて欲しいとかそういうのじゃなくて、人の暖かみがあれば人は強くなれる、勇気を持てるって知つて貰いたかったから、僕は伝えたいんです。お母さんが僕を助けてくれたように僕も人を助けたいって思つたんです」

「その想いで充分だよ。その純粹な気持ちが君の強さだ。いつまでも忘れないようにな」

「はい……！」

アムロさんの言葉には力がある。人を元気づけることが出来るような力が。でも、こう言われるのは初めてだからちょっと照れるなあ……。

ふと時計を見ると、20時前になつていた。ああ！明日の準備しなくちゃ！朝遅れたらエリスさんに何て言われるか……。

「ラウラさん悪いんだけど、明日の準備をしなくちゃいけないんだ。だから今日はもう部屋に帰つてもらえると助かるんだけど……」

「む、そうなのか？　なら私は自分の部屋に帰ろう。嫁の迷惑にはなりたくないしな。じゃあ、また明日な」

そう言つてラウラさんは部屋をあとにした。さてお風呂に入つたりしないと寝る時間が遅くなつてしまつ。寝坊だけはしたくないしちやつちやと終わらそう。

「そういうえば明日、水着を買つに行くと言つていたな。光輝君も大変なんだな」

「そうでもありませんよ。誘つてくれたのは嬉しいですし、良い気分転換になれば良いんですよ」

「一つアドバイスをしておいつ。女の子との買い物は大変とこつことだけは言つておくよ」

「大丈夫ですよ。なんとかなります」

アムロさんになにか意味深なことを言われてしまったが唯の買い物なんだし大丈夫だろう、との時は思つていた……。

第十七話～可能性を信じる者～（後書き）

まあ口調とか考え方とか自己解釈が多いかもしませんがどうでしょうかね？

作者はこの人が好きなので必ず出したい！ って思つてましたww

w

第十八話／ちよつとしたからかい（前書き）

光輝とアムロとの会話で「 、 、 」は、頭で意志疎通をしている状態での会話ですので……。また「コードタイプ」でやつですね。

第十八話 ちよつとしたからかい

「光輝くんっ、おはよー！ ちゃんと準備してるー？
「はーい！ すぐに行くから待つてー！」

次の日の朝、昨日の話を聞いて中々寝つけることができなかつた僕は少し寝坊をしてしまつた。しかし準備はすんなりと終わり、なんとか遅れることもなくちよつと良かつた。

「あまり女の子に待たせるのは感心しないな」「分かってますけどなつちやつたものは仕方ありません……。おつとこれを着けなきや」

机に置いてある羽の髪飾りを手に取りいつもの場所に着ける。うん、今日も大丈夫だね！

「よしつー 行きましょうか

最後のチックをして僕は部屋を出る。その日の前では頬を膨らませているエリスさんが立つていた。ちよつと遅かつたからおこてるのか？

「む、準備してつて昨日言つたの……。まあいいやつ。早くい

「ひつー

「あ、ちよ、ちよつと……！」

エリスさんが僕の手を掴んで走り出す。時折、つまづかずつながらそれをなんとか耐えて僕もつられて走る。自分で歩くことぐらい出来るから放してよー！

一時間ぐらいして僕達はショッピングモール「レゾナンツ」に着いていた。此処は本当に大規模で、ここで欲しいものが見つからなかつたら他には無い、と言われるほどだ。

僕も今日初めて来てビックリした。とにかく広い。単純な感想だけど本当にそれしか思えないくらいなのだ。確かにここならなんでもあるような感覚に陥ってしまう。

「ねえエリスさん？ 僕の水着決めてくれないかな？」

「えっ！？ いいの？」

「うん。あんまりファッショントか分からぬしさ、ダメかな？」

「光輝くんがいいなら私が決めるよ？ ちょっとしたリクエストがあるならそれに沿つて選ぶけど」

ちょっととした……ね。ううん、どうしようか。あんまり派手のは嫌だし……。

「なら黒を基調にした感じのがいいかな……」

「黒ね……分かった！ ジャあ行こうか！」

僕はエリスさんに引っ張られるように行くと、程なく水着売り場に着く。それにしてもホントに水着だらけだ。売り場なのもあるけど量が凄い。思わず目移りしてしまう。

「これなんかどう？？」

早速エリスさんが見つけてくれたらしい。黒にサイドが赤線一本

とこうシンプルなデザインだ。いろんな色が混ざっていないから僕は好きかな。

「これに……しようかな。あまり派手じゃないし、『じりや』『じりや』してないから好きかな」

「ん~、じゃあこれにしようか。光輝くんはあまり派手な色はすきじゃないの？」

「そうだね。たぶん派手な色にしたら水着の部分だけが目立ち過ぎてしまうから。そういうのは好きじゃないんだ」

そう言つとエリスさんの表情が暗くなる。どうかしたのだろうか？ 僕は何か余計なことを言つたのか…？

「そ、そう暗くならないでよ。……そうだ！ 臨海学校の時や、一緒に泳いだよ。一人でちょっと遠くまで行つて帰るぐらいでさ」「うんっ… 私、泳ぎはあまり得意じゃないけどそれでいいなら私はいいよ…」

僕だつてあまり得意な方じゃない。運動は好きな方だけど、水泳だけは好きにはなれない。泳げない訳じゃないんだけどね…。

さて僕の水着は決まつたけど、エリスさんはどうするんだろう？ さすがに自分で決めるとは思うけど、その間どうしようかな。

「光輝くん、私の水着… 決めて欲しいんだけど… いいかな？」

「へー？」

思わず声が裏返つてしまつた。自分でも変な声を出したと思つ。まさか… ね。

「別にいいけど、僕はいつこうセансがないからびつになつても知らないよ？」

「いいの！ 光輝くんが決めてくれただけで……」

最後の方は小声で聞こえなかつたけどまあいいか。さて、頑張つて決めようか！

「ふう、これで全部かな。いやー、うううに来たら結構買つちやうんだよね。光輝くん大丈夫？」

「だ、大丈夫……」

水着を買い終わつた後 あの時のエリスさん、無邪氣で可愛かつたな 何かいるものはないか、ということでいろんなお店に周つていろいろものを買つてしまつました。まあほとんどがエリスさんのものなんだけど……そこは気にしなによつ。

僕とエリスさんは両手に買い物袋を持つた状態で、しかも重い。まさかアムロさんが言つてたのはこのことなのだろうか？ 買い物が長いし荷物が重いし……疲れるよ。

「お、光輝にエリスじゃん」

後ろを振り向いてみれば夏兄とシャルロットさんがいた。シャルロットさんはなぜかそわそわしているが、まさかこの子も夏兄のことが？

「二人ともテート？ 一緒に部屋だつたのは伊達じゃないね～」「ち、違うよ！ 今日は

「シャルに水着を買いに行こうって言われたから着いてきたんだよ。光輝も誘おうとしたんだけど、部屋に居なかつたからだ」

からかわれるシャルロットさんが、そこに夏兄が入る。夏兄の言葉にがつくりしているシャルロットさんだけど、この反応は間違いないね。

「シャルロットさん、ライバルが多いけど頑張つてね。エリスさん行くわ。じゃあね二人とも」

「おう、じゃあな。光輝、エリス」

一人に別れを告げ、僕達は後にする。最後のシャルロットさんのあの顔！ 完全にビンゴだ。どうやら二人が夏兄を狙つてるみたいだね。それに気付かない夏兄もある意味凄いけど……。

「 光輝くん、あんまりそういうことでからかうものじゃないぞ」「 すいません……つい反応が見えたかったんで」

歩きながら直接、頭にアムロさんの声が響く。出かけるときなこうやつて話すようにしている。E-Sと話しているのが世間に知られたら政府に追われてしまう可能性が出てしまうからだ。だってE-Sと会話なんて前代未聞だもん。

だつたら話さなきゃいいじゃんつてなるけど、それはそれで寂しいんだよ。僕のこの能力があるおかげでアムロさんと話せている。という」とはアムロさんも僕と同じ？ まあ今度聞いてみようか。

「さて後は臨海学校まで頑張るだけ！ そろえるものは揃えたし、早く来ないかな～」

ヒリスさんは臨海学校しか見てないらしい。まあ初日が自由なんて確かに楽しみだね。それは言えるけど、

「 怪我をしないように気をつけないとね」

「 つて！ 台詞を取らないで下さい！」

「 そんなに怖い顔してどうしたの。光輝くん？」

「 え？ な、なんでもないよー。まあ帰りますよー。」

第十八話「ちょっとしたからかい」（後書き）

一応、頑張つて分かりやすく書いてるつもりですが、読者様から見たらどうなのですかね？

アンケート ものー

現在、臨海学校編を書いているわけですが、これが終わったらオリジナルのストーリーを書く予定なのですが、大まかな内容を誰さんに決めて頂きたいのです。

ストーリーと書つても、本編とはあまり関係のない短編にしようと思っています。なんでもいいのでお願いします。

作者が考えるべきなかもりませんが、今月の後半から仕事がかなり忙しくなるとのことで、本編に沿つて書くのがやっとになります。さすがに本編ばかりでもつまらないといつ方もいらっしゃるかと思いますので、大体のストーリーの内容を決めて頂きたいです。

そんなに細かくする必要はありませんので」「協力お願いします。

例に挙げれば、あるキャラクターから見た一日とか、光輝の性格が変わってしまう、とか簡単なもので結構です。

皆さんが考えて下せつたストーリーの中から一つを採用して書こうと思っています。

期限は臨海学校編が終わるまでです。その時は前書きなどでお知らせいたしますので……。

気が向いたらよろしくお願いします。

第十九話～臨海学校へ！（前書き）

アンケートの件ですが、神夜晶ちゃんのよつたな感じでOKですのです。

第十九話／臨海学校へ！

さてやつてきました臨海学校。バスの中から綺麗な海が見える。
日差しが反射していて、揺らぐ水面は穏やかな感じだ。

「周りのテンションが激しい……。でも着いたらきっと激しくなるんだろうなあ」

そう、バスに乗った時点でクラスの女子達のテンションが上がりっぱなしだ。更に海が見えたことで、またテンションが上がる。そして……うるさい……！　確かに嬉しいのは分かるけど、これは……。

「恐ろしい風景だな……人はここまでしゃげるものなのかな？」

アムロさんですら驚愕する程のクラスのテンションは上がっています。頂上の見えない山を登るように無限に上がり続けるこの密室で僕は大丈夫なのか……？

「はあー、早く」の歯痛から出たい……」

「何から出たいですか？」

僕のため息に反応したのは隣に座っているセシリアさんだ。ここ最近、どうも機嫌が悪いのだが原因が分からぬのです。今も鬼のようなオーラを発しているのが見えてしまう。

「まあいいですわ。光輝さん、海に着いたらサンオイルを塗つてい

ただけません？

「……え？ なんでまた僕に！？」

「そ、そんなに嫌な反応しなくても……いいじゃないですかあ

「きなり泣きそうになるセシリ亞さん。ちよ、ちよっと… こんなところで泣かない！ 誤解されそうだ！」

「分かつたから、そんな顔るのは止めて！」

「本当ですかね？」

「ほ、本当だよ。僕で良いなら塗るよ」

その言葉を言った途端、セシリ亞さんの顔が笑顔になる。なにも知らない無邪氣で純粋な子供みたいに……。最近、こんな感じのトラブルが多い気がする。突然、通路を挟んでの席から異様なプレッシャーを感じてその方向へ向く。

そこに「ものす」い形相でこちらを睨みつけるラウラさんがいた。いつも冷静な彼女だが、こつも感情をあらわにするのは珍しい。

「くつ、私がそこに居るはずだったのに……！」

「あら、ラウラさん。抜け駆けしようとした罰ですわ！」

この二人から火花が見えるのは気のせい？ ってかこの二人は僕の隣の席に座る為に争っていたのか!? 僕の隣に来ても面白くもなんともないよ。バスぐらいは静かにしたいものだ。海に着いたら体力をかなり使いそうだし……。

「そろそろ旅館に着く。静かにしていろ！」

お母さんの怒声一発で全員席に着き、静かになつた……。わあ、さすがお母さん。あれだけつるさかつたバス内がエンジン音しか聞こえなくなつた。

「 相変わらず千冬の指揮能力は凄いな。しかしこの雰囲気は違和感を感じてしまう」

「 そりやそうでしょう。あれだけ騒がしかったのにいきなり静かになつたんですから」

アムロさんと話せるようになつて数日後に心の光と会話が出来るようになったとお母さんに報告しに行つた。さすがに驚いてたよ。ISが意志を持つて喋るんだからさ。でもこれが公になれば政府から ガンダムを出せと問い合わせられ、一生帰つてくることはないだろうと話していた。外では完全に喋らざるに会話 意志疎通で会話をじるといふことだ。

しばらくして無事、旅館に着くことが出来た。女将さんに全員であこさつをして部屋に行くのだが

「 織斑兄弟は私と同じ部屋だ。それでもしないと就寝時間を破つてお前らの部屋に女子が群がるからな」

という訳で僕と夏兄はお母さんと一緒に部屋になつたのだ。まさか家族が部屋のメンバーだなんて思いもしなかつた。この方が気が楽にできていいや。

しかしお母さんはあくまで教員なので基本的に敬語だ。まあ仕方がないか……。

一通り説明を受けた僕と夏兄は荷物を置いて海に行くことにした。さてこれからが一番疲れる所になつてしまふのだろうか。

「 自由があまり羽目を外し過ぎないよ。怪我をされても困

る

「分かつてます。じゃあ光輝、海行こひが」

夏兄の後ろに着いて更衣室に向かう。女子更衣室の前を通り、中が凄くひるさかったのはこつまでもない。

「織斑君たちだ！」

「えつ！？ 水着変じやないよね！？」

「一夏君も光輝君も水着似あつてるなあ

更衣室で着替えてひよひび隣の更衣室から出てきた女子と出合つた。けつこう露出度が高いんじやないか？ あんまり直視しているといつちが照れるつ！

砂浜の砂が7月の日差しに照らされていて、とても暑そうだ……。あつ、夏兄が行つた！

「あひあひあひ

おひつー！？ やっぱり暑いのか！ だがこじで勇氣を出さなければ……！ 勇気を振り絞つて砂浜へ一步を出す。

「……あれ？ そこまで熱くないぞ。良かつた……」

あそこまで脅えてた自分が恥ずかしい……！ あう～。

「さて体操して泳ごうぜ光輝」

「そ、そうだね……」

泳いでる最中に足とか攣りたくないしね。アキレス腱伸ばして、背筋伸ばして、屈伸して。と後ろから凄い勢いで足音が聞こえる。

振り向けば鈴さんが夏兄に向ってダッシュしてあり、ジャンプ。夏兄に飛び乗ったのである。突然の重さに驚いた夏兄だけどすぐに体勢を整える。

「そんな歳になって体操なんかしてんの？ セッセと終わらせて泳ぐわよ！」

そう言いながら鈴さんはあつという間に夏兄に肩車をしてもらつている状態になつた。動きに無駄がない……！ 慣れているなつ！

「お前のちゃんと準備体操しつけよ。溺れても知らないぞ」「あたしが溺れたことなんかないわよ。前世は人魚ね」

人魚つて……空想上の生き物じゃないか。そんなことを心の中で突っ込んでいると後ろから声をかけられた。

「光輝さん」

「ん？ ああセシリ亞さん。どうしたの？ そんなに荷物を持つて？」

セシリ亞さんだつた。手には簡単なピーチパラソルとシート。それにサンオイルを持つてゐる。

「もう、先ほどのバスの中で約束したではありませんか！ サンオイルを塗つてくれると！」

「やつこやそんなこと言つたね……」

僕達は程なく準備を終え、さあ塗りつとするが……。

「どうしましたの？ 早く塗つて下さこまし」

「へ、うん……」

そう言われても……女子の肌に直接触るのはどうかと思つてしまふ。青のパレオを脱ぐと下の露出度が高い……更に背中に塗る訳だから、首の後ろで結んでいたブラも解いたわけで……正直、直視できぬ。今のセシリ亞さんはいつも以上にセクシーな気がする……。

約束したのに塗らない訳にもいかず、サンオイルを手に出して両手で少し温めて……、織斑光輝、行きますっ！

「んっ、光輝さん、お上手ですわ」

「そ、そう？ 後、変な声出さないでよね……。すっごく恥ずかしいんだから……」

「うう、多方向からの視線が痛い……、この状況、誰か助けてー！
「あ、光輝くんになにしてるのでセシリ亞ー！」

「この声はエリスさん！ 救世主だ！」

塗つてる最中にその方向へ向くと、手が止まってしまった。今のエリスさんは、オレンジのビキニにオレンジのパレオ つまりレゾナンツに行つた時に決めた水着を着ている。その姿が凄く似合つてて つい見惚れてしまう。

「あらエリスさん、私と同じタイプの水着なんて、花が無いですわね！」

「でもでも、この水着は……光輝くんが決めてくれたんだもん！それだけで……」

セシリ亞さんの表情が固まる。そりや僕が決めたけど本人に似会つてるかなんて分からないし、でもエリスさんはオレンジが似合うイメージだからそういう水着にしただけで……でも今、言えることは一つ！ 今のエリスさんは可愛い！

「光輝さん！ 手が止まっていますわよ！」

「わ！ ごめんなさい！」

「セシリ亞！ そんな言い方はないでしょ！？ いい光輝くん？ サンオイルなんてこう塗ればいいのよ！」

と言いながらエリスさんはサンオイルを僕の手から奪い、激しい勢いで塗りつけていく。

「エ、エリスさん！ そんな手つきで塗らないで下さい！」

いきなりセシリ亞さんが立つ。……うわああっ！ 蒼くて眼を隠すがわざかに見えてしまった。セシリ亞さんの……はうう。

セシリ亞さんは悲鳴を上げ、旅館に戻つたと言つ。うあああ……ごめんなさいセシリ亞さん……。

「はあ～、つ、疲れた……」

「まだ一日だぜ。明日からが本当じゃないか

時は進んで夕食後の部屋にて。今日はいろんなことがあった。セシリアさんパニックにピーチバレーの乱、夕食戦争……こんなことで明日から大丈夫なのかな？ ちょっと休んだら夜の海辺を散歩に行こう。

「お前らだけか……女の一人も連れ込めないよ」じやまだまだな
襖から出てきたのはお母さん。てかその発言は教師としていいの
でしょうか！？

「そうだ、織斑先生。Hリスさん呼んでもいいですか？」

「別にかまわんが、どうせならいつものメンバー全員呼んで来い。
就寝時間には帰つてもらうがな」

「分かりました。それじゃあ行つてきますね」

「 それにしても今日は疲れました。でもたまにはいいのかもし
れませんね」

「 そうだな。僕はこう見ることしかで出来ないが、悪くはない」

いつものメンバーを呼びに行つた後、僕はそのままアムロさんと
話しながら夜の浜辺を散歩していた。波の音が大きく聞こえる。毎
の様子と比べるとギャップの激しさを強く感じてしまつ。

「 この世界は平和だね。でもISによる差別は健在中なのが気
にいらないな。ISが女性しか使えないにしても使わなければ男性
も女性も平等だということを分かつていないのだろうか？」

確かに女性がISを使わなければただの人間だ。それが分かってない女性がほとんどなのは確かだと思う。

「人の知恵はどんな苦難だって乗り越えられると信じてる。人は生きている限り可能性は無限にある。それを潰すような行為は許せない」

「アムロさん……」

一段と波の音が大きく聞こえる。アムロさんのいつもの優しい声とは違い、真剣で少し怒りに満ちた声だった。

「さあそろそろ戻るつよ。明日の為に今日は早めに休んだ方がいい」

僕はその言葉に従い、部屋に戻るようになる。その刹那、あれに似たプレッシャーを感じた。まさか……ね。

第十九話／臨海学校へ！（後書き）

また「あれが出てくる感じですね～。次回は千冬ちゃんのメンバーの会話を載せる予定です。

第一十話～N女の密会（前書き）

これが忙しくなる前の最後の更新です……。なんかグダグダだと思
いますが見てやってください……。

第一十話～N女の密会

「へえ～、これがいつものメンバーって奴なんだ。てか、私以外は一組じやん！　あ、鈴は一組か」

「　　」

今、織斑家族の部屋に居るのは千冬、原作ヒロイン、エリスの人だ。一夏は風呂に光輝は散歩に行っている。エリスはどうも思っていないが原作ヒロインズは緊張しまくりだ。

「おいおい、こんな辛氣臭いのはなんだ？　いつもの馬鹿騒ぎはどうした？」

「いや、なんというか……」

「織斑先生とこんな感じで話すのは」

「初めてですし……」

「はあ～、そんなことか。じゃあ私が話をしてよ！」

そう言つて千冬は缶ビールを冷蔵庫から取り出し、プシュッ！
景気のいい音を立ててしぶきと泡が飛び出す。そのまま「ククク」と喉を鳴らす。

「お前、一夏と光輝のどこがいいんだ？」

「　　」

機嫌のいい声で尋ねると、ヒロインズの顔が一瞬で赤くなつた。
いきなり確信ついた質問をされれば誰だつてそつなるだろ？

「私から見たら、篠ノ乃、鳳、デュノアは一夏。オルコット、ボーデヴィッヒ、リムスカヤは光輝といったところか……」

「　　」

「Jの先生は心が読めるのか！　全員がそう思つてゐはずだ。でも
Jにからこ女たちはどうなのでしょうか？」

「い、一夏の剣術が昔より落ちてゐるのが腹立たしいだけですの
で……」「…………」

と簞。

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

と鈴。

「分かつた。一夏にはせめておひそかへとしよう」

真顔で言つ千冬に一人は詰め寄る。

「「伝えなくていいです！」」

二人のその様子をほつまつと一蹴して、ビールを口につかる。
実際に楽しそうだ。

「で、デュノアはどうなんだ？」

「ぼ、僕　いや、私は一夏の優しいところが……」

「なるほどな。しかしなあ、あいつは誰にでも優しいぞ？」

「そ、そうですね。そこがちょっと悔しいかなあ」

あははと照れ笑いをしながら、熱くなつた頬を扇ぐシャルロット。
その様子が羨ましいのか前述の一人は黙つてシャルロットを見つめ

る。

「さて次は光輝に惚れてる三人か……まずはオルコットからいこうか」

「わ、わたくしは……光輝さんといふと落ち着くんです。それに……」

それからセシリアは顔を真っ赤に染めて黙り込んでしまった。恥ずかしいながらの勇気だったのだろう。千冬はその様子を真剣に見ていた。

「なるほどな……言いたいことは分かった。後の二人もそんな感じだろう？ それと、あの光を一緒に伝えたい、か？」

「な、なぜ分かるのですか！？」

「さすが家族ということですか……！？」

反応を見ると三人は同じだったようで、その様子を千冬は、やっぱりかという感じで見ていく。

「あの子は、心の傷を持っている。誰にも理解できないような深い傷が。初めてあの子に会った時の目は今でも忘れない」

「は、初めてあつたつて……光輝くんと先生ってどういう関係なんですか？」

「もちろん家族だ。だが血は繋がっていないがな。数年前、私はたまたまボロボロだった男の子を保護した。食べ物もろくに食べてなかつたのか衰弱していたな」

全員、真剣な眼差しで話を聞いていた。ここまで千冬が語ること自体が珍しいが、光輝のことを知る、貴重な話でもあつたからだ。

「あの子は自分が捨てられたことが当たり前のようになつてた。
「普通じゃないから」と言つて自分で無理やり納得させてる感じだ
つた。頭にきた私は本当の気持ちを聞いたんだ。そしたら思いつき
り泣きながら「お父さんやお母さんと一緒に居たかった」って叫ん
でたな。それから私があの子の母親になることにした。それで少し
でも助けるのならと思つてな」

今の光輝があるのは千冬の存在があつたらこそ、だと全員納得して
いた。光輝は自分たち以上に苦しみを味わつてはいる。千冬に拾わ
れる前は分からぬいが、心が傷ついたのだろう。それも深く深く、
一生治らないところまで……。

「教官から見て、今の光輝はどうですか……？」

「昔に比べたらかなり明るくなつたぞ。お前らの存在も大きいな」

千冬は笑顔になる。それをみたヒロインズは呆気にとられてしま
う。こんな千冬を見たことがないからだ。それほど嬉しいといふこ
とだ。

「だが最近、心の光と話せるようになつてますます明るくなつた氣
がするな」

「「「「心の光!?」」「」」

「なんだ? 知らなかつたのか?」

驚いてる中ラウラだけは何も反応はない。それはそうだ。その様
子を不思議に思ったシャルロットは尋ねる。

「ラウラは知つてたの?」

「ああ。たまたま光輝の部屋に行つた時に話した」

篇、シャルロット、エリスは驚いているがセシリアと鈴は何のことが全く分かつてない。

「あ、あの心の光つてなんですか？」

「光輝のISからでる光だよ。ラウラのISが暴走した時に光輝のISから出て、一夏の零落白夜に纏つたんだよ」

「しかし、あの光は綺麗だったな……。虹みたいで、まさに人と人の心を繋ぐ橋見たいだった」

「そ、うなんだ。一回見てみたいわね……」

始めの方の雰囲気に比べたら軽くなつたのか口調が柔らかくなつてきている。

「またいつか話せる時が来るさ。その時はいろいろと聞いてみるといい。彼は歴戦の英雄だからな」

第一十話～N女の密会（後書き）

さて、当分更新は止まってしまいます。しかし、ちょっとづつ書いていくつもりではいます。後、感想とかアドバイスとかは常に大歓迎です！

それがもし否定的でも自分の力になりますから。

後、アンケートに関して分からないことがあればいつでも質問どうぞ。

第一十一話～銀の暴走と赤き残光～（前書き）

忙しいとか言いながらやつでもありますんでしたwww

今回はいつもより長いです。まあ原作をけつこいつ使つたからかな？

第一十一話 銀の暴走と赤き残光

臨海学校の一田田の朝、専用機持ち+篠さんのお母さんに言わわれ皆場に来ていた。

一田田は一日中、IISの装備試験とデータ取りに追われる。特に専用機は専用のパーティテストがあるんだけど、これも量が多くて大変そうだ。僕と夏兄とエリスさんはそんなパーティは無いんだけどね。白式はどんな装備も拒むし、僕とエリスさんは作れる人がいない。どうも従来のIISの装備では対応できないらしい。まあ、ガンダムといいΖΖガンダムといい、このままでも十分強いのですよ。さすがガンダム！

しかし、専用機持ちではない篠さんがいるのだろうか？ 何かあるのだろうか……。

「今日から篠ノ之も専
「ちーちゃん～～～ん！！」

「ビビビビビビビビ……！」と何かが走つてくる音がする。どうもあの崖からのようだけど、声で分かる。あの人しかいない……！

「……束」

影が崖をジャンプしてお母さんに飛ぶ込もうとする。が！ お母さんはそれを最低限の動きでかわしながらアイアンクローラーをきます。ああ痛そうだ……。

「やあやあ！ 会いたかったよ！ ちーちゃん！ サア、ハグハグ

「うううーー！ 愛を確かめ つて痛い！ 痛いよー！」

お母さんの指に更に力が入つていぐ。ああ、自分の幼馴染にも容赦がないのがお母さんらしい……。

「へるたこぞ束」

「ぐぬぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクロードねつ」

アイアンクロードの拘束を抜ける束さん。あなたも只者ではないのがよく分かります、はい……。

そして向いたのは実の妹の篠さんだつた。何年ぶりの再開なんだるつ？ 篠さんは束さんのこと嫌いなようだけど……。

「やあー！」

「…………どうも」

「えへへ、久しづりだね。ううして会つのは何年ぶりかなあ。おつかくなつたね、篠ちゃん。特におっぱいが」

「うんっーー！ 実の姉を日本刀の鞘で突いた篠さん。でも分かる気がある。わつきの発言はよくなじでしょうよ……。

「殴りますよ」

「な。殴つてから言つたあ……。し、しかも日本刀の鞘で突いた！ ひどい！ 篠ちゃん！ ひどい！」

お腹を押さえながら涙目になつて訴える束さん。そんな一人のやり取りを、一同は、ぽかんとして眺めていた。

「いやー、こーくんも久しづりだねー。それにレイちゃんも」

「束さんはいつもテンション高いですね。それとレイちゃんって誰です？」

「僕のことだ。全く、その呼び方は止めてほしこと黙りてきたのだが……」

アムロ・レイだからレイちゃんか……。これじゃ男じゃなくて女子になってしましますよ。

「光輝？ 今のが、あんたのHSの声なの？」

「そうだよ。ってなんで知ってるのさ？ まだラウラさんと織斑先生しか知らないはずだけど」

「私が教えたからな。こいつらなら信用できると思つてな」

まさかお母さんが教えていたとは……でもこのメンバーなら大丈夫かな。

「どうちにせよ、いつかは話さなければならぬ日が来るんだ。僕は構わない」

「僕もいいですよ。アムロさんの通りですし、このメンバーなら信頼できます」

「そうか」という訳だ。オルゴシト、鳳。これで分かつただろう

「うー」

「まあいい、束。自己紹介ぐらいしる。こいつらが困つてゐるか。まあ今度ゆつくりみんなとアムロさんで話せることができればいいなあ。

「まあいい、束。自己紹介ぐらいしる。こいつらが困つてゐる「えへ、めんぢくさいなあ。……私が天才科学者の束さんだよ、はうへ。おわりー」

そう言つて、ぐるり、と回つてみせる。ぽかんとしていたメンバーが、やつとこで田の前に居る人がIRSの開発者にして天才科学者の篠ノ之束さんだと気が付いたらしく、少し騒がしくなる。

「まさかこの人があのIRSの開発者……」

「しかしながらまたこんなところにいますのー…？」

「す、凄い……！」

IRSの開発、基礎理論を開発した束さんが、政府から世界的指名手配中であり、逃亡中の身である。なのになんでもまた臨海学校に現れたんだろ？！

「さあ大空を！」覗あれつ！

びしつと直上を指さす束さん。その言葉に従つて僕を含めた全員が空を見上げる。何か来る…？

ズズーン！

「うあ！」

近づいてきたのは分かったけど、早過ぎてか反応が出来なかつた……。激しい衝撃を伴つて金属の塊が落下していった。

銀色をしたクリスタル型の何かは、壁が倒れてその中身を表す。

「じゃじゃーん！ これぞ篠ちゃん専用機こと『紅椿』！ 全スペックが現行のIRSを上回る束さんお手製のIRSだよー！」

ぜ、全スペックが現行のIRSを超えるだつて…？ 最新鋭機で最

強の機体じゃないか！

「ああ篠ちゃん！ 今からフィットティングとパーソナライズをはじめよひか！ 私が補佐するからすぐに終わるよん」

「……お願いします」

「堅いよ～。実の姉妹なんだし、こうもつとキャッチャーな呼び方で

」

「はやく始めましょう」

「ん～、じゃあ、はじめようか」

篠さんは束さんが嫌いらしいからなあ……。凄い無愛想だよ。

「篠ちゃんのデータはあらかじめ入れていてるから後は更新データだけだね。篠ちゃんの好きな近接戦闘を基に万能型にしてるIISだからすぐに馴染むと思うよ！」

「それは、どうも」

うわ～、なんか気まずい雰囲気だあ。この二人の間にはとてつもない亀裂がある。本当は仲のいい姉妹だったかもしれないのに……。どうしてこんな……。

「 光輝くん……それでも人は分かりあるぞ。絶対に」

「 アムロさん……」

僕の考えが伝わったのか、暗い夜に引きずりこまれそうなどころをアムロさんに助けられた。そうさ、人は分かりある！

「まあ後は自動処理に任せればいいかな。でいいくん」「一くん！」

「一人のIISを見せて。束さんは興味深々なのだよ」

「わ、分かりました」

「え、あ。はい」

僕と夏兄はE.Sを展開させる。白式と ガンダム こう並んでみると白が目立つなあとが思つたりする。束さんは宙にディスプレイを出し、白式と ガンダムのデータを見ている。

「ほほ～、見たこともないデータだね。一人が男の子だからかな？」
「束さん、俺達がE.Sを使える要因ってなんですか？」

夏兄が拝見中の束さんに尋ねる。確かにそれはそうだ。僕の場合は僕の特別な脳波が反応したって言つてたけど、夏兄の場合はどうなんだろう？

「それがわからないんだよね～。謎なのだよっ！ でもE.Sを装着したいっくんも中々だね
「ど、どうも……」

「照れるいつくんもいいねえ。さて

「お、織斑先生！」

そう言つて駆けてくるのは山田先生だ。すごい慌てているがなにかあつたのだろうか？ 山田先生がお母さんの耳元で話していると、お母さんの顔色が変わった！ な、なにがあつたのー？

「山田先生は生徒達に至急、旅館で待機させるように指示を。専用機持ちは私に着いてこい！ もちろん、篠ノ之もだ」

「は、はい！」

なにか大きな事件でも起つたのだろうか？ だとすれば一体……！？

「では現状を説明する」

旅館の奥にある宴会用の部屋に専用機持ちとお母さん、山田先生が集合している。照明を落とされた薄暗い室内に、大型のディスプレイが浮かんでいる。

「一時間前、試験稼働していた、アメリカ・イスラエル共同開発の第三世代軍用IIS「銀の福音」シルバリオ・ゴスペルが制御下を離れ暴走。衛星による結果、福音は此処から2キロ先の空域を通過することが分かった。時間にして2時間後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態を対処することになった」

まさかの事態に全員、驚きを隠せない。まさかIISが暴走するとは……。それほどの性能を持つたIISと考えられるね。なにかいわ作戦はないものか。

「教員は訓練機を使って周囲の海域を封鎖している。故に本作戦の要は専用機持ちに担当してもらつ」

「当然と言えば当然か。封鎖しないと被害が広がるだけだ。さて、どうする?」

「それでは作戦会議に入る。なにかいわ作戦がある者は挙手を」「はい」

僕はすかさず手を上げた。

「福音の詳細な性能を知りたいのですが」

「分かつた。ただし、これらは一力国の際重要軍事機密だ。情報が漏れた場合、裁判にかけられるか、最低一年の監視がつけられる」

「分かりました」

開示されたデータを全員で見る。それを元に的確な作戦を立てよう。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしや光輝さんのIISと同じオールレンジ攻撃が出来ますわね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。やっかいだわ。しかもスペック上ではあたしの甲龍を上回っているから相手の方が有利……」

「この特殊装備っていうのが曲者な感じだね。リヴァイヴ専用の防御パッケージでも連続での防御は難しい気がする」

「しかもこのデータでは格闘能力が未知数だ。偵察は行えないのですか?」

セシリ亞さん、鈴さん、シャルロットさん、ラウラさんの四人は真剣に意見を出し合っているが、篝さん、夏兄、エリスさんは追いつけてない様子だ。かく言う僕も、ギリギリ追いついている感じだ。

「無理だな。このIISは現在も超音速移動している。最高速度は時速、一四五〇キロを超えるとある。一回のアプローチが限界だ」

「一回きりのチャンス。ここは一撃必殺の威力を持つ機体で当たるしかありませんね」

山田先生の言葉に全員が夏兄の方へ向く。確かにここは夏兄の出番だよね。

「え……？」

「一夏、あなたの零落白天で落とすのよ」

「それしかありませんわね……問題はありますか」

「お、俺がいくのか？」

「「「「当然！」」」

わお。四人の声が重なった。

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟が無いなら無理強いはしない」

確かにこれは命にかかることだ。無理をして欲しくない……。
夏兄、どうするの？

「やります。俺が、やってみせます」

「よしそれでは」

「すまない。僕と光輝くんは別行動をとらせてもらひ

そういうたのはアムロさんだ。一気に全員がこちらを見る。なん
でまた別 つ！この感覚は！ まさか！？

「なぜですか？ なにか問題でもありましたか？」

「そうじゃないさ。奴が近付いてる」

「お、織斑先生！ 赤い何かがこちらに近づいてきます！」

「なに！？」

モニターを切り替え、ここから三キロ先、福音が通過するポイントの真反対からあの深紅に染まった赤いISが近付いてきている。

前の時より、全長が低くなつた感じだ。体勢も前傾姿勢で、肩と腰

のアーマー、脚部が巨大化している。前に見た時より人型というイメージが無くなっている。

見た目はあの時より違うがこの感覚は忘れないんだよ。間違いない。

「ああ間違いない。このプレッシャー、赤い彗星 シャア・アズナブルと呼ばれる男だ」

その言葉に、あの事件を知る人は全員、息を飲んだ……。

第一十一話／銀の暴走と赤き残光／（後書き）

また現れましたシャア。機体はナイチンゲール……なのですが表現出来てますかね？

第一十一話／決戦準備（前書き）

今日は出撃前ですが説明文がほとんどですかね……。

第一十一話／決戦準備

作戦会議は決まった。銀の福音シルバリオ・ゴスペルは夏兄と篠さんが撃墜するようにな
った。

あの後、乱入してきた束さんのアドヴァイスにより超音速移動し
ている福音を運ぶ役を篠さんに決ましたのだ。

赤椿はどうやら第四世代のISだと言う。本国でやつと第三世代
が出来たというのに、束さんの技術はすごい。さすが、ISの産み
の親といふべきなのでしょうか。

ISの各世代の概要はこうだ。

第一世代がISの完成。第二世代は、後付け武装による多様化。
そして第三世代は、操縦者のイメージ・インターフェイスを利用し
た特殊兵器の実装。例えば、ブルーティアーズのBT兵器、シュヴ
アルツェア・レーゲンのAICかな。

赤椿の第四世代は、パッケージ換装を必要としない万能型。これ
は白式の雪片式型にも仕様されているとか……。それを考えたら白
式も第四世代のISになる。各国がやつと第三世代を開発したのに
も関わらず、目の前に居る天才科学者、篠ノ之束さんは第四世代を
作り上げてしまった。

アムロさんは曰く「赤椿は戦いの火種を生む」と言っていたが、確
かにそうなりかねない……。第三世代の競争が無意味なものになっ
てしまうのだから。赤椿の存在を知った国々は即赤椿を渡すように
要求してくるだろう。それが火種に発展するってことだね。

話を戻しましょう。つまり赤椿は攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替えが可能。束さんが機動性を重視するように調整すれば福音の近くまで連れていけるということだ。

作戦開始まで残り一時間。篠さんは赤椿の肩慣らし中である。それにしても今の篠さんは心配だ。力を手に入れたからか凄く浮わついてるし、心配でならない。

「束さん、あとどれくらい掛かります?」
「そうだねえ……三十分钟左右かな 大丈夫だよ。必ず終わらすからね」

部屋に残っているのは僕、エリスさん、お母さん、束さんの四人だ。他の人は夏兄と篠さんの準備を手伝っている。

赤い彗星の相手は僕とアムロさんになつた。アムロさんもあの機体は初めて見るらしいけどサザビーの発展型っぽいという。確かにサザビーの面影があるからそうなのかも。束さんの意見としてはもしかしたら一次移行したISかもしれないとな。

〔セカンド・シフト〕
「一次移行したISってどのくらい戦闘能力が上がるんですか?」「ん、分かんない でも今の ガンダムじゃ勝てないんじゃないかな。だからこうやつて全体的な性能を上げてるのさ さあ、あと少し!」

というわけで今の ガンダムでは勝てないということで、束さんに ガンダムの性能を上げもらつている。上がつた分、身体の負担も上がるということだけど、今は仕方ない。

それにしてもさつきからエリスさんの表情が優れないようだけど、大丈夫だろうか？

「エリスさん？ サつきから顔色が悪いけど大丈夫？」
「だ、大丈夫。ただ……さつきから嫌な予感がするんだよ。はつきりとは分からぬけど……」

そう言つてまたエリスさんはまた俯いてしまつた。すぐにも泣いてしまいそうな顔だ。しかしここまで暗いエリスさんを見るのは初めてだ。彼女は今、何を感じてゐるのだろうか？

「大丈夫だよ、エリスさん。そんな予感があつても必ずそれが起きるわけじゃない。もしかしたらいい予感かもしれない！ そんな顔は似合わないよ。いつもの元気なエリスさんが一番いいよ！」

僕の言葉を聞いた瞬間、ゆっくりと顔をあげる。耳まで赤く僕と目を合わせてくれない。僕は変なことでも言つたのか？

「光輝くん……そう言つてくれて嬉しいんだけどね……そういうことは二人っきりの時に言つて欲しかったな……」「え？」「ごめん……」「こーくんも鈍感だねえ。もつと乙女心を勉強しないと生き、聞いてるこっちが恥ずかしいです……」「全く。光輝、場所をわきまえる。お前はそう言つう意味で言つたんじゃないかもしれないが聞いてるこっちが勘違いしそうだ」

え？ 僕はみんなからそんなことを言われるようなことを言つた！？ みんなの目を見ると、呆れたり、照れたり、笑つてたり、一体何なんだあー！

「よし、行くよアムロさん」

そう言つと僕の身体を縁の光が取り巻き、やがて消える。外見は変わったことはないけど、センサーで性能を見てみると前より50%ぐら^イい上がつてゐる。けつこうなパワーアップだね。

作戦開始まで二分前。僕、夏兄、篠さんは海岸に出でていた。ガソダムの強化も無事に終わつた。後で束さんにお礼をしないと。

三人ともE-Sを装着しており、いつでも出撃できる体勢だ。

「三人とも、これは実践だ。命の危険とも隣合わせだといふことを忘れるな」

センサーからお母さんの声が聞こえる。心配してくれているのか声が少し震えている。

「よし、篠、光輝。絶対この作戦、お互い成功させるぜ!..」

「うん! 一人も氣をつけてね!」

「分かっている! 私と一夏なら大丈夫だ!」

二人とも気合十分だね。

「……だが、篠さんが浮ついているな。千冬なら注意をせると思つが……」

確かに篠さんは、力をでにいれたからか凄く浮ついてる。なにか失敗するかもしれない……。でも大丈夫! 篠さんなら力の意味が

分かつてるしね。

「それでは……作戦開始！」

お母さんの掛け声と共に僕たち三人は、反対同士の場所へ向かつた。

会議室で見守るメンバーだが、エリスはずつと不安を抱えたままだった。

（絶対、絶対生きて帰ってきてね光輝くんっ！）

手を組んで必死に祈ることしか今のエリスには出来ることがなかつた。それが光輝に届くと信じて……

第一十一話／決戦準備（後書き）

次からは光輝アムロ・VSシャアです！
此処は気合をいつも以上にいれて書いていこうと思います！

第一二三話／光、消え去り……（前書き）

ダメだあー。戦闘描写が難しい……。

第一二三話／光、消え去り……

相手はどうやら止まつて」あらが来るのを待つてゐるようだ。近づけば近づくほど強くなるプレッシャー。でもやられるわけにはいかない！

海上を飛んで探しているとほどなく見つけた。血のように赤く染まつた機体で、全体的に重そうなイメージがあるけど意外なほど早いんだろうね。この効果はサイコフレームというMS用の構造部材のおかげらしい。

機体の基本性能を飛躍的に上げる物で、未知の部分が多いが「人の思稚を受信させる」ということだけはアムロさんの体験で分かつたと言つていた。

MSN-04? ナイチンゲールと判定。サザビーが一次移行したもので、武装はサザビーと変わりませんがスカートアーマー内には隠し腕があり、接近戦闘能力が上昇しています。どの武装も出力が上がり、危険度は増しています。また見た目に関わらず機動性、運動性も高いです。

「来たか……。久しぶりだな、アムロ。それに織斑光輝」「シャア……！」

ハイパーセンサーの解説を見ているとナイチンゲール シャア・アズナブルが話しかけてきた。彼から感じるのは今までに感じたことのないプレッシャーだがその中に、悲しみと狂気がある。一体なにが彼を襲つたのだろうか……。

「シャア、もう俺達が争う意味もないはずだ！　なのになぜ！？」
「アムロ、私はもう人を信じれない……。あの光を見ても人は変わらなかつた！　変わらうとしなかつた！　もう人の可能性などもういらぬ！」

「そんなことはない！　人は変わつていける！　この世界に来てよく分かつたんだ。誰かがそのきっかけを作れば変わると……！」
「だが、この世界でもI.Sという存在が人の可能性を潰している。それでもまだ信じるとうのか！？」

人は変わらなかつた……。アムロさん達の世界では絶え間なく人が争い続けている。僕達の世界だってI.Sという存在が火種になつてそうなる可能性もあり得なくはない……。

「だけど、それでも僕は人を信じます！　貴方やアムロさんの世界がどんなものだつたか詳しくは知りません。でも絶望の中、人の暖かみがどれほどの勇気を与えてくれるか、どれほどの優しさを与えてくれるか！　それがあれば人は人を信じることができる、分かり合えることが出来ます！」

僕はそれに救われた。だから今の僕がいるんだ。

「確かに君のその純粋な気持ちが人を変えていくんだろうな。しかし、もう人はそれにすら気付かなくなつていてる！」

「そんなことはないです！　少しずつ、少しずつその輪を広げなければ必ず成し遂げれます！」

「……いいだろう。その覚悟見せてもらう。いいな？」

「光輝君！」

「分かつてます！　彼に人の心の光を見せてみせます！」

「いぐぞ、この世界のユータイプ！　君の覚悟を見せてもらう…」

僕とシャアさんはビームサーベルを抜き、互いに接近して銃迫り合いになる。二次移行しただけの事はあって相手の出力の方が上だ！

っ！

危険を感じると同時にスカートアーマーからの隠し腕ビームサーベルで攻撃したところを離れて避ける。それを読んでか、ビームシヨットライフルで狙ってくる。

それを身体全体で避けながらビームライフルで応戦する。相手は拡散と収束を織り交ぜていて、避けるのが難しいがなんとかなる！

「ファンネル！」
「行つて！ フインファンネル！」

同時にファンネルを開いたが相手のファンネルは10基。こちらは6基。数では不利だけど、必ず……！

ここで一気に攻めよう！ 僕はビームライフルとビームキャノンで牽制しつつ接近して一気に勝負を決めようとする。相手はそれを読んだのか僕の射撃を避けながら接近してくる。どれも最低限の動きで避け、隙がない。

接近するたびにビームサーベルとビームトマホークの光が交錯し、ファンネルの撃墜したりされたりしている。交錯する度に互いのエネルギーを削り合つ。そして再び、銃迫り合いになる。ビームトマホークの出力が高過ぎてすぐに弾かれ、お腹を蹴られぶつ飛んでしまつ。

「つ、強い……。」いつも性能をあげたのに、二次移行したISは

「ここまで性能があがるのか……」「

「それだけじゃない。前よりもシャアの反応が良くなっている。長期戦は不利になるぞ」

「そうですね……。だつたらサイコバーストを使います。これなんとかなるかもしません」

「だが君の精神を蝕むんだぞ？ 僕にも原因が分からぬから対処のしようがない」

「大丈夫ですよ。どのみちこじドシャアさんを止めないといけないんです！」

「……分かつた。だが無理はするな！」

「はい！ 行くぞ、サイコバースト！」

その言葉に反応して身体から緑の光　人の心の光が溢れ出す。残されたファンネルは2基。これならっ！

フィンファンネルを本体だけに集中させ、ビームライフルでナイチンゲールのファンネルを落としていく。

「ファンネルが落とされたか……。やるなっ」

サイコバースト状態のフィンファンネルを避け続けるの…？ なんて運動性なんだよ！

瞬間加速で一気に近付き、後ろから切りかかる。当たった！ と思つたが攻撃していくフィンファンネルが破壊され、紙一重で回避され、サーベルを持つている右腕を掴まれた。

「その状態の性能はさすがの私も反応ができるかできないぐらいのものだが、まだまだだな」

よく見るとナイチングールの周りから黒いオーラが見える……。
これは……人の意志か？ 気持ち悪い……。

「気づいたようだな。これは私達の世界の戦いの中で死んだ者の意志だ。憎悪を感じるのだろう？ 所詮、人間はそんなものだ」

恨み、妬み、憎悪が渦巻いて叫んでいる。それを力にしているのか！？ こんなに気持ち悪い感覚は初めてだ……。その負の意志が僕の中に入り込んできた。

「うあああっ！ いやだあ！ 怖い、やめて……もうやめてええー！」

僕は隠し腕で何回も殴られながら、その感覚に囚われそうだった。底の見えない闇を歩いていくような感じで、考えるのがビックリでもよくなつてくる。

「光輝君！ しつかりしろ！」

アムロさんの声が遠のしていく。もう……どうでもいいや。このまま楽になりたいよ。このままどんどん闇に落ちていくけど気にしない。どうせ心の光を見せるなんて無理な話なんだ。

最後に見たナイチングールはモノアイが妖しく光っていて そこで意識は途絶えた。

第一二三話／光、消え去り……（後書き）

なんかもう……むちゅくちゃだwww

心の光に對して心の闇、見たいな感じにしてみたんですが……う
ん、どうなんだろう?

第一十四話／気づけた大切な事と覚悟の戦い（前書き）

けつこう強引な所もありますが、どうぞうるかは任せます。

第一十四話／気づけた大切な事と覚悟の戦い

旅館の一室、私は光輝くんの看病をしている。戦闘中に意識を失った光輝くんを連れて帰つて一時間。今は旅館で寝ているけどいつ起きるか分からぬ。

一夏くんと篝の作戦も失敗に終わった。一夏くんは背中にもひどい火傷を負つたし、IS自体もかなりのダメージで修復中。篝は一夏くんの寝ている部屋でずっと正座していた。精神的にダメージが多いのかやつれていった。

「H里斯さん、ありがとう。そのまま海に落ちていたら光輝君は死んでいた……」

「私は嫌な予感がしていただけです。見事に当たつてしまつたけど……でも助けることが出来て嬉しいです」

モニターで赤い彗星との戦闘を見ていた私達は、奮闘する光輝くんを静かに応援しながら見ていて、光輝くんがサイコバーストを発動した時に嫌な感じがしたんだ。私は急いでISを起動させて駆けつけた。

着いた時には光輝くんが宙から落下していく、瞬間加速で助けることが出来た。あのISはモノアイでずっとこちらを睨みつけ、こう言った。

「彼はもう戦えない。私の気の変わらない内に逃げるんだな」

光輝くんの仇打ちをしようとしたけど、圧倒的な実力差を感じてそのまま逃げだしてしまつた……。

「アムロさん、光輝くんはなんで氣を失っていたんです？」

「赤い彗星 シャアを取り巻く人の心の闇を直接喰らつたんだ。恨みや憎悪を受けた光輝くんは精神的にかなりのダメージを受けたんだ。ただでさえ、純粹な少年だからその傷は計り知れない……」

「そんな……」

「うあああああっ！」

寝てる光輝くんがうなされてる。大きな声だつたので少しふりにぎりしてしまつた。

「大丈夫、光輝くん！？」

「怖いっ。光が消えてく……！ 誰もいない……孤独はもう嫌なんだ！」

そう叫んで泣いている……。

「大丈夫だよ！ 私やアムロさん、みんながここには居るんだから！ 光輝くんは一人じゃないよ！」

「誰か……たす……けてよ」

そう言つて光輝くんは糸の切れたマリオネットのように静かになつた。誰の声も届かなくなるまで君の心は傷ついてしまつたの？ 私には何もできないの……？

「……みんなを集めてくれないか？」

「え？ でも今は篠がショックで来るかどうか……」

「なら先に篠さんの所に行こう。すまないが僕を連れててくれ」

私は ガンダムの待機状態であるT字の首飾りを首に架け、部屋

を後にして。光輝くんが心配だけ今は……。それにしてもアムロさんは一体何をするつもりなんだる？

山田先生に光輝くんの看病を頼んで、私達は一夏くんの部屋に来ていました。篠はまだ俯いたままで見ている。「ちが辛かつた。

「君の失敗は何だと思つ？」

「…………」

篠は黙つたままだ。篠のことだから本当は分かつてゐるんだと思つ。

「力を手に入れたから嬉しいのは分かる。君は一夏君の隣で戦いたかったのだろう？」

「……貴方に何が分かるつ！ 私は！ 私は……！」

その叫びには憤りと悲しみを感じる……。篠はどんな思いで一夏くんの隣に屈たかったのだろう？

「……私はもう、エリを使いません。もうこれ以上は……！」

アムロさんの怒声が飛び、いつも優しい口調なだけにちょっとビックリした。

「自分の可能性を潰すんじゃない。君なら分かるはずだ。力の意味を、それでどうするのかを」

「私の、するべき」と……私は戦つ。今度こそ福音を墮とす……。

「それでいい。君達の歳でふさぎむのはよくなきからな……」

優しい、包み込むような優しさがアムロさんにはある。それは一番の力、人と人を繋いでいく思いなのかな？

「全く、やつとその気になつたわね」

振り返ればそこには専用機持ち全員がいた。誰しもが篝の復活を待ち望んでいた。仲間がいればどんな困難も乗り越えることが出来る。それの絆はなのものよりも強く、堅い。

「ちょうど良かった。みんな、光輝君を助けるのを手伝ってほしい。あの子に心の光で、命の輝きで助ける」

僕は暗闇に居た。何も見えない。聞こえない。感じない。いくら歩いても何処にも着かなくて、怖くなつた僕はそこに座りこんだ。

『うああああつ！』

『こんな所で死にたくない！』

また聞こえてくる。人の死ぬ間際の叫び声。無理やり戦いに出されて、そして命を散らす。心の光が消えていく……。死んでしまえば光は消え、永遠の闇に囚われる。

「人は争うことしかできない。そうすることでしか分かり合えないのが人なの？　じゃあ僕のやっていることは全部無駄なのー？」

争うことが前提でしか分かり合えない？　でもそうやっても必ず分かりあえるとでも言うの？　じゃあどうすれば……。

「確かに人はそうしないと分かり合えないのかもしれない。でも、諦めてしまつたらそこで終わる」

声をかけられ顔を上げると前から人が近づいてくる。この闇の中で不自然な程の輝きをだしている。年齢は二十歳後半だろうか？初対面のはずなのに、なぜか安心できる。この人は一体？

「この姿で話すのは初めてだね。君を助けに来たんだ」

「その声、アムロ……さん？ どうしてここに？」

「君を助けたい人達がいるから。だから君のところに来た。さあここで立ち止まつては何もできないよ」

「……もう僕には光なんてありません。あるのは悲しみや妬み、憎悪なんかの闇の部分だけです。光なんてすぐに消えてしまうものなんですね……」

「光は絶対に消えないんだよ。今は眠っているだけで君の光は消えていない」

「……」

「人の心に闇はある。でもそれを拒絶しちゃいけない。それを受け入れた時、初めて人の心の光を見せることができる」

受け入れる？ この苦しみを……？ でも、

「怖いんです。それを受け入れた時に僕が僕で無くなってしまいそうで……」

「大丈夫。少しずつでいいから一歩ずつ前に進めばいいんだ。焦る」とはないよ

「一歩ずつ……一歩ずつ前に……」

僕は立ち上がり一歩進む。この一歩が早いとか遅いとか関係は

無い。」の「歩を出せる」と意味があるんだ。

「一步出せたことの勇気が人を更に強くする。光を強くする。それに君はみんなが居るじゃないか」

「みんな……！」声が聞こえる。僕を呼ぶ声が！　こんな暗闇でも僕は一人じゃない！」

僕は今まで人に助けられてきた。僕はその人達に光を見せたい！　それが僕にできることだから！

「それでいいんだ。そうやつて強くなるんだ！　さあみんなが待つてる。行こう！」

僕はアムロさんの声に僕は走る。僕は憎しみや悲しみを拒否しない。確かに激し過ぎる負はいけないけど、でもそれも人の心の一部なんだ！　だから僕が光を見せて勇気を……！

「ん、うう
「やつと起きたか」

この声はお母さんか。身体を起こうとするけど、身体が痛いのなんのつて……。ガンダムの負担なのかな、これは……。なんとか起き上がれたけど、ここまで至るのに身体中が悲鳴を……。

「織斑先生、此処に居て大丈夫なんですか？　それに作戦は？」
「慌てるな。順を追つて話す」

僕はあの後の事をさらつと聞いた。夏兄は意識不明の重体で危な

かつたがなんとか持ち直して今は大丈夫そうだ。

「じゃあ福音は今も待機中なんですか？」

「ああ。そのまま逃げてしまうかと思ったが、ずっと待機している。たぶん、自己修復だろうな。それに赤いIS ナイチンゲールはこの空域から離脱した」

「でもまた来ますよ、彼は。その時はまた僕が抑えます」「だが」

その時、襖を慌ただしく開けられる。来訪者は山田先生だが一体どうしたんですか？

「お、織斑先生！ 専用機持ちのみんなが無断で福音の撃墜に…」

「なんだと！ なぜ止めなかつた！」

「私には全員は止められませんよ～……」

涙目になる山田先生。確かに専用機6人を教員一人で止めるのは無理な話だ。でもなんでそんな無謀な……！

「山田先生、すぐに作戦室に戻ってくれ。私もすぐに行く…」

「は、はい！」

「さて、織斑弟。立てるか？」

「だ、大丈夫です……」

痛みを堪えてなんとか立つが、歩こうとするとき身体中に激痛が走る。

「くうう、痛い……」

「全く……世話の掛かる奴だ」

そう言つと、お母さんは僕をおんぶしてくれた。かなり恥ずかしいけど、懐かしい気がする。なんでだろ？

「お前をじつしたのは、あの時以来だがやつぱり成長してるな」「あの時って？」

「お前が倒れているのを私の部屋まで運んだ時のことだ。覚えてないか？」

「……覚えてないです……」

「それはそうか。気絶してたからな」

そんな会話をしながら僕達は作戦室に着いた。モニターの正面に来るようにお母さんは僕を背中から降ろしてくれた。もひちゅうつとだけ、あの暖かい背中にいたかったな……。

「千冬、あの子たちを止めないのか？」

「……止めたくても止められませんよ。今はあいつら任せましょう」

福音に対しても人。それでも互角に戦う福音は異常な戦闘能力だ。ナイチンゲールも福音も多人数との戦闘が得意か？

「あれ？ ZZガンダムの姿が変わってる気が……それだけじゃない！ あのでかいライフルはなに！？」

ZZガンダムの上半身にアーマーを加えて、更にはZZの全長を少し超えそうなぐらいの長砲のライフルが装備してある。ヒリスさんはみんなより後ろに下がつて援護している形だけど、あの装備だったら当然か。

「あれはフルアーマーZZ。束がリムスカヤの為に創ったZZ専用の強化パックだ」

束さんが？ 珍しいな……あの他人嫌いの束さんがエリスさんの為に創つたなんて。

「理由は分からんが、あいつにしては珍しい。アーマーを装備したことによって、火力も機動も防御も上がったが、細かい動きが難しく接近が不利なるらしい」

「いい強化じゃないか。エリスさんは射撃の方が得意そうだから良かったんじゃないかな」「確かにそうかもしませんが……で、あの長いライフルは？」

「ハイパー・メガカノンという名前で、乙乙のハイメガキヤノンより威力は何倍も高いが、一発だけしか撃てないからな。チャンスを見ているのだろう」

……火力が上がり過ぎでしょ！？ まさに動く武器庫じゃないか！ しかし、こう見ているだけだなんて、僕は耐えれない！

なんとか立とうとするが激痛が僕を襲う。でも行かなきや……僕は暗闇の中、みんなに助けられた。だから今度は僕がみんなを助けていく！

「光輝くん、行つてはダメだ」

「つ！ どうしてです！？」

僕のだした声に教員二人が振り向く。

「あの子たちはあの子たちの戦いをしている。それを邪魔してはいけない」

「でも、だからって……！」

「ちゃんと見届けるんだ。彼女たちの戦いを……覚悟を！」

「覚悟……分かりました。悔しいけど今はみんなが勝てるように祈ります……」

福音は強い。でもみんななら大丈夫！だから絶対生きて帰つて来て！

僕は必死に祈った。今はこれしか出来ることがないけど、この祈りが届くようにならん！」

第一十四話／気づけた大切な事と覚悟の戦い（後書き）

アンケートの件ですが、今のところ2件あります。期限はまだまだなのでご協力お願いします。

アドバイスや苦情も隨時受け付けてますんでなにかあればお願いします。

第一十五話／覚醒への疑惑（前書き）

パソコンの調子も元に戻り更新できました。
アンケートはまだまだ行つのでよろしくお願いします！

第一一十五話／覚醒への戸惑い

「セーヒー。」

私は福音に向けて肩部ミサイルランチャーを発射させた。しかし、回避されつつこちらに接近してくる。左手でハイパー・ビームサーベルを引き抜いて応戦する。脚とサーベルの鍔迫り合になるけど、出力はこっちの方が高く、弾きかえすことができた。

「任せろー。」

そこに篝がやって来て、赤椿専用武器 雨月と空裂あまつき からわれの二つの刀

で押していく。

福音自体は天使見たいな感じでその名の通り銀色だけど、性能は馬鹿みたいに高いんだよ！ 反応がいいのか回避運動が尋常じやない。遠距離攻撃なんかほとんど当たらぬんだもん。

「篝、どうでー。」

その声に篝は福音から離れ、私はサーベルで片方の羽に切りかかる。それも後ろに宙返りしながら回避されとび蹴りを喰らう。

「！」

「甘いね。このアーマーの防御力と重きならへつちやありやー。これなら」

喰らつたけど吹っ飛ばなかつたよ。戸惑いで一瞬の反応が遅れたのを見逃さず、再び翼に切りかかる。見事、左の翼を切り落とせた

けど一気に距離を取られてしまつ。

「エリスさん！ 大丈夫ですかー？」

「大丈夫！ この調子でもう片方も無くせば墜ちるー。」

福音の翼は推進の役割だから速度も落ちるはずだけど、そんな素振りを全く見せず複数の弾幕を回避していく。

「でやああああつー！」

鈴が拡散衝撃砲を撃ちながら福音に接近していく。福音も片翼の砲門を開いて光弾を発射する。シルバー・ベル銀の鐘の弾幕を受けながらも双天牙月の斬撃を止めない。

「こいつー……ぐつー！」

斬撃が福音に命中するが、福音も回し蹴りを叩きこむ。脚部スラスターで加速されたそれは鈴の腕部アーマーを一撃で破壊して、海上に墜とした。

「鈴つー！ よくも鈴をー！」

NNの追加アーマーをバージし、サーベルを抜いて瞬間加速で一気に接近する。

「片翼もらつたよー！」

直線的な斬撃だったからか、ひらりと回避されてしまい後ろからとび蹴りを喰らつた。海に落下せずなんとか姿勢を戻すことが出来たが、すぐに銀の鐘による光弾が迫っていた。

「こんなことだつたらページするんじゃなかつた！」

両腕のバインダーで防御しつつ後悔していた。撃ち続いている福音に籌が切りかかろうとする。

撃ち続けていたせいか反応が遅れた福音の右肩へと刃が食い込んだ。

しかし福音は左右の刃を手のひらで握りしめた。刀からのエネルギーでダメージを受けるはずなのに福音は気にしていない。そのままで福音は両腕を最大にまで広げる。

「くっ、しまった！」

刀に引っ張れ筹も両腕を広げて無防備な状態になってしまふ。あの状態じゃライフルも撃てない……！

福音はもう片方の翼の砲門を開放している。

「筹！ 武器を捨てて離脱しろ！」

翼から光が溢れる。それは一斉に放たれる。

「私はもう 負けない！」

エネルギー弾が触れる直前に、ぐるんと赤椿は一回転する。その瞬間、爪先の展開装甲からエネルギー刃を発生させ、かかと落としのような格好で翼に斬撃が決まる。

両方の翼を失った福音は崩れるように海に墜ちていった。

「はあ、はあ、はあ……」

「大丈夫か！？」

慌てているラウラの声は聞きながら、篝は呼吸を落ち着かせていく。

「私は大丈夫だ。福音は？」

「墜ちたぞ。私たちの勝ちだ」

つ！ この感覚は！？

「まだ終わってない！ みんな離れて！ ハイパー・メガカノンを使うから！」

嫌な予感がした。あの時みたいな感覚が！ 私はすぐに全員に離れるように言って、福音が墜ちていった海面へハイパー・メガカノンを放つ。

凄まじい音を出しながら極太ビームが海面へと伸びていくが、海面から突如現れた青い円型のシールドによって遮断せれてしまった。徐々に空に上がつて来て、その中心には福音がいた。

「まずい！ あれは二次移行だ！」

そうラウラが叫ぶ中、福音はビーム状の翼を生やした。顔全体を覆っているバイザーからは操縦者の表情が見えないけど、私には死の天使にしかみえない。それにしてもハイパー・メガカノンに耐えるなんて……！

『キアアアアアアア……』

まるで獣の咆哮を発しながら、福音がラウラに飛びかかる。

「なつーーーの速さはーーー！」

とてもなく速いスピードで反応が出来なかつたラウラは脚を掴まれる。

「ラウラを離せえつー！」

近接ブレードを装備してラウラを助けよつとするシャルロットだけ

「ダメだシャルロットーーー近付いちやいけないつー！」

そう叫んだけど遅かつた。シャルロットは超加速された福音の蹴りで海面に墜ち、ラウラは近距離での銀の鐘を受けて墜ちていく。

「な、なんですかーーー？ 軍用とつても、異常な…………」

セシリアは射撃でダメージを与えるとするが福音に接近されしかも福音は両手両足の4か所の瞬間加速で爆発的な加速だつた。いく。もう私は怖くて動くことが出来なかつた…………。

「どうしたエリス！？ 一人で福音を墜とすぞー！」
「ダ、ダメ！ 性能が違う過ぎるよ！ これじゃあ勝てるわけない

よ……」「

「何を言つてゐるんだ！ しつかりしろー！」

「ダメだつたら！ こままだとみんな殺されちやうよー！」

「……つ。 私だけでも戦つ！」

そう言つて篝は急加速で接近して福音と格闘戦を始めた。ギリギリの攻撃と回避を繰り返していく。徐々に出力を上げていく赤椿に福音は押され始めている。

「す、凄い。第四世代はここまでやれるの？ 一次移行したエスと互角以上に……」

だが突然、赤椿のエネルギー刃が消える。まさか……エネルギー切れ！？

「こんな時に！ ぐあつ！」

福音はその隙を見逃さずに、翼から光弾を連続で放つ。

「エ、リスト……」

そう言つて篝は海面に墜ちていく。私が、私のせい……！ でも……怖い。今の福音には嫌な感じしかしないんだ。こんな感覚は今まで感じたことなかつたのに。

「でも、やるしかないのかな……」

福音は私の存在に気付き、頭上にエネルギー状の球体を作り出す。そこから極太のビームを発射させる。

私も慌てて額のハイメガキャノンを発射して押し合いになる。でも相手の方が出力が高いのか徐々に押され始めている。リミッター状態の100%じゃ駄目なの！？

私はそのまま相手のビームの直撃を受けてしまった。もしかしたら逃げたのかもしない。でもそうしたって無駄な程の差を感じてしまったのだから……私はここで死んじゃうのかな……。

墜ちていく中、そんなことを考え、そのまま意識を失った……。
最期ぐらい、光輝くんと話したかったな……。

「エリスさん！ エリスさん！」

戦場になつた海域より少し離れたで僕は氣絶しているエリスさんを起こしていた。福音が二次移行したあと、僕はすぐさま戦場へ駆けつけた。身体が痛いにも関わらず、僕はISを起動してエリスさんを助けた。

「ん、うう……光輝、くん？」

「エリスさん、良かつた！ 大丈夫！？」

良かつた……本当に良かつた！ しかし、座り込んでいるエリスさんの目がおかしい。いつものいきいきとしたエリスさんじゃない。僕もエリスさんの前に座つた時、エリスさんは言った。

「光輝くん、怖いよ。この嫌な感覚はなに？ 福音から凄いものを感じるんだ。口では表せないような、重いにかを……」

まさかエリスさんは……僕と同じものを感じている？確かに今福音からはナイチングールにも劣らない程のプレッシャーを感じる……！　エリスさんはプレッシャーのことを言つてゐると思つけど、なんを感じるようになつたんだ？

「今のエリスが感じているのは確かに君と同じものだ。その感じ方は間違いなくニユータイプそのものだ。一体なぜ？」

「ニユータイプって　この感覚は！？」

「これは夏兄だ！　その感覚の方へ向けば夏兄が福音と戦つている。けつこうな重症つて聞いたけどもう戦えるようになるまで回復したの！」

「これは何かを護ろうとする意志？　それにあの姿は……」

「白式が一次移行した姿か！」

ウイングスラスターが四つに増えて、左手には新しい武器があるようだけど……身体が持つのか？　あの怪我がすぐに治るわけがないのに……。夏兄に一体何があつたといつんだ！？

「エリスさん、ここで待つって。福音を止めに行つてくる。　でもこれだけは覚えてて。エリスさんは一人じゃないから……」

僕は立ち上がり夏兄の方へ向かつた。身体が痛さで悲鳴を上げているけど何とかなるはず！

「アムロさん、まだ戦えるよね？」

「ああ。だが君の身体が耐えれるかだ。ISには保護機能があるとはいゝ油断はできない。無理はするなよ？」

「大丈夫です。みんなでやれば必ず福音を止められます！」

「そうだな……絶対に止めよう!」

エリスさん、確かに今の福音は僕も怖いよ。でも一人じゃなくてみんなとなら乗り越えれるんだよ。だから見てて!

「行け、ファインファンネル!」

第一十五話／覚醒への戸惑い（後書き）

どうも上手く書けていませんね……うへん、難しい。
何かあれば感想のほうにお願いします。

第一十六話／新たな白と光の覚悟（前書き）

さて福音戦、決着です。

第一十六話／新たな白と光の覚悟

福音に対峙するのは一次移行し新装備『雪羅』を手にした一夏、第の一人だ。他はまだ回復に時間がかかるだろう。

「大丈夫か、第？」

「ああ、まだ大丈夫だ。早く福音を倒そう！」

第がこうも気合が入っているのは傷ついた一夏がこうしてやつて来てくれたこと、また共闘できるということだろう。しかし一回目の福音戦とは違い、浮かれているのではなくしっかりと意志が詰まっている。

『敵情報を更新。危険レベル最大』

その福音の機械音を機に一夏が零落白夜を片手で持ち、切りかかるが福音はのけぞつてひらりとかわす。しかし一夏は雪羅で追つた。

雪羅は操縦者の意志で攻撃、防御、機動の各タイプに切り替えることが出来る。まさに第四世代の武器と言える。一夏のイメージに応えるように左の指先から1m以上のエネルギー刃のクローアーが出現する。

「逃がさねえぜ！」

クローアーが福音の装甲に当たった。シールドエネルギーに阻まれたが確実にダメージは与えている。だが問題が一つ

福音はエネルギー状の翼を広げて光弾による集中掃射が始まった。

雪羅による防御を行おうとした一夏だが、

「そのまま動かないで！」

その叫びとともに一夏の前にビームバリアが展開されている。よくみるとそれはフィンファンネル3基による三角形型のバリアだつた。掃射が止まつたと同時に福音の真横から瞬間加速で近付くISが一機。

だが福音は読んでいたかのように高速で切り抜けしようとしたISの斬撃を回避し、距離と取つた。

「奇襲作戦のつもりが失敗か。それにしてもあの回避性能と反応速度は尋常じゃないな」

「そうですね……軍用だから元の性能も高いはずですし、しかも一
次移行したISとなると……化け物じゃないですか！」

そんな会話をしながら一夏達の方へ近づいてくるのは光輝だつた。IS自体のダメージは回復しているが身体のダメージが酷く、戦うのすら難しい状態だ。もうここまでくると精神的な問題なのだろうか。

「こ、光輝！？ 頭色が悪く見えるけど大丈夫なのか！？」

「だ、大丈夫！ それはそうと夏兄？ その新しい武器は零落白夜と同じエネルギーだよね？だからあんまり使い過ぎてたらすぐにエネルギー切れになっちゃうよ」

そう、雪羅を装備した白式は戦闘の幅は広がつたものの、そのエネルギーは零落白夜のものだ。ということはエネルギーの消費が前より上がつたということだ。ここが最大の弱点とも言える。

「お、おひ。氣をつけなこといけないな……」

「なんとか僕達がチャンスを作るからそこを狙つてくれればいいさ。

大丈夫かな光輝？

「大丈夫です！ 篠さんもいけるよね？」

「もちろんだ！」

アムロは簞のその声を聞き、ほっとしていった。

「第、今の君の田中凜としてこの。それを忘れないでよ。」

アムロにそんなことを言われて困惑したのか、つい声がうねりつつ

「さあ、三人とも福音を止めよつ! 力を合わせれば必ずできる!」

(一夏が駆けつけてくれた!)

それは暗い闇を照らす程の希望の光。

心が飛び跳ねて熱を持つ。それはもう嬉しいを超えていた。

そして戦う一夏を見て、何よりも強く願った。

（私は共に戦いたい！　あの背中を護りたい！）

強く、純粹にそう願つた。それは人を強くする意志であり、周りを照らす光となる。

その願いに応えるように赤椿の展開装甲から赤い光に交じつて、黄金の光が溢れてくる。。

「「」の光は一体……！」

ハイパー・センサーからの情報で赤椿のシールドエネルギーが急激に回復していく。

『絢爛舞踏』、発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構築完了。

それは単一仕様発動の文字「ワンオフ・アピリティ」だった。

（まだ戦えるのだな赤椿？　だつたら…）

力の使い方を今度こそ間違えないように　この力で！

（行くぞ赤椿！　あの兄弟を、一夏を護る！）

赤い光に黄金の光を纏つた赤椿は、全てを照らし闇を切り裂く一筋の光のように駆けていく。

「ぜりああああ！」

零落白夜の光刃が福音のエネルギー翼を断ち切るが、すぐに新し

い翼が生えてくる。片方の翼を切つても、もう片方の翼を切ること
が出来ず新しく構築されていく。その瞬間に光弾による無慈悲な射
撃が始まる。

「フィンファンネル！」

その度にフィンファンネルによるバリアで防いでいるが、零落白
夜を使つていてる以上、エネルギーの消費は避けられない。光輝も身
体の限界が近付いているのか射撃での援護が精一杯である。

「白式のエネルギーはあとどれくらい？」

「二十%を切つたところかな。三分が限界らしいけど、やるしかな
い……！」

「その気持ちで負けたら終わりだぞ！　諦めるな！」

追い詰められていく二人だが眼差しは未だに輝いている。と、そ
の時

「一夏！　光輝！」

「簫！？　ダメージは　」

「それはいい！　二人とも、これを受取れ！」

簫の　赤椿の手が二人の手に触れる。

その瞬間、一人に黄金の光が纏い、白式と　ガンダムのシールド
エネルギーが全回復した。

「エネルギーが回復？　簫さん、これって一体！？」

「今は考えるな！　行くぞ二人とも！」

「お、おう！」

「分かつたよ！」

身体が包まれるような感覚に戸惑う一人だが、再び戦闘に集中する。

「この感覺はなんだ？ 力がみなぎつてくるような感じだ。光輝、やれるな？」

「はい！ この感じならいけます。ファインファンネル！」

6基のファインファンネルを射出し、福音へと向ける。その動きは今までの動きとは段違いで、福音の放つ光弾を回避しながらビームを当てていく。福音は逃れようとするがファインファンネルはその速度を超えている。

「福音の動きが見える！ そこだつ！」

光輝はファインファンネルを収納すると、ハイパー・バズーカを全弾発射させる。光輝の予測射撃で弾道が全部、福音の回避位置に行き全弾命中する。ガンダムの中ではトップクラスの威力を立て続けに受けた福音は大きく仰け反る。そこを幕が追撃する。

「はあああああ！」

気合の入った掛け声と共に雨月と空裂で連続的に切りつける。その剣撃には憎しみなどが無く幕の信念を映したかのような綺麗さが見える。

「一夏、今だ！」

「今度こそ逃がさねええ！」

一 夏は雪羅から最大出力まで高めたクローキーを出現させながら、二
重瞬間加速^{ブル・イグニッショ}で接近し、その勢いで福音の腹部に突き刺す。さすがに
シールドに阻まれるがそのまま海岸の浜辺まで福音を押し倒す。

福音は最後の力を振り絞つて一夏の首元に手を伸ばすが 工ネ
ルギーが完全に切れ活動を停止した福音は、支えを無くなつた人形
のように、だらんと腕が落ちた。

「あ、危なかつたぜ……でもこれで、終わつたんだよな」

「夏兄！ やつたねつ！」

「一夏、無事か！？」

駆けつけた光輝と簫に笑顔を向けながら

「おう！ 苦労したけどなんとか終わつたぜ！」

三人とも今まで緊張していたせいか顔がほころび、笑顔になる。
これで一件落着 になるのかな？

「この感覚は！？ エリスさんの近くに……？」

「やはり来たか……。福音を倒したばかりだと『うの』に」

「光輝？ まさかまたなのか？」

「……うん。ごめん、二人とも。他のみんなの事を頼むよ。エリス
さんを助けて決着をつけてくるから」

「だったら俺たちも行く！ 複数なら、福音のように」

「ダメ。これは僕とアムロさんの問題だから。それにみんなを巻き
込みたくないんだ」

それが光輝の想い。ある意味、自己犠牲とでもいうか。

「だが」

「ダメって言つたらダメだよー。」

光輝の悲痛なる願い。せめてみんなを巻き込まないこと。自分の事なのに大切な人が傷つくのは嫌だ。それだけのことだが、光輝にとつては精一杯の願いなのだ。

「本当にごめんね。じゃあ……行つてくるー。」

一夏と篠に背を向け、光輝はエリスのいる方向へ向かつて行つた。夕日に照らされて見るその姿は、どこか寂しさを醸し出していた。

「いいのかい？」

「いいんです。みんなを巻き込んで傷つくのは見たくないません…

…

「君らしいな。でもなんでも一人で抑え込もうとしたらいーー」

「分かつてます……みんなにも感謝してます。でも、だからこそ僕自身が決着をつけないといけないって思うんですよ」

第一十六話／新たな白と光の覚悟（後書き）

次回はついに！　あれを出します！　分かりますかな！？

アンケートについて

パソコンの調子も上々で「いつか書いて書く」とができるようになります。した。

アンケートの件ですが整理しようと思います。

サブストーリーのアンケート

今のところ

「光輝の女装」と「アムロがこの世界に出てくる」と二つ一件です。

このアンケートの期限は今月の20日までとします。

宇宙世紀の中で出てきてほしいガンダムタイプの機体

これは

Z、ヨニアーン、F91、クロスボーンX-1、V2アサルトバ

スターです。

この期限はまだまだ先とします。決まり次第、お知らせいたします。

他の作品と比べるとアンケートが多いのですが、それでも力を貸していただけたら嬉しいです。アンケート、感想は随時受け付けていますので、どんどんお願ひします！

アンケートの全部を反映させることはできませんが、できるだけ要望に応えるように頑張ります。使おうと思つた意見はご本人にメールにて再確認をいたしますので。

第一一十七話　対話の果てに（前書き）

かりゆうと無理やつ……かもしだせん。

第一一十七話／対話の果てに

ずっと座り込んでいる私の目の前にはあの深紅のＩＳ　ナイチンゲールがいる。福音の感覚はなくなつたから倒したと思うけど、このＩＳからは叫び声が聞こえてくる。無理やり戦場にだされて亡くなつた人たち。忠誠を誓つた人の為に亡くなつた人たち。そんな命の光を無残にも散らしてしまつた人の叫びが頭に響いてくる。

怖い。死んだ人の、憎しみや妬み。人の心を闇に連れ込むほど深い深い闇。このＩＳはそれらを背負つて此処にいると思うと、さらに恐怖を感じてしまう。

「君のその感じ方、カミ　ユやクエスに　織斑光輝にも似ている。もう可能性など……！」
「光輝……くん？　可能性？」

とにかく逃げたいのに足が竦んで動けない。一体何を言つてゐるの……？

「君や光輝は純粹だ。だからこそ言う。一人で溜め込むな」
「そ、それってどういう　」「
「エリスさんっ！」

その声にハツとして振り向けば　ガンダムを纏つた光輝くんがこっちに向かつて来ていた。でもいつものような元気を感じられない。身体の限界がきていいるのか、それともなにがあつたのか？

「大丈夫、エリスさん？」

そう言いながら私の隣に降り立つた。

「私はいいの。問題は光輝なんだよ……」

「僕なら大丈夫。だから心配しないで。ね？」
「だ、ダメ！」

私は足が疎んだ状態で精一杯光輝くんの足にしがみ付いた。そんな状態でいつたらダメだよ……。

「私、感じるんだ。光輝くんが無理してるので……。ここから逃げよう？ 無理に戦う必要なんてないから……」

「そうだね。無理に戦う必要なんてないさ。僕は話に来たんだ」「え？」

戦うのではなく、話し合いに？ 相手はちゃんと応じてくれるの？

「話し合いか。そもそも心の闇を真っ向に受けて、よく立ち直れたものだ」

「それはみんなが助けてくれたからです。暗闇の中、光も届かない場所でいろんな人の叫びを聞いて、絶望して、死にそうだった僕の心に光が現れました。人は戦うことでしか分かり合えない。戦つたとしても確実に分かりあえると言う訳じゃない。だから僕は一度、光を拒絶しました」

私はしげみついていた足をゆっくり離した。やつぱり、闇は怖いものだよ。光輝くんですら屈服したんだから……。

「でも僕は光に助けられました。人の心の光、人の心の闇。この二つを受け入れること。そして……僕はみんなの声を聞きました。闇の中で受け入れることも拒んでいたけど、僕は一人じゃないって。

みんなが居てくれるつて分かつたから。それだけで嬉しかった。その想いが光も闇も受け入れるようになると。すぐには無理だけど、少しづづなら……」

光輝くんの声が震えている。自分はもう一人じゃないという嬉しさに泣いている。仲間してくれるからが強くなれる。闇をも受け入れることが出来る勇気をくれる。その声に私の胸が高鳴る。

「私も 私も勇気が欲しい。闇の部分も受け入れる勇気が……」「大丈夫だよ。人は生きてる限り一人じゃない。仲間がいればどんなものにも立ち向かえる勇気が湧いてくるよ」

アムロさんの言う通りだ。私にはクラスメイトのみんなや他の組の友達がいる！ 何より、好きな人が、光輝くんがいるから！

「私、頑張つて受け入れるよ。すぐにでは無理でも少しづつな……！」

「うん。それでこそエリスさんだね」

光輝くんは今までで一番の笑顔を見せてくれた。夕日の光がまるで光輝くんを優しく包み込んでいるようで、その姿は凄くカッコよかつた。

「それなら力ミ ノみたいになることはないか……。だが、光を見せて人は変わらないさ」

「シャア、貴方は急ぎ過ぎてるんだ。この一人のようにな少しづつその輪を広げていけば」

「いくら暖かみを感じても人は変わらない……それをわかるんだよ

！」

シャアの哀しみを光輝とエリスは感じていた。シャア自身、暖かみを感じて人を信じていたのに、人が変わることはなかつた……。

「そんなことない！」

「二人と一機から離れた所からそう叫ぶ声が一つと影が五つ。光輝エリスがその方向に向けば

「私はあの光の 暖かみのおかげで自分を見つけることが出来た！」

「あの光は凄く綺麗で、心が安らいだんだよ」

「光輝は悲しみも優しさも人の想いも分かつてる！」

「私に本当の強さを教えてくれた光輝さんはあなたなんかに負けませんわ！」

「あの虹の架け橋は人と人を繋ぐ光。それは並大抵じゃ立ち切ることなどできない！」

専用機持ち五人のヒロインズが夕日に照らされ、機体の色と混ざり合う。そして。夕日の色に染まっているヒロイズが一機。純白の白は何者も受け入れる……。

「零落白夜にあの光が纏つた時に感じた暖かみはいつまでも忘れることのできない……いろんな人の暖かみを感じたんだ。それを受ければ誰とだって分かりあえるんだよ！」

専用機全員がここに集い、それぞれの想いをシャアにぶつける。

「君達の瞳は純粹だな。光輝君から渡った心の光をちゃんと理解し

ている。だが人間がみんな分かりあえるなど、ありえないさ」

「シャア、まだそんなことを言つか！ この子たちの内なる可能性を信じろ！ この世界はＥＳの影響で女尊男卑になつてゐるが、この子たちのような気持ちを持つものが増えれば世界は 人は変わつていける！」

「だつたら私に見せてみせろ！ 人の心の光を！ この闇を打ち破れるかな？」

ナイチンゲール シャアの周りに黒いオーラが溢れている。人の心の闇を具現化していく、それは一夏たちにも見えていた。

「あれがあのＥＳの闇なのか？ アムロさん、一体どうするんだよ！？」

「大丈夫だ、一夏。光輝、分かるね？」

「はい！ シャアさんに僕達の想いを！」

ガンダムを纏つた光輝からも緑の光が溢れている。 ガンダムもナイチンゲールもそれから緊迫した空気が流れている。他の七人はそれを見届けることしかできない。これは光輝の覚悟でもあるからだ。

二機は同時に瞬間加速を行い、ガシン！ という音を立て、お互いに手を押し合つ形になった。同時に緑と黒のオーラが周りに拡散する。

「貴方にだつて分かつているはずです……この想いがあれば人と人は分かりあつていけると！」

「だが君のような暖かみを持つたとしても、人はお互ひを傷つける。それを分かるんだよ！ 光輝！」

「分かつてます！ だから」

「だからこそ……」

「世界に人の心の光を見せなければならぬんでしょう（だろ）！？」

「…………」

オーラは一人を中心に広がっているが光が闇を包み込んでいく。無闇に消すのではなく、闇をも受け入れる強さを……。光輝は今まざに人の心の闇すら受け入れている。

「あの悲しみの籠つた叫びが消えていく……？　それに光が……」「闇が……消えていく。それに暖かな光が、包んでいく？」

光が周辺の領域を包み込み、またたく間に周辺は心の光でいっぱいになる。まるでアクシズ・ショックにも似ている。

二人は自然と押し合いを止め、静止している。光輝や専用機組は驚きから周りを見渡している。

「これはまるで……」

「アクシズを包んだ時と同じじゃないか……」

「アクシズって　うわっ！　な、にこれ……」

突然、光輝が光の繭に包まれる。しかし光輝は不思議と恐怖は感じずに安らぎを感じ、そして徐々に意識を失つていった……。

「[ij]は宇宙、なの？」

目が覚めて[ij]が宇宙なのだとすぐに分かった。だつて地球が見

えるんだもん。

「青くて綺麗だね。でも地球を包んでいるあの光つてまさか……」

そう。 地球の周りにあの光 人の心の光が漂つて いるのだ。アムロさんの話して いたアクシズを押し返した時のことだろ うか。 地球を包むかのような光は鮮やかなカーテンみたいだ。見惚れていると後ろから声をかけられた。

「あれが全部、サイコフレームのおかげだとは思いたくないな」

振り返ればそこにはアムロさんがいた。軍の制服らしきものを着ていて、如何にも軍人って感じがするけど、あまり似合つてない……と思つ。

「サイコフレーム?」

「簡単に言えば機体の性能を上げるものだよ。でもまだ謎の部分が多くてね、なぜか人の意志を共鳴して未知のエネルギーを発するんだ。現に君も体験したはずだよ。あの暖かみを具現化できたのもサイコフレームの力だが……全部が全部そうは思いたくないね」「確かにそうですね……。でもそう想う心があつたからこそ反応してくれたんじゃないですか?」

「確かにそうかもしだれないな。それは人の力だね」

「シャアさんにも見せたかつた……人は力を合わせば、どんなことだって乗り越えられるって」

「さつきシャアに会つてな、また人を信じれるかもしだれない。そのきっかけを作つてくれた光輝君にお礼を伝えてくれ、と言われたよ」

あのシャアさんが……? そつか、僕達は分かりあえたつてことなのかな? それが嬉しくて僕は自然と顔が弛んでしまつた。

「その純粹な君の気持ちが人を照らしていく。そして君の強さでもある。君なら力の使い方を分かっているはずだから、これを授ける。光と闇を受け入れて、本当の意味を知った君なら……」

そのアムロさんの声とともに周りがバツと光る。眩し過ぎて眼を開けられないけど

「ニコータイプは戦いの道具ではないことを忘れないでね」

そう言う女性の声を聞き、僕は

繭に包まれてから数分。未だに変化はなく、エリス以外は心配していた。光輝はどうなってしまったのか？ そしてナイチンゲールも動かない。攻撃するべきなのか？

「エリス！ 光輝はどうなってるんだ！？」

「わ、分からないよ。ただ、無事なのは確かだよ。あの繭から暖かみを感じるから。それにあのエリスは待っているようだよ？」

「待ってるって何を！？」

「分からない……っ！ 光輝くんっ！」

そうエリスが叫んだ瞬間、繭が解かれていぐ。その中からでてきたものに全員が驚愕した。

まず目につくのは翼のようなものが背中に着いているが良く見ればフィンファンネルで、左右のフィンネルラックに装備されている。背中の中央にスタビレーター、その下にスラスター、プロペララン

クが装備されている。青と白の一色の装飾はシンプルで綺麗だ。天使のようなその姿は見たものを魅了するほどのものがある。

「それは……一次移行、か」

「そうです。ガンダムが一次移行した姿、H.I. - ガンダムです！」

第一一十七話／対話の果てに（後書き）

ついに登場しましたH.E.です！ 本当はミノフスキードライブとか装備させる予定だったんですが、やめました。作者は ガンダム系統は好きだつたりします。

H.I - ガンダムについて（隨時更新……かな？）

名称
H.I - ガンダム
ハイ二ヨー

世代

正確には分からぬが第四世代の域にはあるだろう。てか普通にそれ以上か？

待機状態

ガンダム状態と同じ、丁字をした首のアクセサリー

概要

光輝が人の心の光と闇を受け入れアムロから授かつた新たな力であり、光輝の中に現れた新たな想いの象徴でもある。

見た目は光輝の腕、足にアーマーがついて、背中にはH.I - 専用のファンネルラックとフインファンネル、プロペラタンク、スタビレーターがついた感じ。決して完全装甲ではない。ちょっとしたところを変更・追加する予定。

サイコバースト時には、蒼色をしたところが緑に変化する。さらにダブルオーライザーのトランザムバーストみたこと也能く。発動させても負荷は掛からぬため安全性が高まつた。

武装

基本 ガンダムと変わらぬがいくつかの変更点が。

・ライフルやキャノン、サーベルのビームの色が青に。でもフィンファンネルのビームはピンクと変わらず。サイコバースト時にはビーム系は縁に変化する。

・ビームサーベルがファンネルラックの左右一つずつに装備されるようになつた。

・全体的に武装の威力が上がつてゐる。もちろん運動性や防御力もです。

・2つ程新装備が

腕部マシンガン

頭部マシンガンと同じく牽制用の武器。しかし頭部マシンガンは少しは威力が上がつてゐる。それでも牽制は牽制である。

ハイパー・メガバズーカランチャーハイ

HI - ガンダムの中では一番の威力を誇るが、発射するたびにシールドエネルギーをもつていかかる。その代わり、これに使うシールドエネルギーを増やすことで威力を上げることも可能。チャージが必要なので連射は不可能。もし、できたとしてもすぐにシールドエネルギーが切れてしまふ。

フィンファンネルの変更点

HI - のフィンファンネルは収納している状態で、射出していく状態にすることもでき、ビームが発射されるところがバーニアにもなり、その場合は機動力が上がる。

また、ファンネルを射出している時もファンネルラックが
バニアになり機動力が上がる。

攻撃、防御、機動に分けるため完全に第四世代の武装となつた。

H - ガンダムについて（随時更新……かな？）（後書き）

まあ、こんな感じでしょ、つか。何かご質問があればお答えしますのでお願いします。

第一十八話／赤の最期とそれぞれの思念（前書き）

臨海学校編は今回が最後です。帰りのバスとかは書きませんから
W W

第一一十八話／赤の最期とそれとの思念

僕とアムロさんはシャアさんと対峙して話をしていた。一次移行したからと言って、僕自身は戦う気はなかつた。それはシャアさんも同じだつた。

「もう、戦う必要はない。君達の輸が少しでも多くの人間に伝えるのを願つてゐるよ」

「あ、ありがとうございます……。これから貴方はどうするんです？」

さつきまで敵だつた相手にそう言われるのはちょっと不自然な気もしたけど、気にしないようにしよう。

いきなりナイチンゲールは光となつて消え、中から人が出てきた。金髪の髪をオールバックにしてマントに濃いめの赤の……軍服？にしては派手な気がするけど、けつこう上の人だつたのかな？まさか、この人がシャアさん？ にしても派手だ。

「私は消えるだらうな。心の闇のおかげで姿を保つていたんだから。でもこれは呪縛でもあつた。それを解いてくれたんだ。感謝する」

「シャア……」

「はい……でもせつかく分かり合えたのに、すぐに消えてしまふなんて……」

「もう悲しむ」とはない。私はララアの元へ行くだけだ。そこで君たちを見守つてこいつと思つ」

「ララアって誰？ そう聞くとしたけど

「光輝、悪いがララアの事についてはいざれ話す。その時まで待つてくれるかな？」

「え、ええ。良いんですけど……」

と断られてしましました。この様子だとけつこう隠してることがありそうだね。いつか絶対話して貰いますからー。

「やつ言つことだ。時に光輝君？ 握手をしてくれないかな？」
「握手ぐらこなら何回でもいいですよ」

そう言い、IRSを解除してシャアさんの手を握る。その手はとても温かく大きいものだった。優しさに溢れた大きな手で安心を覚えるよ。

「君の手は小さいが、私には大きく感じるよ。優しさと慈愛を併せ持つたこの手なら誰だって助けられるし、導くこともできるだろう」

意外な答えにちよつと照れてしまつ。そう言われたのは初めてだなあ。

つて！ シャアさんの手が消えてく……！

「もう消えてしまうか……。アムロ、この子たちを頼んだぞ？」
「任してくれ、シャア。またいつか会える日を願うよ」
「君とはゆつくり話がしたかったな。専用機持ちのみんなもその力を誤った方向に持っていくなよ？ そうすればおのずと自分の為すべきことが見えてくるはずだ」

僕以外の全員も戸惑いが隠せないがその言葉の重みを知り、全員頷く。この間にもシャアさんの身体が消えていく。

「さて光輝君。君やエリスのような能力を持つものがまた現れるようだが、絶対に争つてはいけない。絶対に分かり合つんだ。良いな？」

「大丈夫です！だから見ていてください！人は変わりますから！」

「それでこそ君だ。さて……」

シャアさんの身体が完全に消える前に

「今行くよ……『ララア』」

そう言い残して赤い彗星 シャア・アズナブルは光となつて消えていった……。

その日の夜、夕飯も済ましお風呂も入つてゆつくりしているとHリスさんからの連絡で浜辺に来ていた。一人きりで話したいとのことでアムロさんは部屋に置いてきた。

夕方の戦闘から帰つて来た時は無断出撃でお母さんに凄く怒られたけど、どこか安心した声で僕達の帰りを迎えてくれた。ガンドムが一次移行したことはまだ話していないけど、まあ良いと思つてか戦闘をモニターで見てたと思うし知つてるのかな？

「まあいいか）。しかし恐ろしく長い一日だった……」

束さんの登場、篠さんの専用機「赤椿」、銀の福音の暴走、そし

て赤い彗星 シャアさんとの一度目の戦い、対話。こんなことが今日一日での出来事なんて思い返してみると疲れがふと出てくる。せっかくお風呂に入つたのに。

「でも、なんか不自然な気がする……」

束さんが簫さんへ赤椿をあげた直後に福音の暴走。これって本当に偶然なの？ 束さんの目的って一体……。

止めようか。当の束さんもいつの間にか居なくなつたようだし、いつかまた会つた時に聞きたそつ。凄く不自然過ぎる……。

「！」光輝くん？

夜の風を浴びながら砂浜に座つて考えていると後ろから聞き覚えのある声がする。振り向けばなぜか水着姿のエリスさんが顔を赤くして僕を見ていた。うん、やっぱりいつ見ても似会つてるよね。

「僕も水着で着るべきだったの？ 泳ぐわけでもないし浴衣できちやつたけど」

「そこは気にしないでっ！ 私が勝手に着てきただけだから……」

「なるほど、できるだけ気にしないようにするよ」

僕がそう言つとエリスさんは何か決心したのか、僕の横に座つてくれた。なんか緊張してるようだけど大丈夫なのかな？

それから数分は二人ともだんまりだつた。僕は夜空や海の音を楽しみながら座つていたけど、常に顔は赤いし、髪を指にクルクル卷いたり、手を無意味に動かしたり、なんか不安定？ って言つたら失礼だけどそんな感じだ。

「さつきから　」

「あ、あのセー。」

「きなりの声にちよつとビックリしてしまひ。今のエリスさんおかしいよ……。」

「光輝くんは、す、好きな人って……いる、の？」

「これは異性がって意味なのかな？　しかし、どこか脅えてこるような声。原因は分からぬ。」

「せうだね……。そういうこと聞かれると自体が初めてだから戸惑うけど、そういう人は居ないよ。僕は友達がいてくれるだけでいい。でも、もし僕を好きでいてくれる人がいるなら僕はその人を一生好きで居続けたい」

「だつて途中で別れるなんて寂しいんだもん。だつたらずっと一生に居たいよ。僕は一人が怖いから……。」

「そう、なんだ……。えっとね、わたしは　ひやつ」

「そうエリスさんが続けようとした時、どこからか激しいプレッシャーを感じた僕は背陰に隠れるが、エリスさん押し倒すような格好になってしまった。しかもお互いの鼻が付きそつながらいの近距離だった。」

「エリスさん、ご、誤解しないでね。激しいプレッシャーを感じたから咄嗟にこうしただけで……」

「うん、分かつてるので、光輝くんになりじつやって、う、強引に

それでもいいよ?」

Hリスさんは目を閉じ、何かを待つているような感じだ。これは……引き込まれそうだ。そのまま僕はエリスさんの唇に

ガシャン

……その音が僕を現実に戻してくれた。この音はまさか……

顔を上げるとHISを装備したセシリ亞さんにスター・ライトMark?、ラウラさんが右肩のレールカノンで僕を捕捉していた。しかも結構な近距離で……。激しいフレッシュヤーはこの二人からだけど、ここまで怒りは……。僕はここでやられてしまうのか!?

「あら、光輝さん。こんなところでなにを! してらっしゃいますの?」

「ふん、夜に抜け出して何かと思えば……お前はそういう奴だったのか?」

「ち、違つよ! 一人とも落ち着いて! Hリスさんも何か言つてよ!」

「一人とも……これで私が一歩リード? じゃないかな?」

その言葉に一人がキレた。あ、死んだな僕。

「光輝、立て」

「さあ光輝さん? あちらでゆつくりお話を聞かせて下さいな?」

僕は背中から一人にホールドアップされ、歩いて移動した。こんなことならエスを持つてくるべきだった……!

僕はセシリアさんとウラさんに事情聴取と言う名の拷問を一時間程受け、解放された。終わってからエリスさんが来てくれて、途中まで一緒に帰った。ホント、ソソリトラブルが多いというか、災難だ。

「ごめんね光輝くん。助けることが出来なくて……」

「だ、大丈夫だよ。それより、今度一緒にこの能力の事を聞かない？」アムロさんなら何か知ってるようだし、気になるからさ

「いいよ。何か知ってるのなら是非とも聞きたいよ」

そんな会話をしながら僕達はそれぞれの帰路についた。さて、あの拷問のせいで疲れ過ぎて眠くないよ……。ちゃんと寝れるかな？

光輝がエリスに呼ばれた同時刻、篠ノ之束は岬の柵に腰を掛けた。目の前には海が広がっており、高さ30mはあるというのに足をブランカラさせている。

「赤椿の稼働率は絢爛舞踏けんらんぶとうを含めて42%かあ。まあこんな感じかな？」

空中投影のディスプレイに浮かび上がったデータを見ながら無邪気に微笑む。

子供のような頬笑みだが、どこか意味深な頬笑みでもあった。

鼻歌を歌いながら別のディスプレイを出す。それは白式の一次移行したときの戦闘映像だった。

「それにしても白式には驚かされるな。操縦者の生体再生まで可能だなんて、まるで」

「まるで『白騎士』のようだな。コアナンバー001にして初の実験機投入機、お前が心血注いだ一番目の機体に、な」

束の後ろの森から出でてきたのは漆黒のスーツを着た千冬だった。音もなく近づき、まるで環境に一体化しているようだ。

「やあ、ちーちゃん」

「おう

二人は互いの方を向かず、千冬は木に身を預け、束はまた足をグラブラさせている。顔を見なくともどんな表情かは分かる。この二人にはそのぐらいの信頼がある。

「いやあ、白式も凄いけど ガンダムもナイチングールも凄いよね。私でもあそこまでのIISは今の私には無理かな」

そう言つてまた別のディスプレイを出す。それは ガンダムとナイチングールの戦闘映像に人の心の光が周辺を包み込んだ映像がながされている。この光を見て、束はどう思つたのか？

「綺麗だよね。これを見たら人と人が分かり合えるつて……ふふつ、面白いね」

「……綺麗だな。だがこれを見たら心が暖かくなる。これがあの子の力か」

「でも、所詮は綺麗事だね。じーくんも甘いよ」

さつきまで明るかつた束とは違い、暗い声で喋る束。極度の他人嫌いの束には光は届いてないようだ。束にとって、光輝も信頼でき

る数少ない人物だが今の束は光輝を否定している。

「だがその純粋な気持ちがあの子の最大の強さだ。お前なんかには分からぬんだろうがな」「分からいないね。まあ貴重なデータが取れただけでも良しとしよう」「…………」

千冬は何も喋らない。「この時の千冬は怒りに満ちていたか？ それとも

「今日は有意義な一日だったよ。いろんなものも見れたし、何より、大好きなちーちゃんにも会えたしね」

「最後のは余計だ、馬鹿」

「相変わらずだね。さて、最後に天才の束さんからのメッセージ！ ガンダムはまだまだ現れるから死なないようにな。でも全部が全部、敵じゃないかな？」

強い風が吹き、刹那 束は消えた。

「全く……変わらないな」

そう言ってほほ笑む千冬。だが千冬にも束の行おうとしているところまでは分からなかつた。

「光輝、いつか束を救つてやつてくれ……」

千冬はその場を後にした。この数分後、光輝への拷問が始まったのである。千冬はそれに気付かつた。

第一十八話／赤の最期とそれぞれの思念（後書き）

「」で皆様に質問なのですが、アムロに専用気持ちのメンバーに自分の過去を話すやうと思つのですがどうですかね？

すいませんが応えていただけませんか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8475s/>

IS《インフィニット・ストラatos》 駆け抜ける光

2011年11月27日22時47分発行